日田市

求来里の遺跡Ⅲ　小西遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第91集

2010年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第91集

求来里の遺跡Ⅲ

―県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）―

小西遺跡の調査

２０１０年

日田市教育委員会

求来里川流域遠景（北西から）

調査区遠景（北から）

序　文

求来里地区は日田盆地の東部に位置し、その中央を流れる求来里川によって形成された沖積地に水田が広がる長閑な農業地域であります。

この求来里川流域では平成 14 年度より、圃場整備や市道改良、河川改修工事が実施されるのに伴い、多くの発掘調査が行われ、旧石器時代から近世に至る遺物・遺構が発見されてまいりました。

本書では、圃場整備工事に伴って、平成 16 年度に実施した小西遺跡の調査内容を報告しています。調査では弥生時代後期を中心とした集落が確認され、求来里川流域だけでなく、遺跡北側の台地上に広がる祇園原遺跡など周辺地区の集落との関係を含め、盆地東部の弥生時代後期を考える上で重要な発見がありました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事いただきました作業員の皆様、地元の方をはじめとして調査にご協力いただきました方々に、心から厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 2 月

日田市教育委員会

教育長　合 原　多 賀 雄

例　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成 16 年度に実施した小西遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、平成 16 年度に県営経営体育成基盤（圃場整備）整備事業　求来里地区の工事実施に伴い、大分県日田地方振興局（現、大分県西部振興局）の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。

3．調査にあたっては、求来里地区圃場整備組合 (故) 室文男組合長、伊藤彧忠副組合長（現、組合長）をはじめ、地元の 方々、市経済部農政課（現、農林振興部農業振興課）のご協力を得た。

4．調査現場での実測は若杉が行った他、雅企画有限会社に委託した。

5．本書に掲載した遺物実測図は明大工業株式会社に委託したもののほか、若杉が行ったものを使用した。また、製図については、遺物実測図を明大工業株式会社・雅企画有限会社、遺構配置図を除く遺構図を雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。

6．遺物実測については、今田秀樹（市文化財保護課）の協力を得た。

7．空中写真は九州航空株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。

8．遺物写真は明大工業株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。

9．個別遺構図中の方位は磁北である。

10. 遺物写真に付した番号は、実測図番号に対応する。

11. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターで保管している。

12. 本書の執筆は若杉が行った。

日田市の位置

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過と組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

（1）　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

（2）　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅲ　調査の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

（1）　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

（2）　遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1．竪穴住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

2．竪穴遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

3．掘立柱建物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

4．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

5．その他の遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

Ⅳ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

挿 図 目 次

第 1 図　小西遺跡周辺地形図（1/5,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 2 図　求来里川流域の主要遺跡分布図（1/15,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第 3 図　遺構配置図（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7～8
第 4 図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 5 図　1号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 6 図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 7 図　2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 8 図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 9 図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第 10 図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 11 図　5号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 12 図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 13 図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 14 図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 15 図　7号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 16 図　8・9号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 17 図　9号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 18 図　12 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 19 図　12 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 20 図　13 号竪穴住居跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・18
第 21 図　14 号竪穴住居跡実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 22 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第 23 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 24 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（3）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第 25 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（4）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第 26 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（5）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 27 図　15・16 号竪穴住居跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・25
第 28 図　17 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 29 図　竪穴遺構実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 30 図　竪穴遺構出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 31 図　掘立柱建物実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第 32 図　土坑実測図（1）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第 33 図　土坑実測図（2）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第 34 図　土坑実測図（3）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 35 図　土坑出土遺物実測図（1）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 36 図　土坑実測図（4）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 37 図　土坑実測図（5）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 38 図　土坑出土遺物実測図（2）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 39 図　土坑実測図（6）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 40 図　土坑出土遺物実測図（3）（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 41 図　土坑実測図（7）（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第 42 図　その他の土器実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 43 図　出土石器実測図（1：1/1、2～8：2/3、9～12：1/2）・・・・・・・・・・・・・・42

挿入写真目次

写真１　発掘作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・表目次下
写真２　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

写真図版目次

巻頭写真図版上　求来里川流域遠景（北西から）
下　調査区遠景（北から）
写真図版１上　調査区遠景（西から）
下　調査区全景（南から）
写真図版２上　１号竪穴住居跡発掘状況（南から）
中　１号竪穴住居跡遺物出土状況
下　１号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版３上　２号竪穴住居跡発掘状況（北東から）
中　４号竪穴住居跡発掘状況（北西から）
下　４号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版４上　５号竪穴住居跡発掘状況（南西から）
中　５号竪穴住居跡遺物出土状況
下　５号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版５上　６号竪穴住居跡発掘状況（南西から）
中　６号竪穴住居跡遺物出土状況
下　６号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版６上　７号竪穴住居跡発掘状況（北西から）
中　７号竪穴住居跡屋内土坑遺物出土状況
下　12 号竪穴住居跡発掘状況（西から）
写真図版７上　12 号竪穴住居跡遺物出土状況
中　13 号竪穴住居跡発掘状況（北西から）
下　13 号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版８上　14 号竪穴住居跡発掘状況（北東から）
中　14 号竪穴住居跡遺物出土状況
下　14 号竪穴住居跡遺物出土状況
写真図版９上　14 号竪穴住居跡遺物出土状況
中　14 号竪穴住居跡遺物出土状況
下　15 号竪穴住居跡発掘状況（南西から）
写真図版 10 上　16 号竪穴住居跡発掘状況（西から）
中　17 号竪穴住居跡発掘状況（西から）
下　１号竪穴遺構発掘状況（南東から）
写真図版 11 上　掘立柱建物発掘状況（南東から）
中　１号土坑発掘状況（北東から）
下　２号土坑発掘状況（東から）
写真図版 12 上　３号土坑発掘状況（北東から）
中　５号土坑発掘状況（南から）
下　８号土坑発掘状況（東から）
写真図版 13 上　９号土坑発掘状況（北西から）
中　10 号土坑発掘状況（西から）
下　12 号土坑発掘状況（西から）
写真図版 14 上　16 号土坑発掘状況（南から）
中　17 号土坑発掘状況（北西から）
下　18 号土坑発掘状況（北東から）
写真図版 15 上　20 号土坑発掘状況（南から）
中　22 号土坑発掘状況（北西から）
下　24 号土坑発掘状況（北西から）
写真図版 16 上　27 号土坑発掘状況（東から）
中　33 号土坑発掘状況（南から）
下　36 号土坑発掘状況（北西から）
写真図版 17　１，２，４，５号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 18　５～７，12 ～ 14 号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 19　14 号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 20　14 号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 21　14 号竪穴住居跡、３号竪穴遺構
４，６，８号土坑出土遺物
写真図版 22　18，20，24，32，33，35 号土坑、
その他の出土遺物
写真図版 23　出土石器

表 目 次

第１表　検出遺構時期変遷表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第２表　出土土器観察表（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第３表　出土土器観察表（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第４表　出土土器観察表（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第５表　出土土器観察表（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第６表　出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

写真１　発掘作業風景

Ⅰ　調査に至る経過と組織

（1）調査に至る経過

県営経営体育成基盤整備事業求来里地区全体の調査の経緯については、『求来里の遺跡Ⅰ』に記述しているので、ここでは省略し、小西遺跡の調査の経緯について述べる。

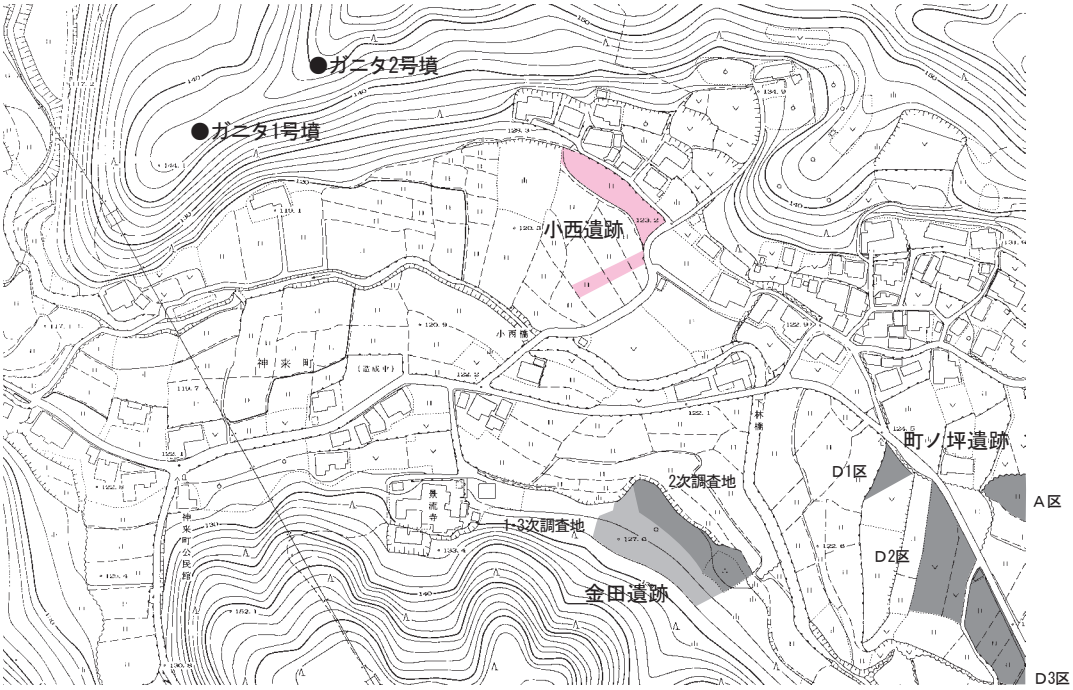
神来２工区内に存在する小西遺跡の発掘調査は、大分県日田地方振興局耕地課（現大分県西部振興局農林基盤部、以下県耕地課）の工事の進捗に合わせ、平成 16 年度前半に実施する予定としていた。しかし、この年度は小西遺跡の他に前年度からの継続となる町ノ坪遺跡Ｂ区及び金田遺跡・町ノ坪遺跡Ｄ区が調査予定になっていたことから、その実施時期が課題となった。当初は、継続調査である町ノ坪遺跡Ｂ区と小西遺跡を年度前半に、金田遺跡と町ノ坪遺跡Ｄ区を年度後半に行う予定としていた。しかし、県耕地課との協議を進める中で、小西遺跡周辺の用水の関係から休耕時期が平成 17 年度にずれ込むことになった。このことから、年度前半に金田遺跡の調査を実施し、小西遺跡は町ノ坪遺跡Ｄ区とともに稲刈り後の年度後半に調査を行うこととした。契約については、小西遺跡と町ノ坪遺跡Ｄ区の調査が同時進行になることから、作業上の利便性や事務手続きの軽減を図る目的で２遺跡での委託契約を結ぶことになった。

以上の経過により、平成 16 年 11 月 12 日に委託契約を取り交わし、11 月 30 日から平成 17 年 3 月 20 日までの予定で、発掘調査に着手した。なお、調査開始後、遺構密度が予想より低かったこと、町ノ坪遺跡Ｄ区の調査対象面積が減少したことにより、業務費の減額が生じたものの、天候不順が続き、調査期間の延長が必要となったことから、平成 17 年 3 月 1 日に変更契約を締結した。その後、3 月 25 日に小西遺跡の発掘調査を終了、町ノ坪遺跡Ｄ区については、表土剥ぎを一部実施して、次年度の継続調査とした。なお、平成 16 年度の整理作業は平成 17 年 1 月 25 日から 3 月 25 日の間、行った。

以下、平成 17 年度以降の委託契約の内容と期間を記す。

平成 17 年度　平成 17 年 4 月 26 日～平成 18 年 3 月 20 日　整理作業(町ノ坪遺跡Ｄ区:発掘調査･整理作業)

平成 18 年度　平成 18 年 4 月 10 日～平成 18 年 12 月 15 日　整理作業（町ノ坪遺跡Ｄ区のみ）



第１図　小西遺跡周辺地形図（1/5,000）

その後整理作業が終了したことから、平成 20・21 年度は報告書作成・印刷業務を行う他の遺跡とともに、契約を一本化した。

平成 20 年度　平成 20 年 5 月 7 日～
　　平成 21 年 3 月 19 日　報告書作成

平成 21 年度　平成 21 年 5 月 1 日～
　　平成 22 年 3 月 19 日　報告書印刷

また、調査の経過は以下のとおりである。

11 月 30 日　機械による耕作土除去開始
12 月 10 日　耕作土除去終了
12 月 14 日　遺構検出開始
1 月　5 日　遺構掘り下げ開始
1 月 11 日　基準点測量実施
1 月 12 日　遺構実測開始
2 月　上旬　積雪のため、調査を数日中断
（3 月 8 日　町ノ坪遺跡Ｄ区の耕作土除去開始）
3 月 19 日　空中写真撮影実施
3 月 25 日　器材整理・撤収を行い、調査終了

写真２　掘立柱建物跡

調査終了後の 3 月 31 日に日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、4 月 19 日に埋蔵文化財の認定を受けた。

（2）調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。（なお、職名・氏名は当時のままとしている）

平成 16 年度（2004）／発掘調査・整理作業

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　後藤　清（日田市教育庁文化課長）
調 査 事 務　髙倉隆人（日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）
　　伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）
調 査 担 当　若杉竜太（日田市教育庁文化課主任）
調　査　員　土居和幸（日田市教育庁文化課主査）行時桂子、渡邉隆行（以上、同主事）
発掘作業員　足立米子　穴井生海　穴井正利　安藤一枝　諫元正隆　石谷アサカ　江藤キミ子
　　荏隈アイ子　荏隈マサ子　鍛冶谷健史　河津定雄　河津信義　河津満子　河津モリ
　　河部松子　北澤幾子　小下一　五島絹代　財津勲子　財津高子　定賀和子　庄内武子
　　髙倉エミ子　髙倉美津子　高野瞳　田中傳江　谷口芳枝　中川照美　中島カズ子
　　信岡アイ子　藤本弥八　松間敦子　本松シヅエ　森本絹子　吉長利夫
整理作業員　穴井トヨ子　梶原ヒトエ　坂本和代　安元百合

平成 17 年度（2005）／整理作業

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　後藤　清（日田市教育庁文化財保護課長）

調 査 事 務　髙倉隆人（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）

整 理 担 当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）

調　査　員　土居和幸（日田市教育庁文化財保護課副主幹）

今田秀樹、行時桂子、渡邉隆行（以上、同主任）、矢羽田幸宏（同主事補）

整理作業員　穴井トヨ子　井上とし子　宇野富子　梶原ヒトエ　川原君子　黒木千鶴子　坂口豊子

佐藤みち子　武石和美　田中静香　中原琴枝　聖川暢子　安元百合　吉田千津子

平成 20 年度（2008）／報告書作成

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　原田文利（日田市教育庁文化財保護課長）

調 査 事 務　井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

田中正勝（同専門員）、塚原美保（同主査）

報告書担当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）

調　査　員　今田秀樹、行時桂子（以上、日田市教育庁文化財保護課主査）

渡邉隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事）、比嘉えりか（同嘱託）

平成 21 年度（2009）／報告書印刷

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　原田文利（日田市教育庁文化財保護課長）

調 査 事 務　北村羊（日田市教育庁文化財保護課主幹兼埋蔵文化財係長）

河津美広（同専門員）、塚原美保（同主査）

報告書担当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）

調　査　員　今田秀樹、行時桂子（以上、日田市教育庁文化財保護課主査）

渡邉隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事）、比嘉えりか（同嘱託）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

小西遺跡の所在する求来里地区は盆地の東部に位置し、大字東有田大石峠を源とする求来里川により形成された沖積地が狭い谷状の地形を呈している。求来里川は谷の中で大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約２㎞の地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、圃場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、広域農道建設や市道建設などによる発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に周辺の遺跡を概観していく。

小西遺跡より南側 200 mの台地裾には、弥生時代中期から古墳時代後期を中心とする集落が確認された金田遺跡 (2) が存在する。また、遺跡の北東側には町ノ坪遺跡 (3) が所在する。調査では古墳時代中期～後期の集落が確認された。これらの遺跡では、特に古墳時代中期の集落において朝倉産や陶邑産の初期須恵器や朝鮮半島系土器が出土しており、カマド導入期の集落の様相が窺うことができる。

町ノ坪遺跡南側には、縄文時代の竪穴遺構や古墳時代の集落、中世の四面庇の建物が見つかった求来里平島遺跡 (4) が存在する。古墳時代中期の住居は金田遺跡や町ノ坪遺跡と同様に導入期カマドを備えることで注目される。さらに求来里平島遺跡の南側には弥生時代・古墳時代の包蔵地である着来遺跡 (5) がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期の包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地が確認された名里遺跡 (6) が存在する。

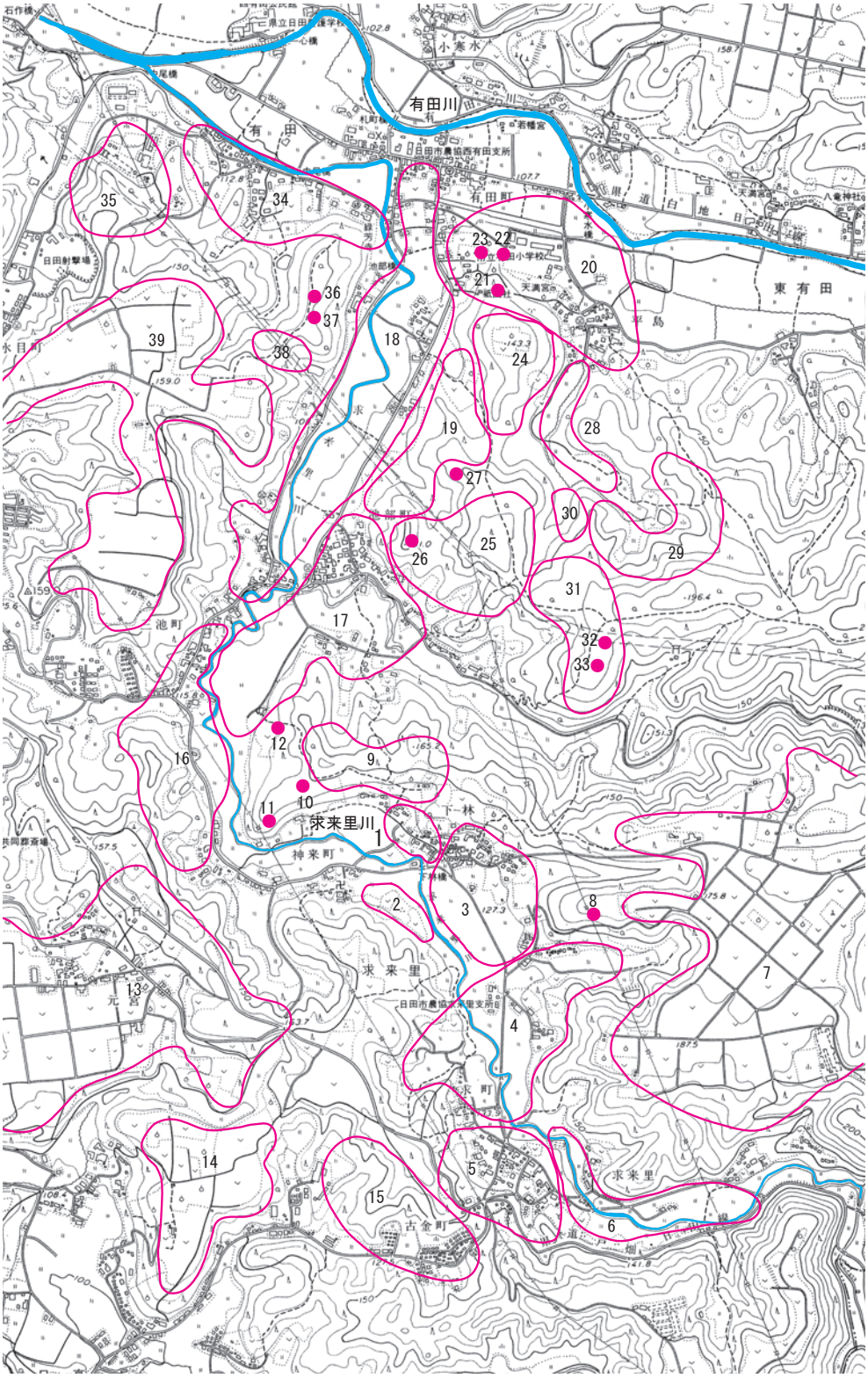
一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯は旧石器時代・縄文時代・古墳時代の包蔵地である町野原遺跡 (7) が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳 (8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、３基の円墳からなるガニタ古墳群 (10 ～ 12) がある。

また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の甕棺墓・石棺墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡 (13) が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係を想起させる。

さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約 600 mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡 (16) がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代後期の埋甕や平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡 (17) や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300 枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾漕遺跡 (18) が存在する。さらに求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった祇園原遺跡 (24)、古墳時代から古代を中心として集落が確認された長迫遺跡 (19)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本１号墳 (21) などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓などが確認された大迫遺跡 (38) や３基の円墳からなる中尾古墳群 (36,37) が存在する。

(参考文献)
『平成 15 ～ 18 年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2004 ～ 2008
村上久和・友岡信彦・染矢和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6）大分県教育委員会　1997
行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 13 集　日田市教育委員会　1998
土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 16 集　日田市教育委員会　1998
友岡信彦・松本康弘『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（9）大分県教育委員会　1998
村上久和・原田昭一編『尾漕遺跡』大分県文化財調査報告書第 112 輯　大分県教育委員会　2000
若杉竜太編『平島遺跡Ｄ地点　塔ノ本古墳　祇園原遺跡２次　長迫遺跡Ｃ地点　長迫遺跡Ｄ地点　尾漕遺跡６次』日田市埋蔵文化財調査報告書第 28 集　日田市教育委員会　2001
行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 30 集　日田市教育委員会　2001
土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 38 集　日田市教育委員会　2003

行時桂子編『尾漕２号墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第 69 集　日田市教育委員会　2006
行時桂子編『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 77 集　日田市教育委員会　2007
行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 81 集　日田市教育委員会　2007
行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 87 集　日田市教育委員会　2008
田中裕介・原田昭一・松本康弘編『求来里平島遺跡Ｄ区、求来里名里遺跡Ａ区１次調査区、金田遺跡１次調査区、金田遺跡３次調査区』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 31 集　大分県教育庁埋蔵文化財センター　2008
渡邉隆行編『求来里の遺跡Ⅰ　町ノ坪遺跡Ｂ区』日田市埋蔵文化財調査報告書第 88 集　日田市教育委員会　2009
若杉竜太編『求来里の遺跡Ⅱ　金田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 89 集　日田市教育委員会　2009



1 小西遺跡
2 金田遺跡
3 町ノ坪遺跡
4 求来里平島遺跡
5 着来遺跡
6 名里遺跡
7 町野原遺跡
8 亀ノ甲古墳
9 倉迫遺跡
10 ガニタ１号墳
11 ガニタ２号墳
12 ガニタ３号墳
13 元宮遺跡
14 東寺原遺跡
15 古金遺跡
16 馬形遺跡
17 森ノ元遺跡
18 尾漕遺跡
19 長迫遺跡
20 平島遺跡
21 塔ノ本１号墳
22 塔ノ本２号墳
23 塔ノ本３号墳
24 祇園原遺跡
25 狐迫遺跡
26 尾漕１号墳
27 尾漕２号墳
28 石ケ迫遺跡
29 平島横穴墓群
30 クビリ遺跡
31 有田塚ケ原遺跡
32 ツカケ原１号墳
33 ツカケ原２号墳
34 宮ノ下遺跡
35 堂迫遺跡
36 中尾１号墳
37 中尾２号墳
38 大迫遺跡
39 中尾原遺跡
※本文中の括弧数字は分布図の番号に対応

第２図　求来里川流域の主要遺跡分布図（1/15,000）

Ⅲ　調査の内容

（1）調査の概要（第３図）

調査は北西‐南東方向が長さ約 80 m、幅約 15 ～ 20 m、北東‐南西方向が長さ約 55 m、幅約７～８ｍの逆「Ｌ」字形の調査区で行なった。遺構検出面は暗黄色系の粘質土で、水田基盤土より約 10 ～ 20 ㎝下で確認された。なお、調査区の北西端は、約１m削平をうけており、遺構等は確認されなかった。調査区内の標高は北東側は 120.5 ～ 122.5 ｍで最も高くなっていた。また、調査区内をＡ８～Ｇ 13 までグリッドで区画し、遺構検出時や遺物の取上げ等で利用している。

調査では、竪穴住居跡 14 軒、竪穴遺構３基、掘立柱建物１棟、土坑 37 基、その他柱穴・ピット等が多数確認された。調査中、竪穴住居跡や土坑として遺物の取上げ等を行っていた遺構があるが、その後、切り合い関係や竪穴住居跡と判断するには材料に乏しかったことから、竪穴遺構としたものがある。また、土坑については、撹乱と判断したものがあり、それらの遺構番号については欠番としている。（欠番・・・竪穴住居跡：3,10,11 号、土坑：13,25,26,38,41,42 号）

（2）遺構と遺物

１．竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第４図　図版２）

調査区の東側、Ｂ９・Ｃ９グリッド付近で確認された。平面形は長方形を呈し、南壁以外の壁際にはベッド状遺構がみられる。規模は東西軸約 7.1 ｍ、南北軸約 5.3 ｍ、深さはベッド状遺構まで約 15 ㎝、床面まで約 30 ㎝を測る。床面の中央付近には炉跡とみられる落ち込み、南壁際には屋内土坑がみられる。また、一部の壁際には周溝が掘り込まれている。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本と考えられ、その深さは 48 ～ 63 ㎝である。

遺物は弥生土器甕、高坏、鉢が出土している。

出土遺物（第５図　図版 17）

１・２は甕である。１の口縁部は外傾して短く立ち上がり、端部は角張らせて仕上げる。３・４は鉢である。３は外面にタタキが見られ、底部は尖り気味である。４は口縁端部を鋭く、角張らせて仕上げ、底部は平底気味である。５・７は高坏である。５は脚部か。端部の器壁は厚く仕上げ、端部は丸味を帯びる。６は坏部が深く、口縁部は外に開くが、端部をやや内湾させて仕上げる。脚部は低く、端部はやや内湾する。７は脚部である。上面は坏部との接合部の調整が残る。裾近くには穿孔が施されるが、数は不明である。

２号竪穴住居跡（第６図　図版３）

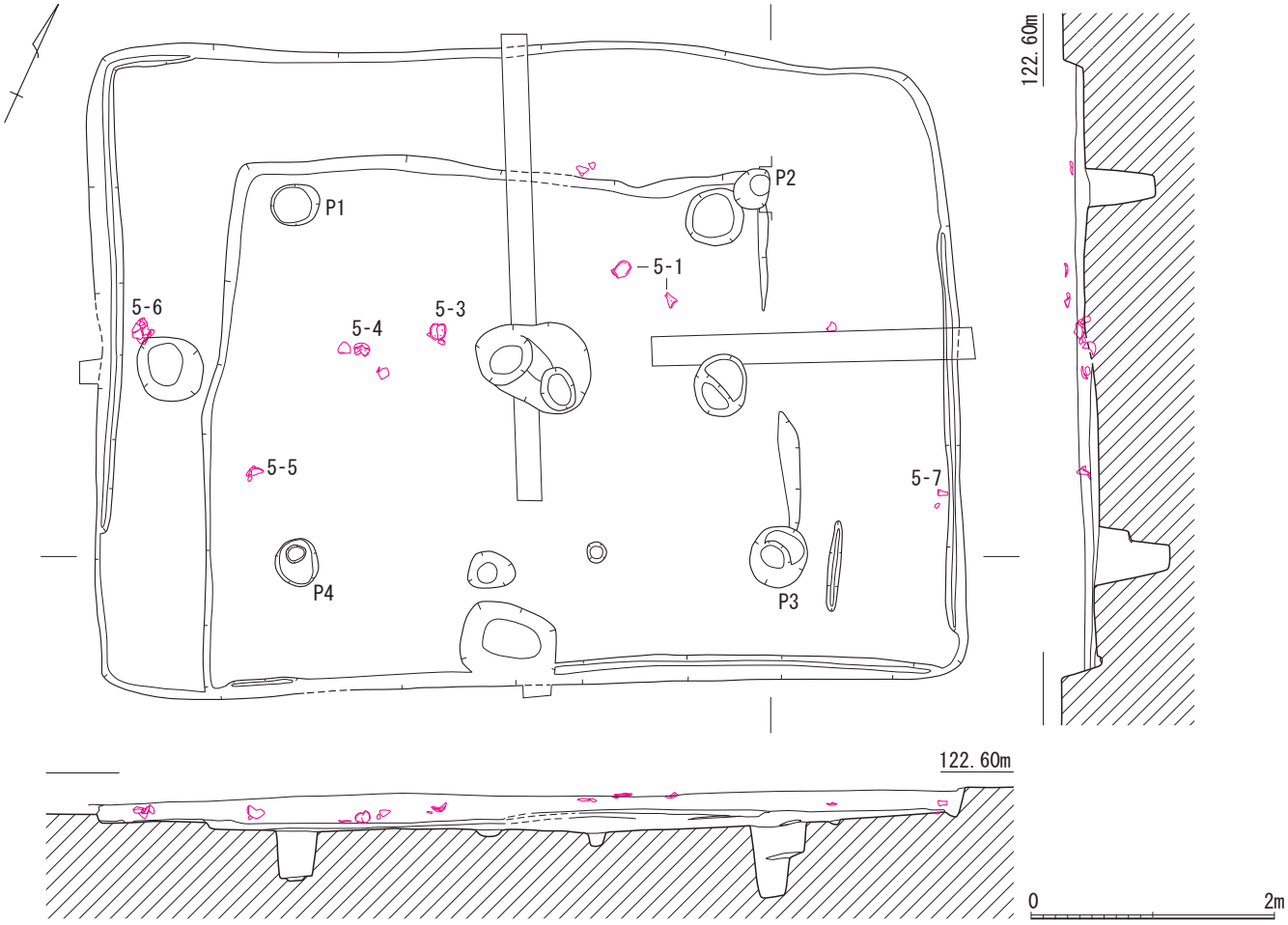
調査区中央、Ｄ９・Ｄ 10 グリッド付近で確認され、４号竪穴住居跡、３号竪穴遺構を切り、７・10・22 号土坑を切る。平面形は台形状を呈する。規模は北東壁で約 3.5 ｍ、南西壁で約約 4.0 ｍ、北西 - 南東軸で約 4.0 ｍ、床面までの深さは約 20 ㎝を測る。床面は礫混じりの締まった土で、炉跡らしき焼土は確認できなかったが、南西壁際に屋内土坑がみられる。主柱穴はＰ１・Ｐ２に２本と考えられ、深さはＰ１は 19 ㎝であるが、Ｐ２については周囲に別の掘り込みがあり、床面が明確ではないが、推定でおよそ 40 ㎝とみられる。

遺物は弥生土器甕・壺が出土している。

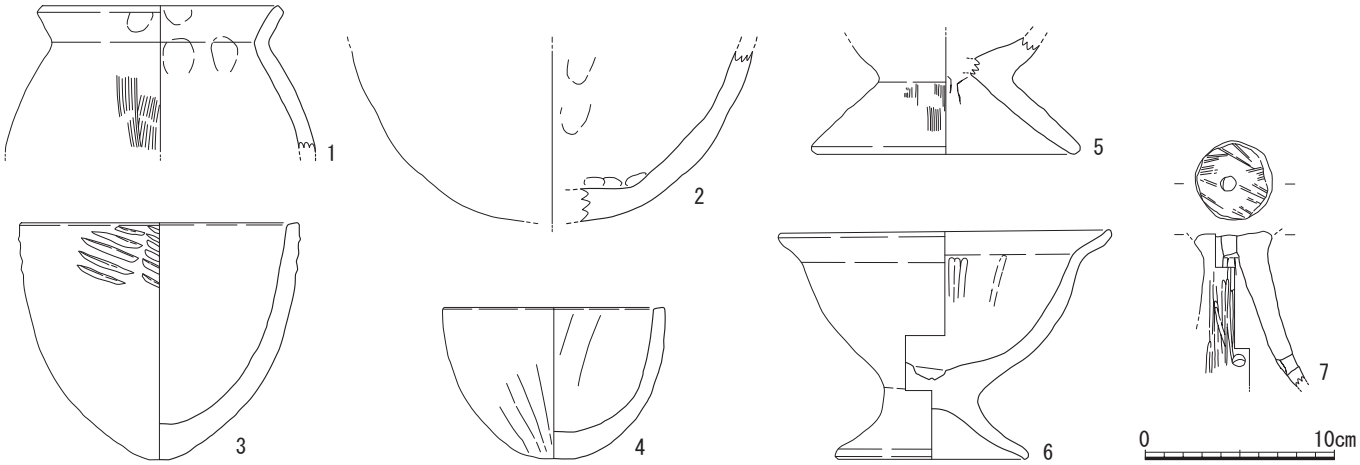
出土遺物（第７図　図版 17）

１は壺である。口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は丸味を帯びる。４は長頸壺の口縁部である。端部に刻み目を施す。５は壺の胴部である。断面台形の刻み目突帯を貼り付ける。

第３図　遺構配置図(1/200)



第４図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

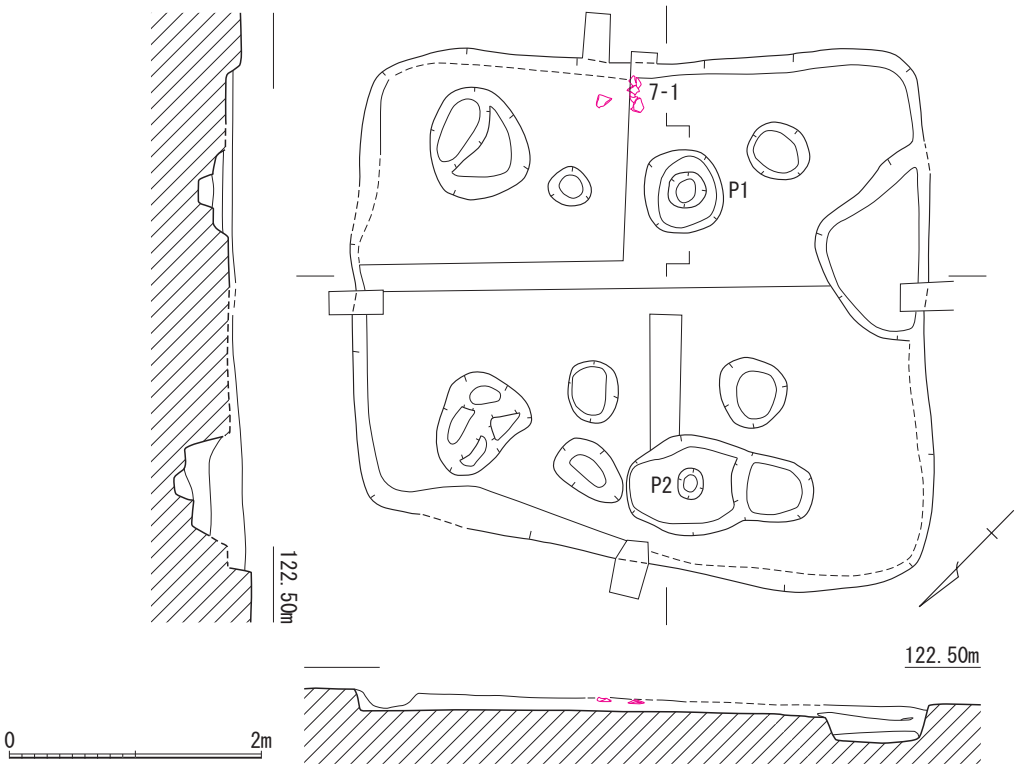


第５図　１号竪穴住跡出土遺物実測図（1/4）

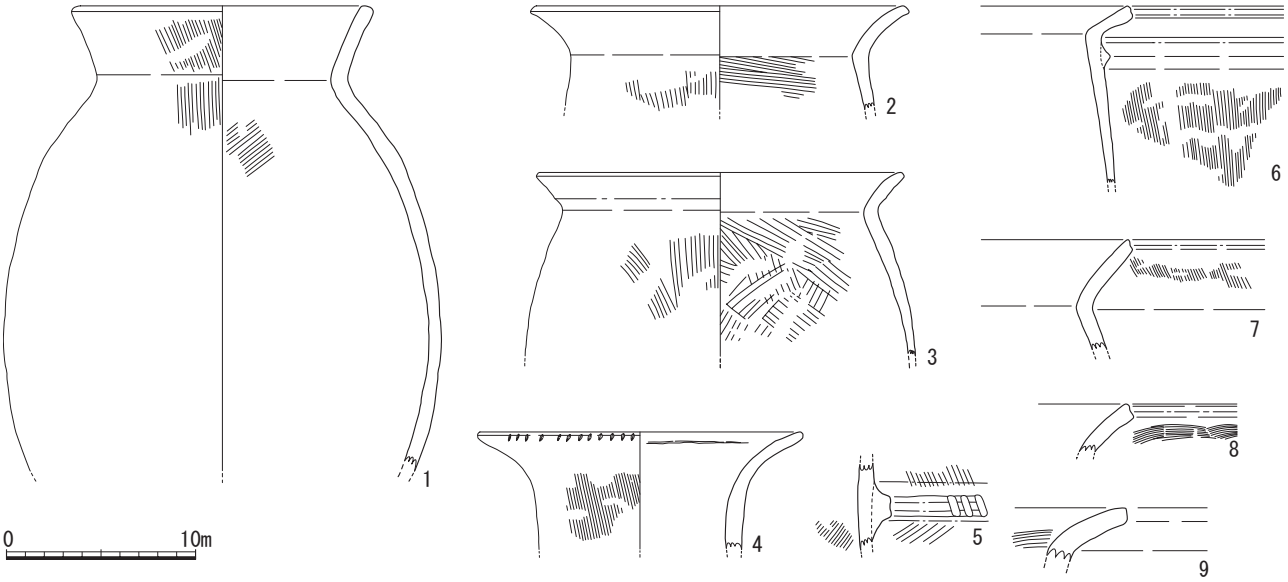
２・３・６～９は甕である。２は口縁部が外反して立ち上がる。６～８は口縁端部に沈線状に窪ませている。

４号竪穴住居跡（第８図　図版３）

Ｃ９・Ｄ９グリッド付近で確認され、２・５号竪穴住居跡、３号竪穴遺構、16・33号土坑に切られる。そのため、北半分と南西側は削平されているが、平面形は方形を呈するとみられる。その規模は北東-南西軸で約5.9ｍ、北西-南東軸で約6.1ｍ、床面までの深さは約20㎝を測る。床面中央よりやや南東寄りには焼土が確認され、炉跡の可能性があるが、部分的なため断定できない。また、南西壁際に屋内土坑が見られる。主柱穴はＰ１～Ｐ



第６図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）



第７図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

４の４本と考えられ、深さは 28 ～ 40 ㎝を測る。

遺物は弥生土器甕・壺・鉢・高坏などが出土している。

出土遺物（第９図　図版 17）

１～３は弥生土器壺である。１は口縁内面がやや膨らみながら立ち上がる。２は胴部の張りが少なく、頸部に刻み目を施す断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部外面は、タタキ痕が明瞭に残っている。３も２と同様に胴部の張りが少なく、外面に明瞭なタタキ痕が残る。４は壺と思われる。外面胴部付近はタタキ痕が明瞭に残り、底部にかけてはハケ調整を施す。５は鉢である。口縁端部を丸く仕上げる。６は甕の底部か。７は高坏である。８は壺である。口縁部は大きく外反し、端部に刻み目を施す。９～ 11 は高坏脚部である。９、10 は円形の穿孔を施す。

第８図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）

５号竪穴住居跡（第 10 図　図版４）

４号竪穴住居跡の南西側で確認され、この４号竪穴住居跡を切り、33 号土坑に切られる。南西側が調査区外へ広がるが、平面形は方形を呈するとみられる。規模は北西‐南東軸で約 4.6 m、北西壁側で調査区内での長さ約 2.8 mを測る。また、北東側と南東側にはベッド状遺構がみられ、深さはベッド状遺構までが 20 ㎝、床面までが約 40 ㎝を測る。床面の中央付近に土坑状の落ち込みが見られ、炉跡の可能性がある。主柱穴はＰ１・Ｐ２と考えられ、位置関係から４本柱であったと思われる。

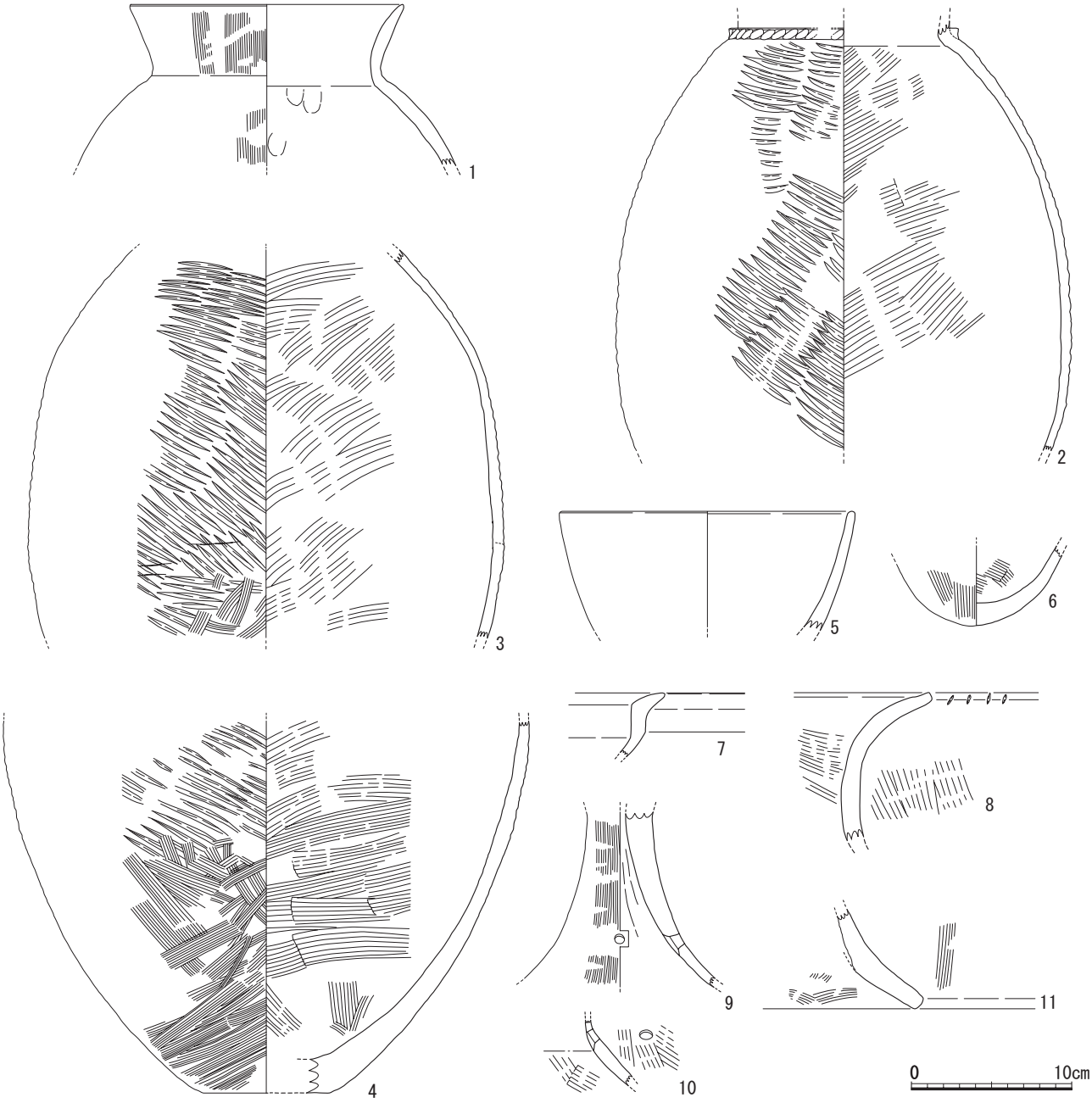
遺物の多くはＰ１付近で床面より 30 ～ 40 ㎝浮いた状態で、弥生土器甕等が出土した。

出土遺物（第 11 図　図版 17・18）

１～５は弥生土器甕である。１は口縁端部が沈線状に凹む。２は口縁部が１に比べて、大きく傾いて開く。外面の胴部上半にタタキ痕が明瞭に残っている。４は口縁部がほとんど開かず立ち上がり、胴部の張りもない。６は壺である。７は甕の底部か。８は鉢である。

６号竪穴住居跡（第 12 図　図版５）

５号竪穴住居跡の東側で確認され、４号竪穴住居跡に切られる。南西側が調査区外へ広がり、平面形は方形を呈するとみられる。規模は北東‐南西軸で約 4.0m、北東‐南西軸で約 3.2 m＋α を測る。北東側には幅約 1.5 mのベッド状遺構がみられるが、大きく撹乱を受けている。深さはこのベッド状遺構までが約 20cm、床面までが約 30cm を測る。主柱穴については、確実なものが確認されなかったが、床面の北西寄りに焼土が見られ、炉



第９図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

が付近にあった可能性があることから住居と判断した。

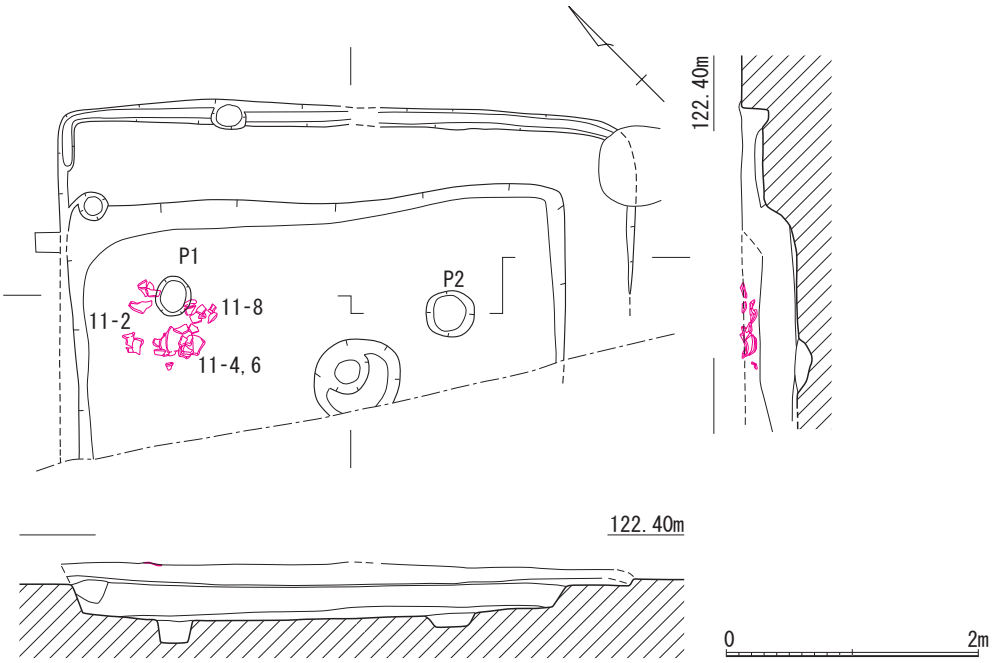
遺物は弥生土器甕・壺などが出土している。

出土遺物（第 13 図　図版 18）

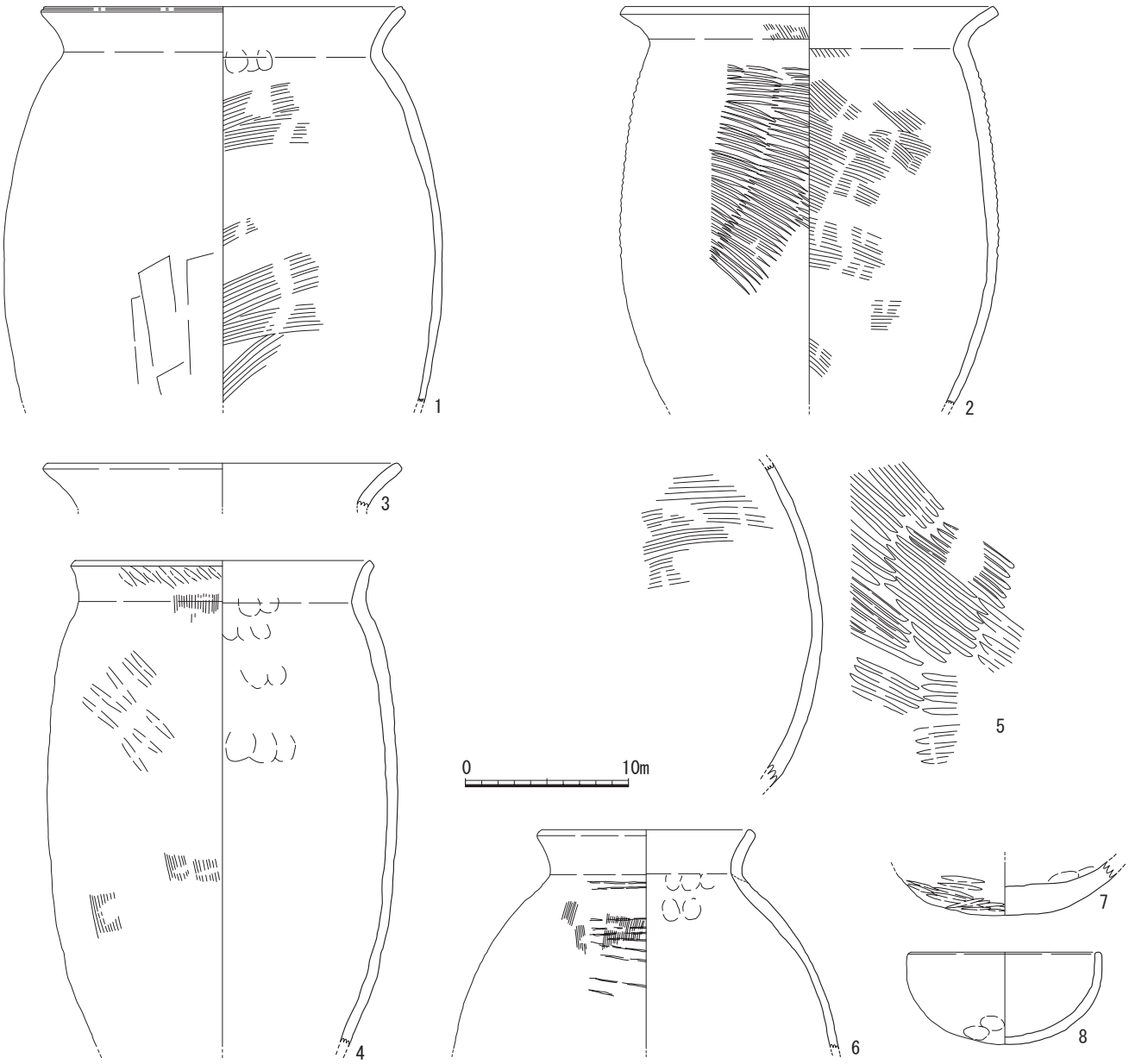
１は弥生土器甕である。口縁部は大きく外反し、端部は胴部より外に出る。２は壺である。胴部が大きく横に張る。３・４は縄文土器鉢である。口縁端部を外側につまみ出すように仕上げる。５は弥生土器高坏である。口縁端部を内側に折り曲げるように仕上げている。

7号竪穴住居跡（第 14 図　図版６）

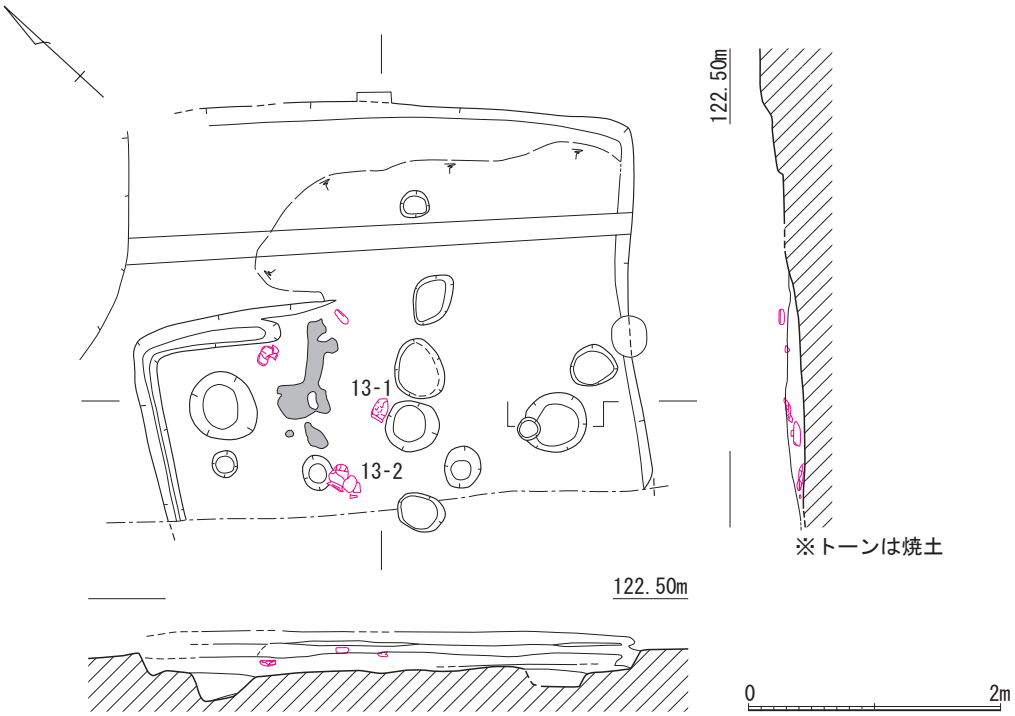
２号竪穴住居跡の西側で確認され、２、８、９号竪穴住居跡を切る。南西側は削平を受けているものの、平面



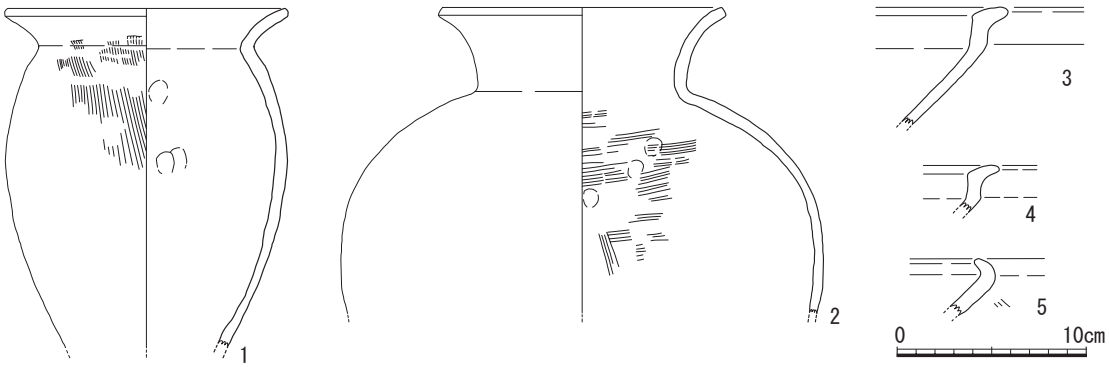
第 10 図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 11 図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）



第 12 図　６号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 13 図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

形は台形気味の方形をする。規模は南東壁で約 4.4 m、北西壁で約 5.2 m、北西‐南東軸で約 4.9 m、深さは床面まで約 10 ㎝を測る。床面の中央付近には炉跡とみられる焼土、南西壁際には屋内土坑がみられる。また、北側を除く壁際には周溝が掘り込まれている。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２本と考えられ、その深さは 28、46 ㎝である。

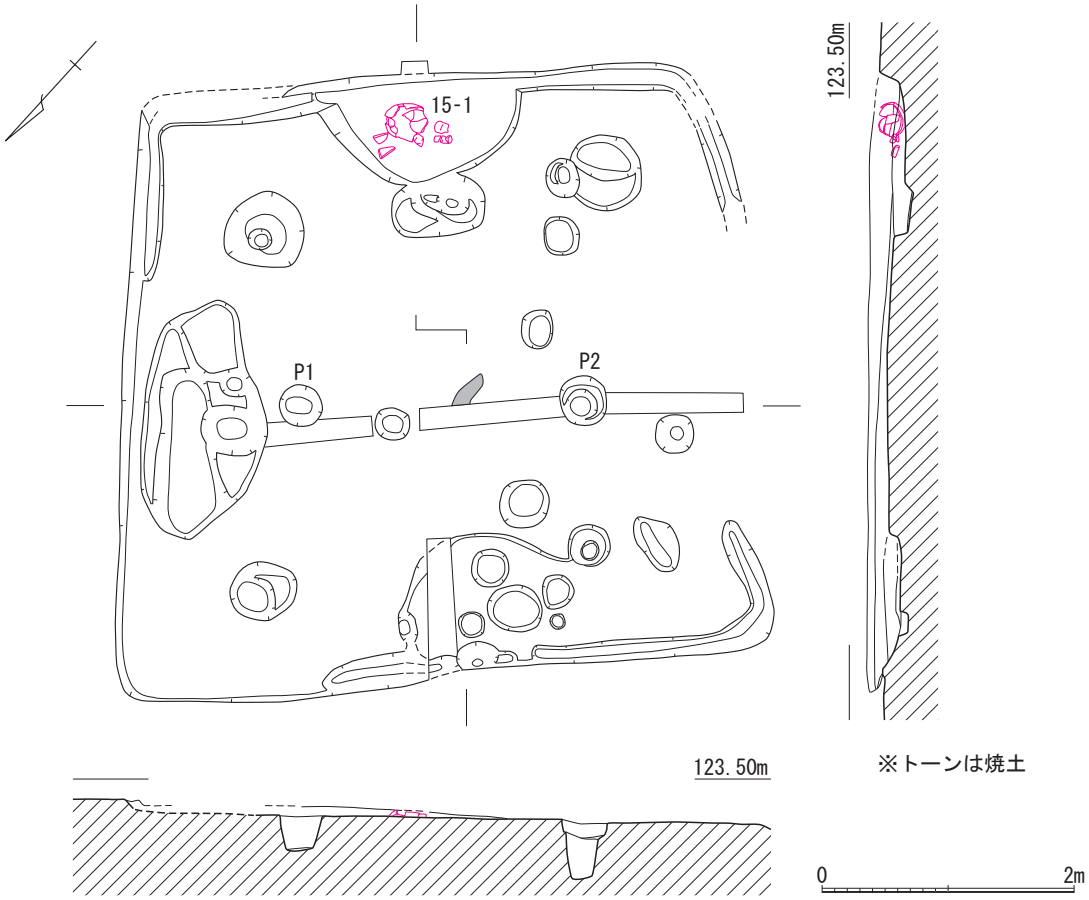
遺物は弥生土器甕などが出土している。

出土遺物（第 15 図　図版 18）

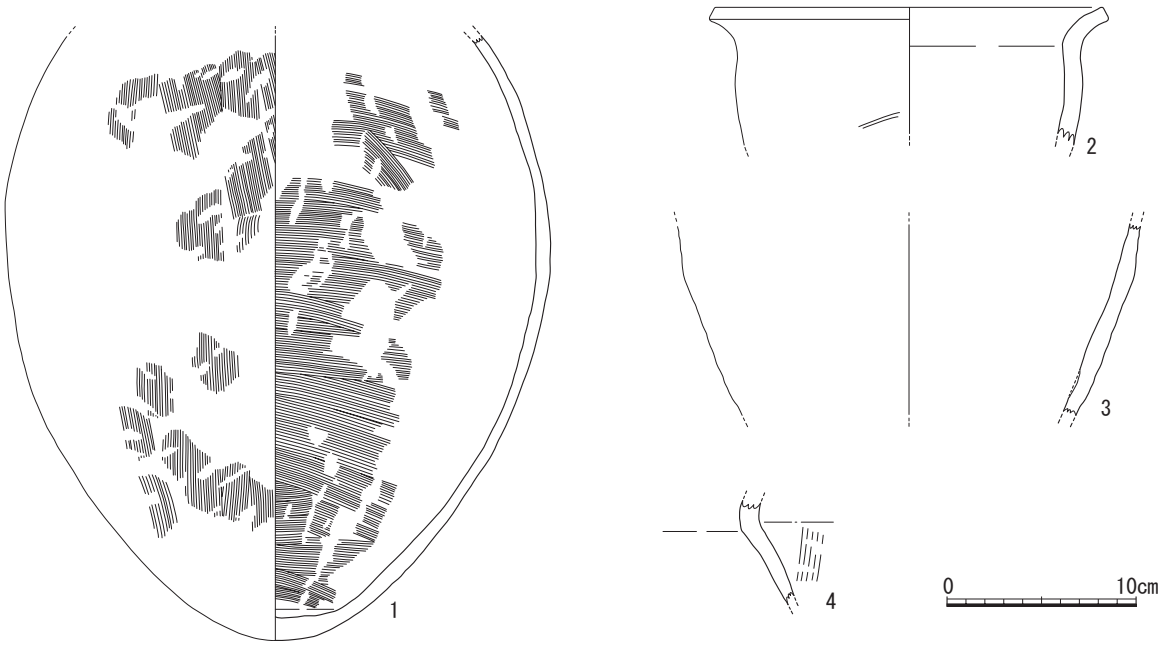
１は弥生土器甕である。底部は丸底である。２は弥生土器の小型甕である。口縁部は胴部より開いて立ち上がり、端部を角張らせて仕上げる。３は縄文土器の深鉢であるが、傾きは確実ではない。４は土師器の甕である。

8号竪穴住居跡（第 16 図）

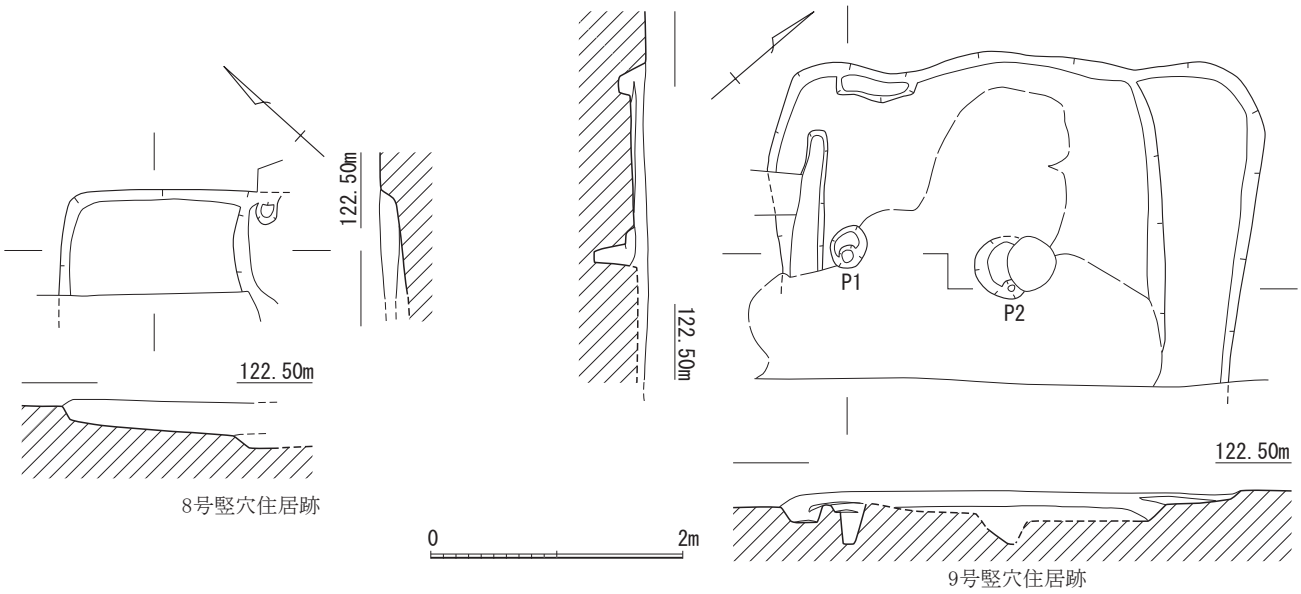
７号竪穴住居跡の東側で確認され、大部分は２・７号竪穴住居に切られる。北側隅しか残っていなかったが、平面形は方形を呈することはわかる。規模は北東壁で約 1.4 m、北西壁で約 0.8 mが残存する。南東側にはベッド状遺構とみられる一段の落ち込みが確認されたが、はっきりしない。この一段目までの深さは 15 ～ 20 ㎝を



第 14 図　７号竪穴住居跡実測図（1/60）



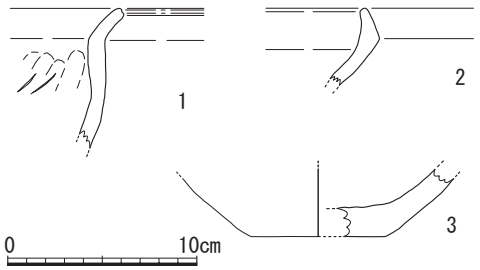
第 15 図　７号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）



第 16 図　８・９号竪穴住居跡実測図（1/60）

測る。

遺物は出土したが、実測可能なものはなかった。



第 17 図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

９号竪穴住居跡（第 16 図）

７号竪穴住居跡の北西側で確認された。南東側は７号竪穴住居跡に切られるほか、32 号土坑にも切られ、床面の大部分残っていない。平面形は方形を呈するとみられ、規模は北西壁で約 3.5 m、南東壁で約 2.6 m＋αを測る。北東側にはベッド状遺構が見られ、北西壁・南西壁の周溝が掘り込まれている。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２本と考えられ、深さはそれぞれ約 30、20 ㎝を測る。

遺物は弥生土器の甕・壺が出土している。

出土遺物（第 17 図）

１は弥生土器小型甕である。口縁端部を沈線状に窪ませている。２は高坏口縁部か。端部がやや内側に傾く。３は壺の底部か。底面は平底である。

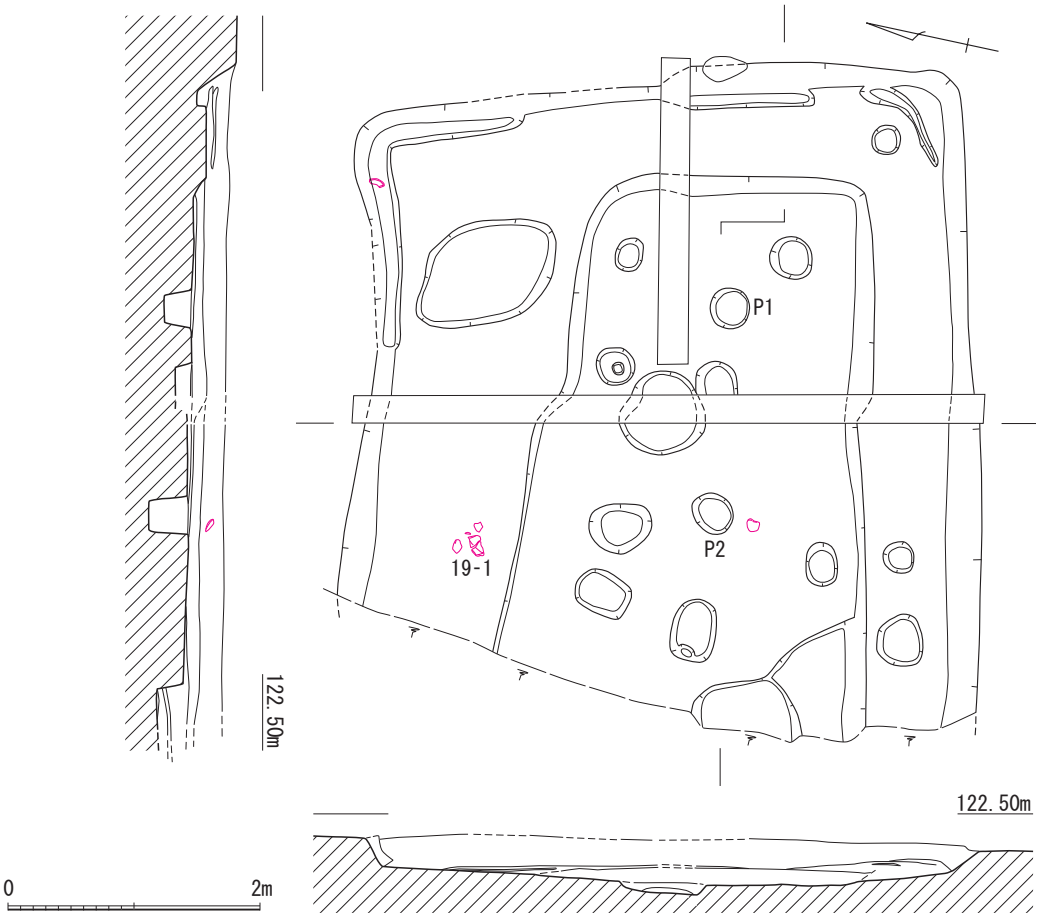
12 号竪穴住居（第 18 図　図版６・７）

調査区の北西側で確認され、17 号竪穴住居跡を切り、18 号土坑に切られる。西側は削平を受けており、規模は南北軸約 4.9 m、東西軸約 4.9 m＋αを測ることから、平面形は長方形を呈するとみられる。削平を受けている西側以外の壁にはベッド状遺構がみられ、深さはベッド状遺構までが約 15 ㎝、床面までが 30 ～ 35 ㎝を測る。ベッド状遺構の壁際には北側から東側にかけて、周溝がみられる。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２本とみられ、深さはそれぞれ 22、30 ㎝を測る。

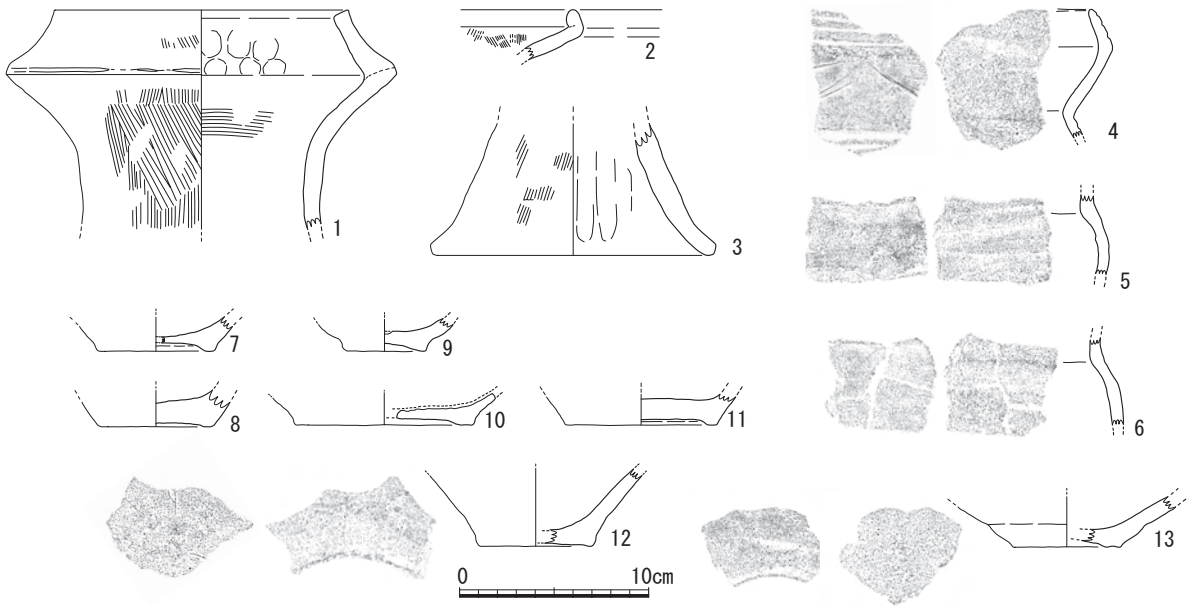
遺物は弥生土器壺・器台のほか、縄文土器深鉢等が出土している。

出土遺物（第 19 図　図版 18）

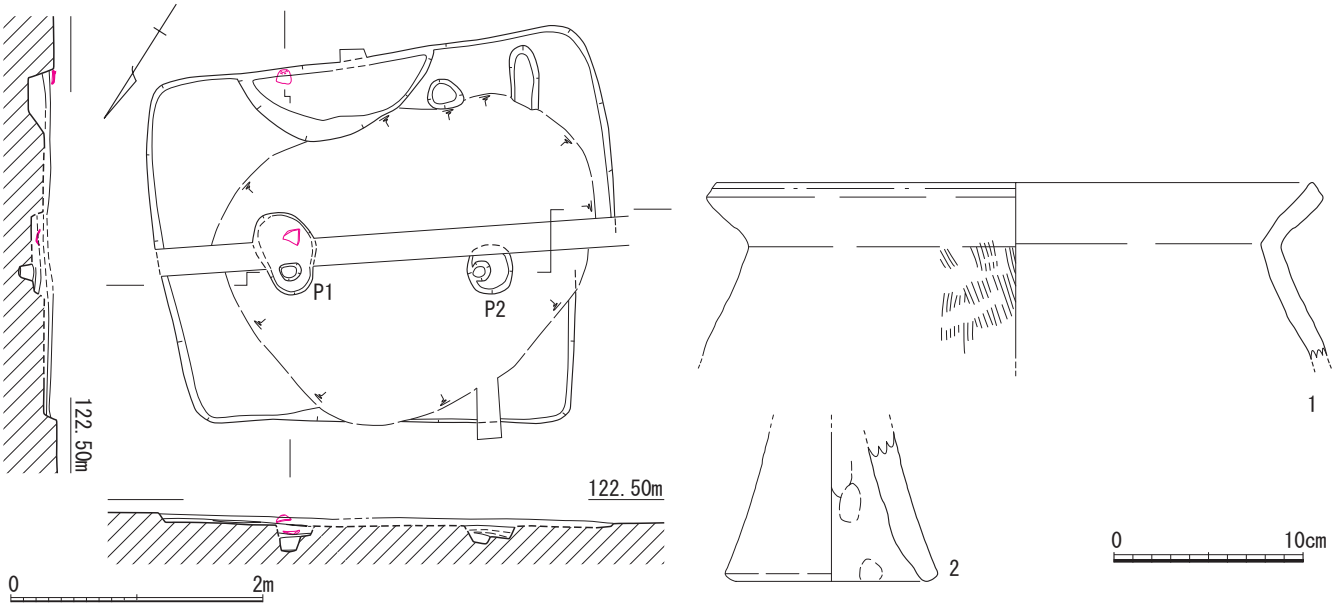
１は弥生土器壺の二重口縁部である。屈曲は強く、上部口縁は内傾して立ち上がる。端部は角張らせて仕上げる。下部は比較的長めに頸部に向かう。２は高坏口縁部か。端部はつまみ出すように立ち上がり、端部は丸く仕上げる。３は器台である。脚端部より、1.5 ㎝ほど上位で外側にわずかに屈曲し、端部は比較的角張らせて仕上げている。



第 18 図　12 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 19 図　12 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）



第 20 図　13 号竪穴住居跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/4）

４～６は縄文土器深鉢である。４は外面の口縁端部に３条の沈線、屈曲部の下部にも沈線が見られる。７～13 は縄文土器の底部である。いすれも上げ底である。

13 号竪穴住居跡（第 20 図　図版７）

12 号竪穴住居跡の北側で確認され、14 号竪穴住居を切る。住居の大部分は削平を受けているが、南西側に張り出し部を持つ、方形の平面を呈する住居である。規模は北壁で約 2.9 m、南壁で約 3.4 m、南北軸は約 2.8 m、床面までの深さは約 10 ㎝を測る。床面は黄褐色砂質土で、南壁際には屋内土坑がみられる。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２本と考えられ、床面からの深さは推定で約 20、15 ㎝である。

遺物は弥生土器器台、甕が出土している。

出土遺物（第 20 図）

１は弥生土器甕である。口縁部は直線的に外傾し、やや膨らみをもって立ち上がり、端部を肥厚させる。２は器台の底部である。開きは小さい。

14 号竪穴住居跡（第 21 図　図版８・９）

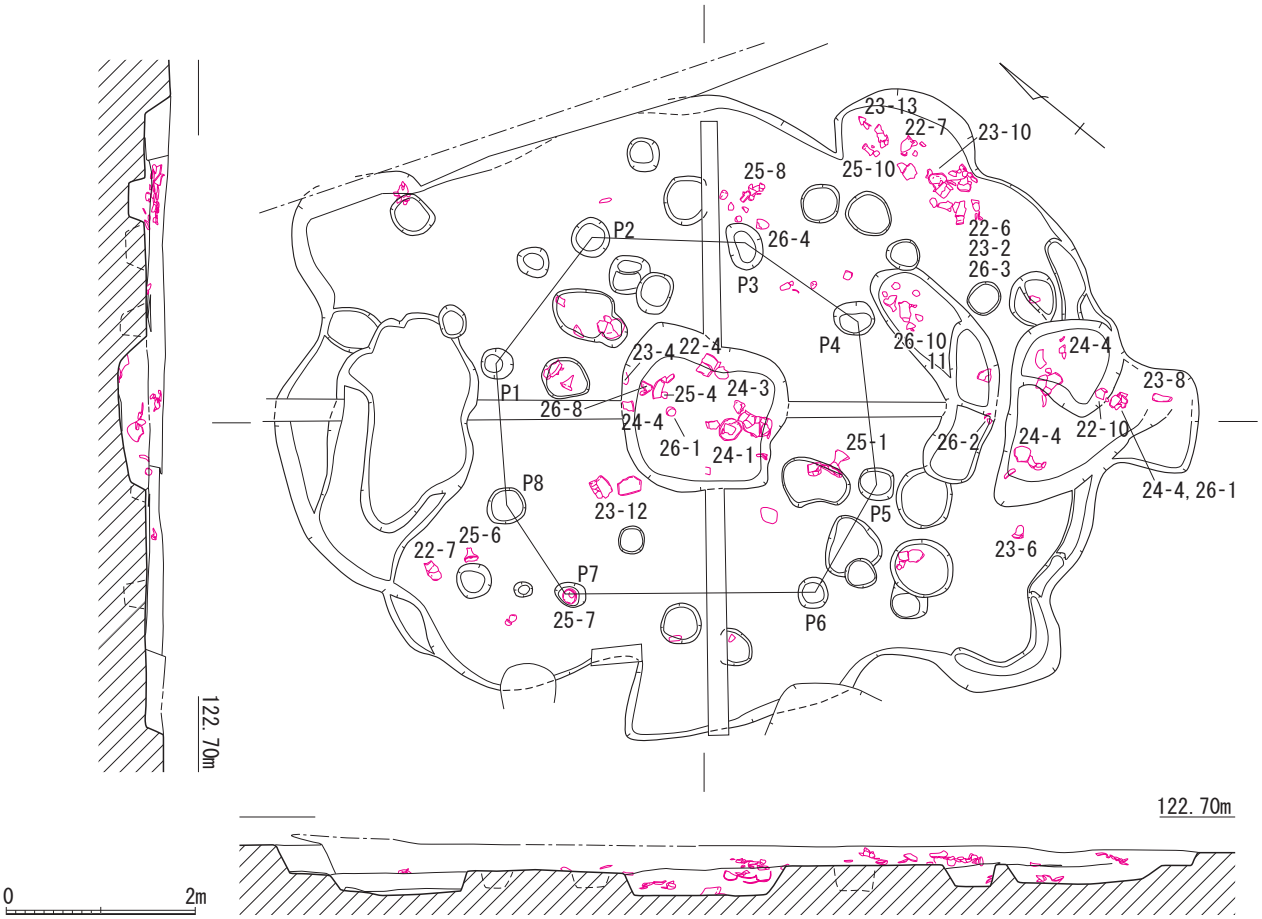
調査区の北側、Ｅ 12 グリッド付近で確認され、13 号竪穴住居に切られる。平面形は張り出し状の突出部がみられ、不定形ではあるが楕円形に近い形状を呈する。規模は北西‐南東軸で約 9.7 m、北東‐南西軸で約 6.8 m、床面までの深さは約 30 ㎝を測る。床面にはピットが多数、土坑状の掘り込みが数箇所に確認された。ピットのうち、円形に展開するＰ１～８が主柱穴になると考えられる。床面からの深さは 12 ～ 25 ㎝である。また、炉跡とみられる焼土・炭等は確認できなかった。

遺物は弥生土器甕・壺・器台・高坏・鉢など大量に出土した。

出土遺物（第 22 ～ 26 図　図版 18 ～ 21）

第 22 図はすべて弥生土器甕である。２は口縁端部を薄く仕上げ、胴部より外に張り出す。頸部付近はハケ調整後、タタキにより成形し、その痕跡が明瞭に残る。３は小型甕である。口縁部は短く外傾する。５は胴部の張りが殆んどなく、直線的になる。６は口縁端部を沈線状に窪ませる。

第 23 図１～４は弥生土器甕である。１は断面三角形の突帯を貼り付ける。２の底部はレンズ状を呈する。５



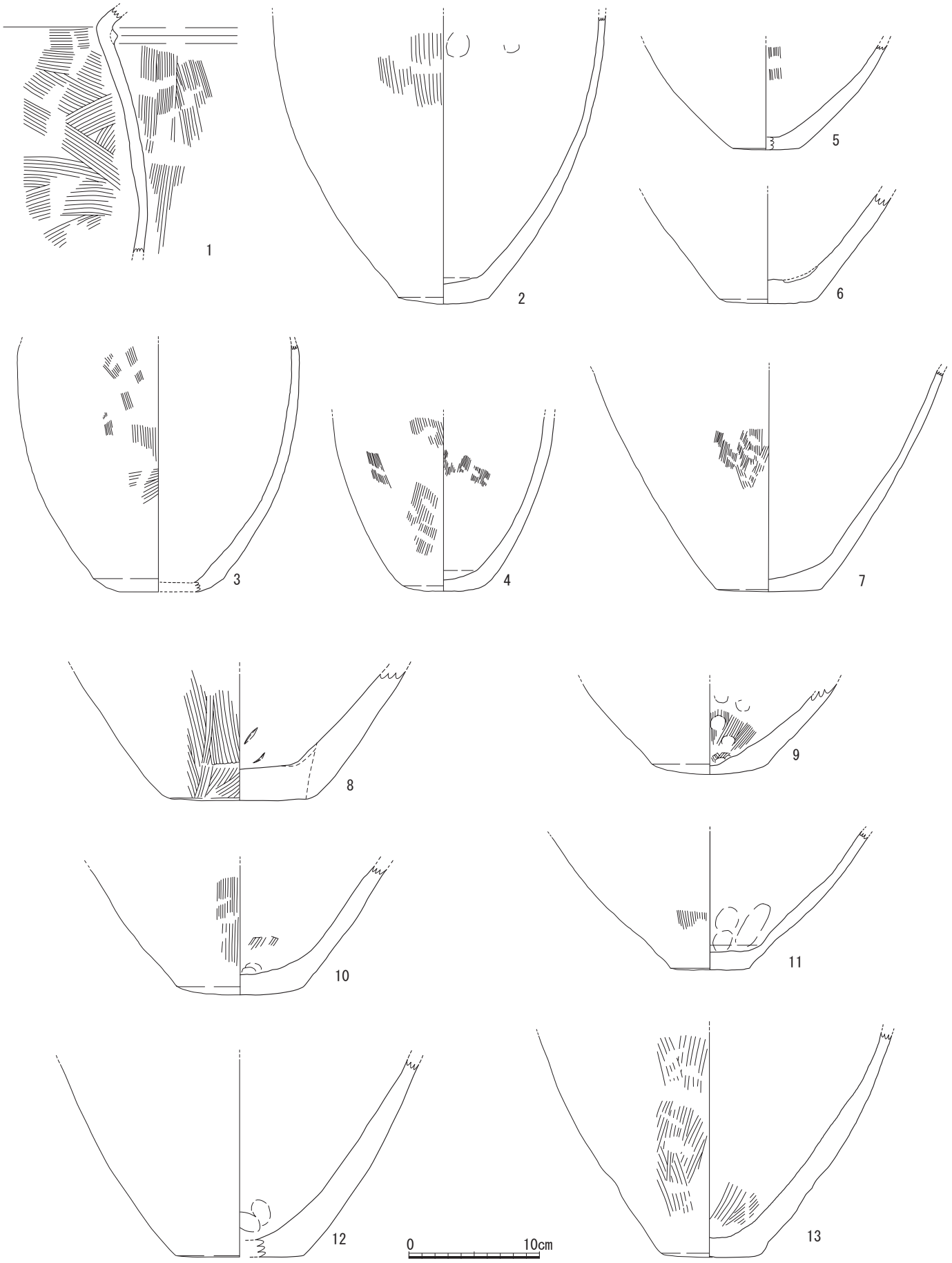
第 21 図　14 号竪穴住居跡実測図（1/80）

～ 13 は弥生土器壺である。11・13 は底部端より急角度で立ち上がり、外に開く。

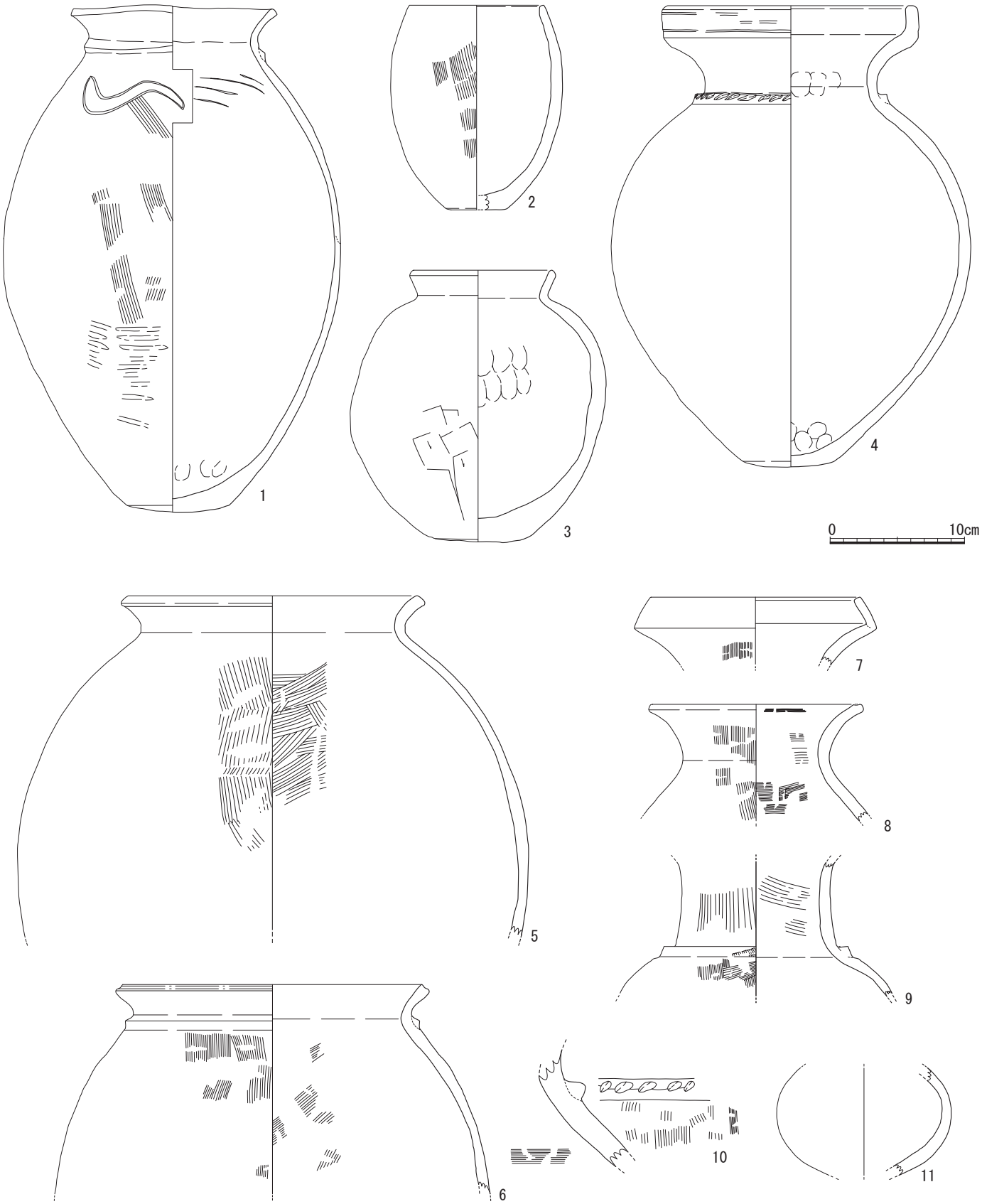
第 24 図はすべて弥生土器壺である。１は完形である。頸部は緩やかに屈曲し、小さく開く。口縁端部は角張り、肥厚する。胴部は中位よりやや上で最大径を測り、底部はレンズ状を呈する。頸部下には波形の線刻が見られ、蛇か龍を模したようにも見える。２は無頸壺である。外面下部にはケズリの痕跡が見られる。３は小型の壺である。口縁端部は丸く仕上げる。４は完形の二重口縁壺である。上部口縁は直立し、端部を丸く仕上げる。頸部の屈曲は緩やかで、断面三角形の突帯には刻み目が施される。胴部は中位付近で最大径をはかる。５は口縁部は短く立ち上がり、端部を肥厚させる。頸部の屈曲は緩やかで胴部は大きく張る。６は肥厚させた口縁端部に沈線状の窪みを施し、断面三角形の突帯を貼り付ける。７は二重口縁壺である。上部口縁はやや内傾しながら立ち上がり、端部は角張り、屈曲部は明瞭である。９は長頸壺である。口縁は直立し、頸部には断面三角形の突帯を貼り付ける。10 は断面三角形の突帯に刻み目を施す。11 は長頸壺か。

第 25 図はすべて弥生土器高坏である。１は完形である。坏部屈曲より口縁がほぼ直立し、端部は三角形気味に仕上げる。頸部はあまり開かない。２は坏部屈曲より、若干外に開きながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。３～５は何れも坏部のみである。３は口縁端部をつまみ出すように内傾させる。４は同じく端部をつまみ出すように直立させ、丸く仕上げる。内面にはミガキが施される。５は口縁端部やや内傾させながら、丸く仕上げる。６は比較的細い脚部上位から下部にかけて大きく開く。７は脚端部へ向かって、ラッパ状に開く。内面にはケズリ状の調整痕が見られる。10 は脚部下部に穿孔を施す。12 は坏部と脚部の接合部に断面台形の突帯を貼り付ける。

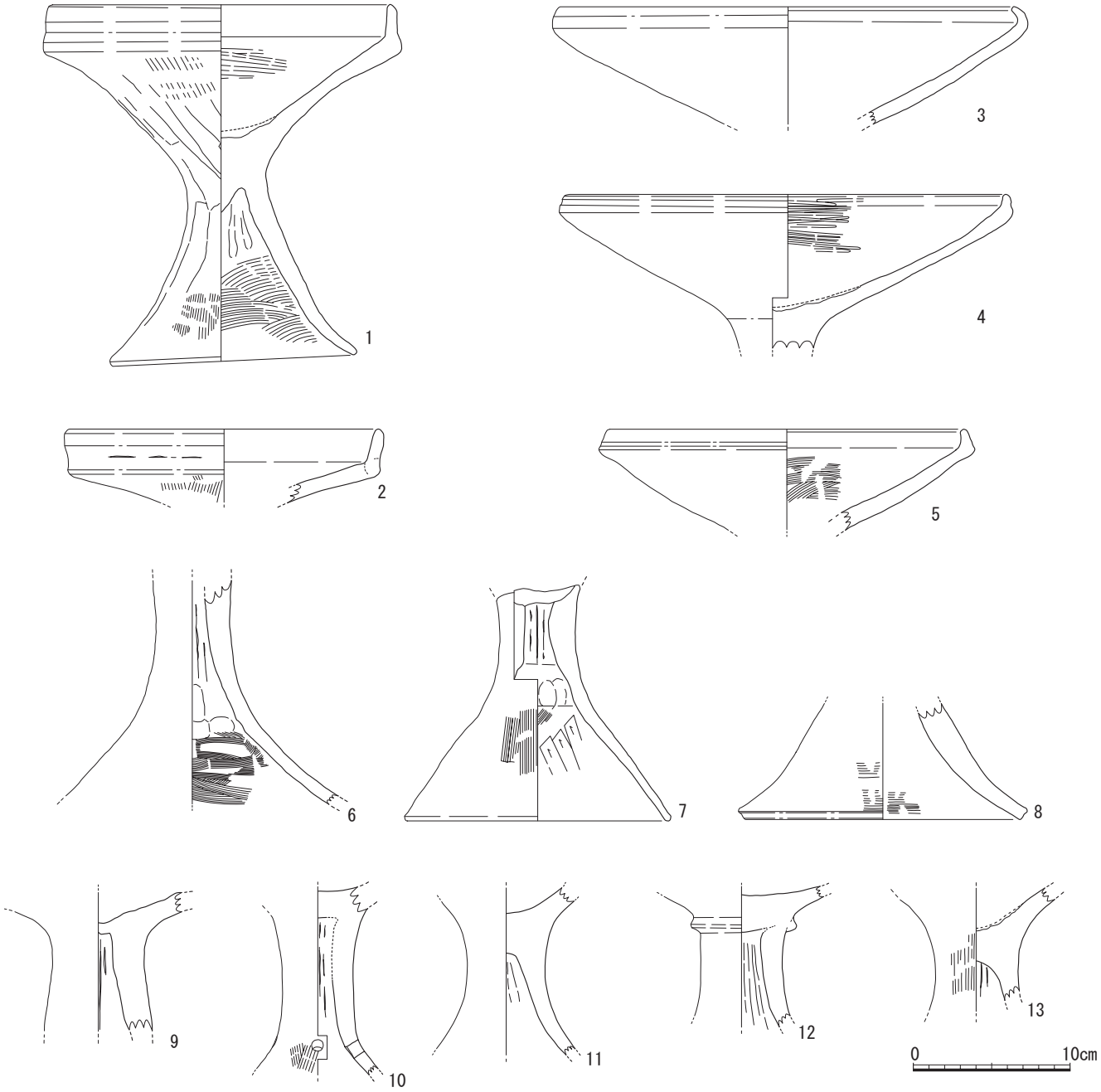
第 22 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）(1/4)



第 23 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）(1/4)



第 24 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（３）(1/4)



第 25 図　14 号竪穴住居跡出土遺物実測図（４）(1/4)

第 26 図１～７は弥生土器鉢である。１は口縁端部をわずかに外反させ、底部は尖底気味に仕上げる。２は口縁部に向かって大きく開き、外面・内面ともにミガキが施される。４は底部端から直立気味立ち上がり、口縁部も大きくは開かない。７も底部が４と類似しており、口縁部も同様に形態になるとみられる。６は完形であるが、大きくひずむ。

８～ 12 は弥生土器器台である。８は水平気味になるまで、口縁が大きく外反する。８・12 は縦方向のナデがみられる。10 は脚部が大きく開かない。11 は口縁部が短く開き、底部も同様になると思われる。13 は弥生土器支脚である。口縁は厚く、丸味を帯びて仕上げる。

15 号竪穴住居跡

（第 27 図　図版９）

３号竪穴遺構の北東側で確認され、７号土坑に切られる。東側は調査区外へ広がり、平面形は方形を呈するとみられ、南東側には張り出し部をもつ。規模は北西‐南東軸で約 3.1 m、北東‐南西軸で約 2.2 m、床面までの深さは５～ 10 ㎝を測る。Ｐ１やＰ２が主柱穴となる可能性があるが、位置関係から確実なものとはいえない。

遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 27 図）

第 25 図 1 は弥生土器甕である。口縁部が大きく開き、端部を肥厚させる。

16 号竪穴住居跡

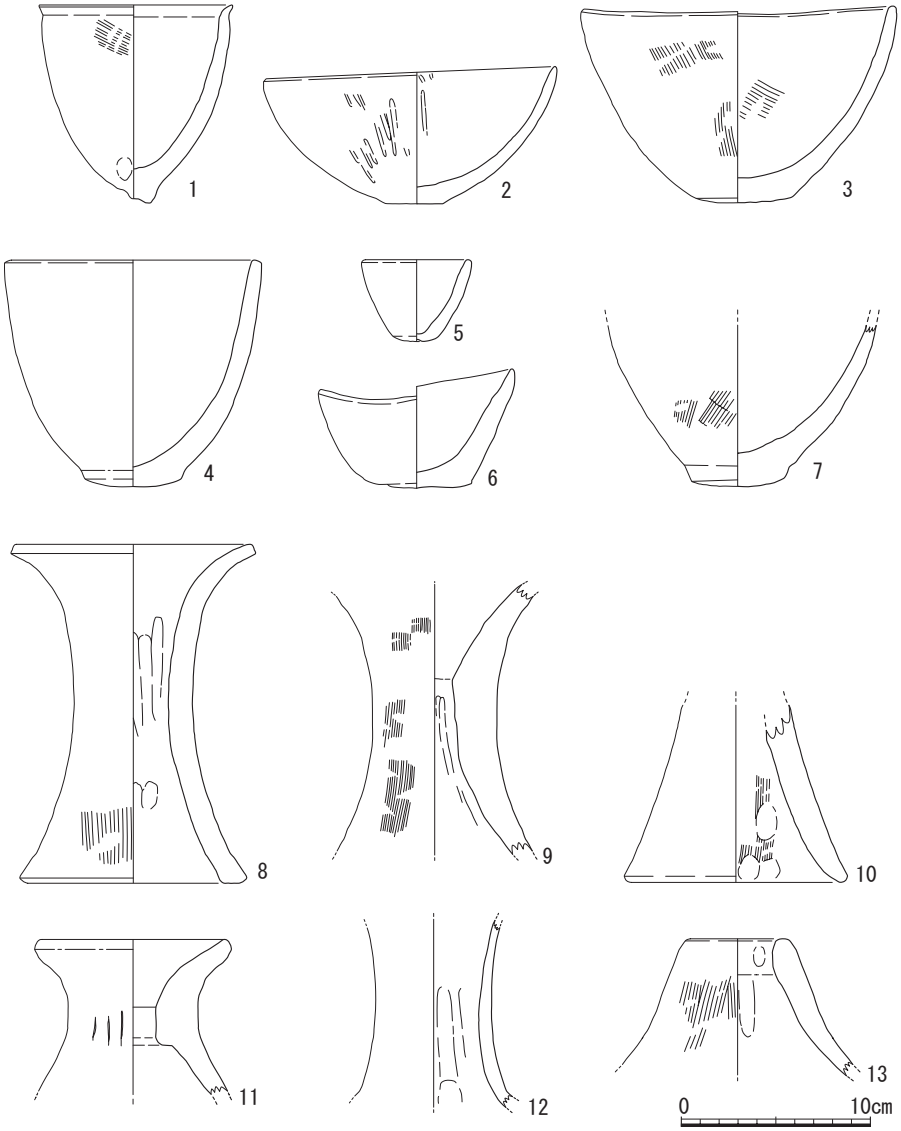
（第 27 図　図版 10）

14 号竪穴住居跡の北側で確認された。北東側は調査区外へ広がり、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は南壁側で約 2.6 m＋α、西壁側で約 2.4 m＋α、床面までの深さは 10 ～ 15 ㎝を測る。壁際には一部周溝が掘り込まれている。主柱穴、屋内土坑等は確認できなかった。

遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 25 図）

第 25 図２は弥生土器甕である。

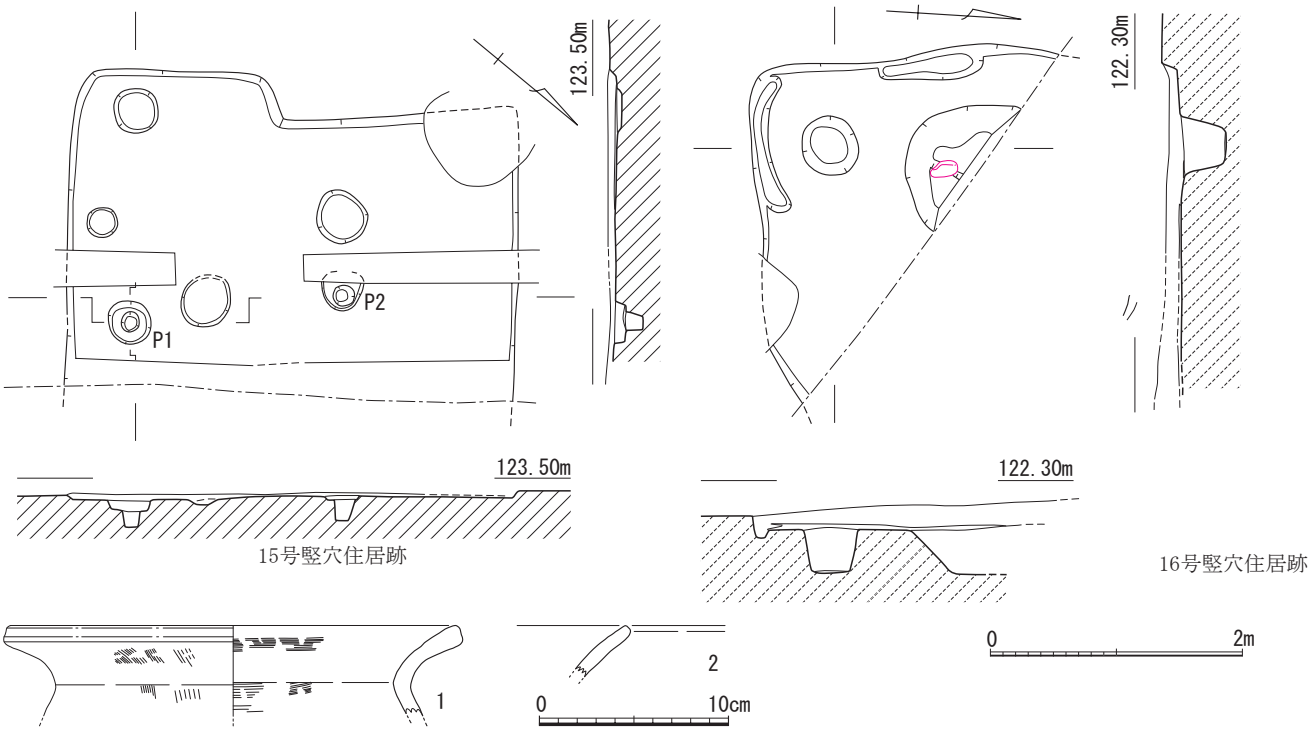


第26図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図（５）（1/4）

関 7 号竪穴住居跡（第 28 図　図版 10）

Ｅ 11 グリッドの西側で確認され、北側を 12 号竪穴住居に切られ、西側は削平を受けている。平面形は方形を呈するとみられ、規模は南北軸約 2.5 m＋α、東西軸約 1.7m ＋α、床面までの深さは約 10 ㎝を測る。東壁際には部分的に周溝が掘りこまれている。また、Ｐ１が壁との位置関係から主柱穴のうちの１本になると考えられ、床面からの深さは 31 ㎝を測る。

遺物は出土しなかった。



第 27 図　15・16 号竪穴住居跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/4）

2. 竪穴遺構

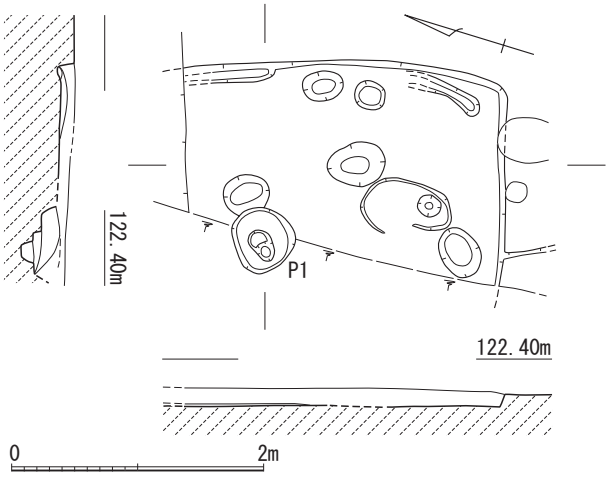
1号竪穴遺構（第 29 図　図版 10）

15 号竪穴住居跡の西側で確認された。平面形は不定形だが、南東側は方形に近い形を呈する。規模は長軸約 3.1 m、短軸約 2.4 m、床面までの中央付近で約約 20 ㎝を測る。

遺物は、弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 28 図）

1・2とも弥生土器甕である。1は端部を丸く仕上げ、2は端部を肥厚させ、角張らせて仕上げる。



第 28 図　17 号竪穴住居跡実測図（1/60）

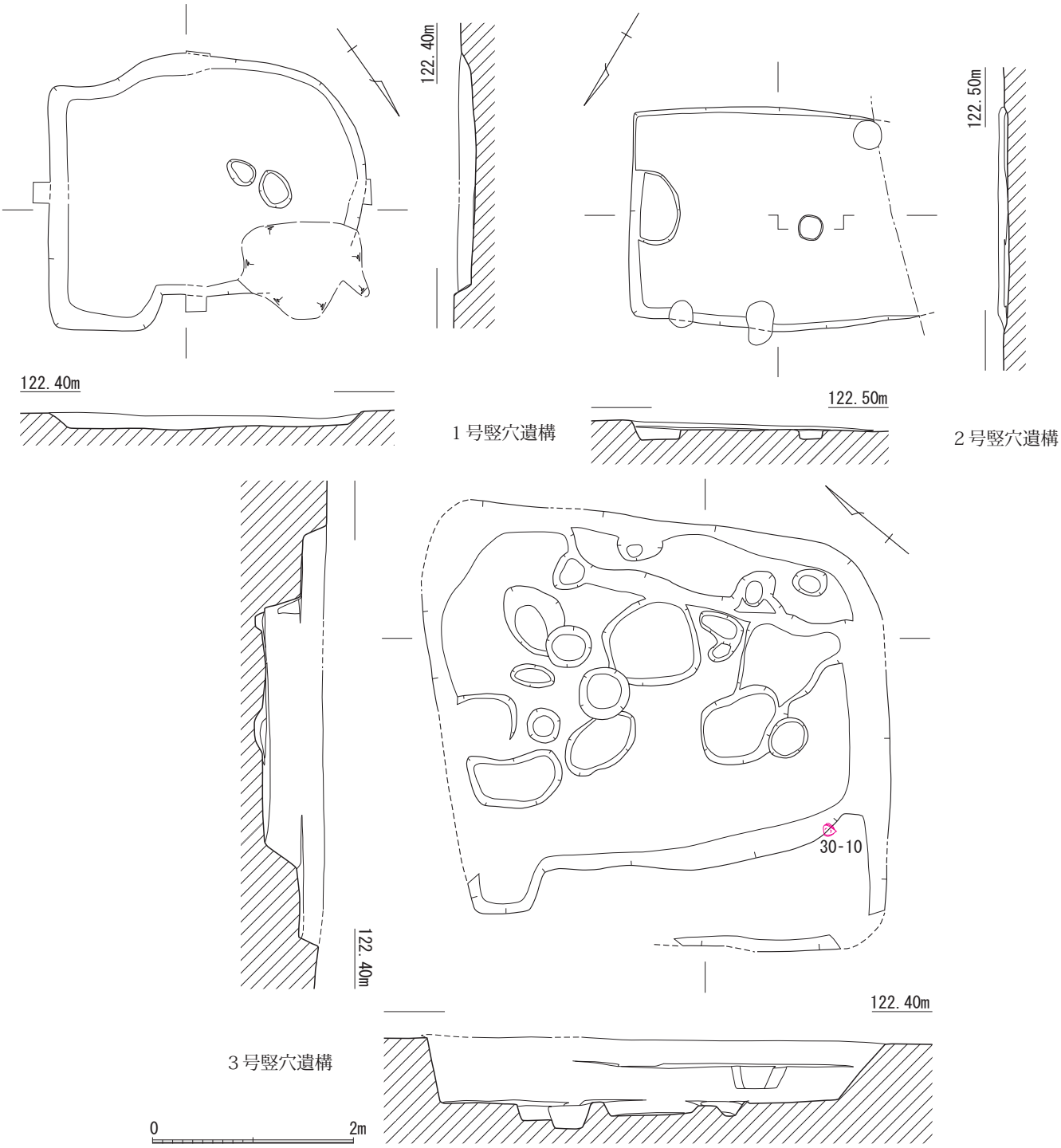
2号竪穴遺構（第 29 図）

6 号竪穴住居跡の南東側で確認された。南西側は削平を受けているが、本来は調査区外へ広がっていたとみられ、平面形は方形を呈すると考えられる。床面にはピットや土坑状の落ち込みが見られるが、住居跡と判断するには材料に乏しいため、竪穴遺構とした。規模は長軸約 2.6 m＋α、短軸約 2.2 m、床面までの深さは約 10 ㎝を図る。

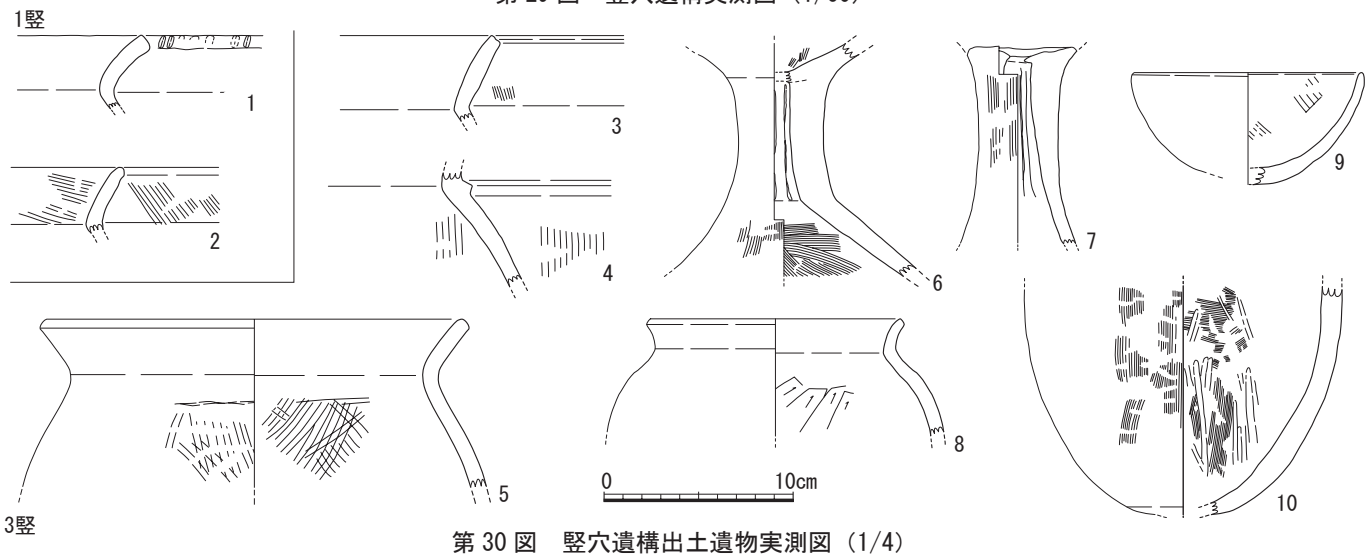
遺物は出土しなかった。

3号竪穴遺構（第 29 図）

2 号竪穴住居跡の東側で確認され、この住居や 8・10 号土坑に切られる。平面形はやや歪な方形を呈し、内部には段落ちや多くのピットが掘り込まれているが、住居跡と判断できずに竪穴遺構とした。規模は長軸約 4.5 m、短軸約 4.2 m、床面までの深さは 60 ～ 70 ㎝を測る。



第 29 図　竪穴遺構実測図（1/60）



第 30 図　竪穴遺構出土遺物実測図（1/4）

遺物は弥生土器甕・壺・鉢・高坏が出土している。

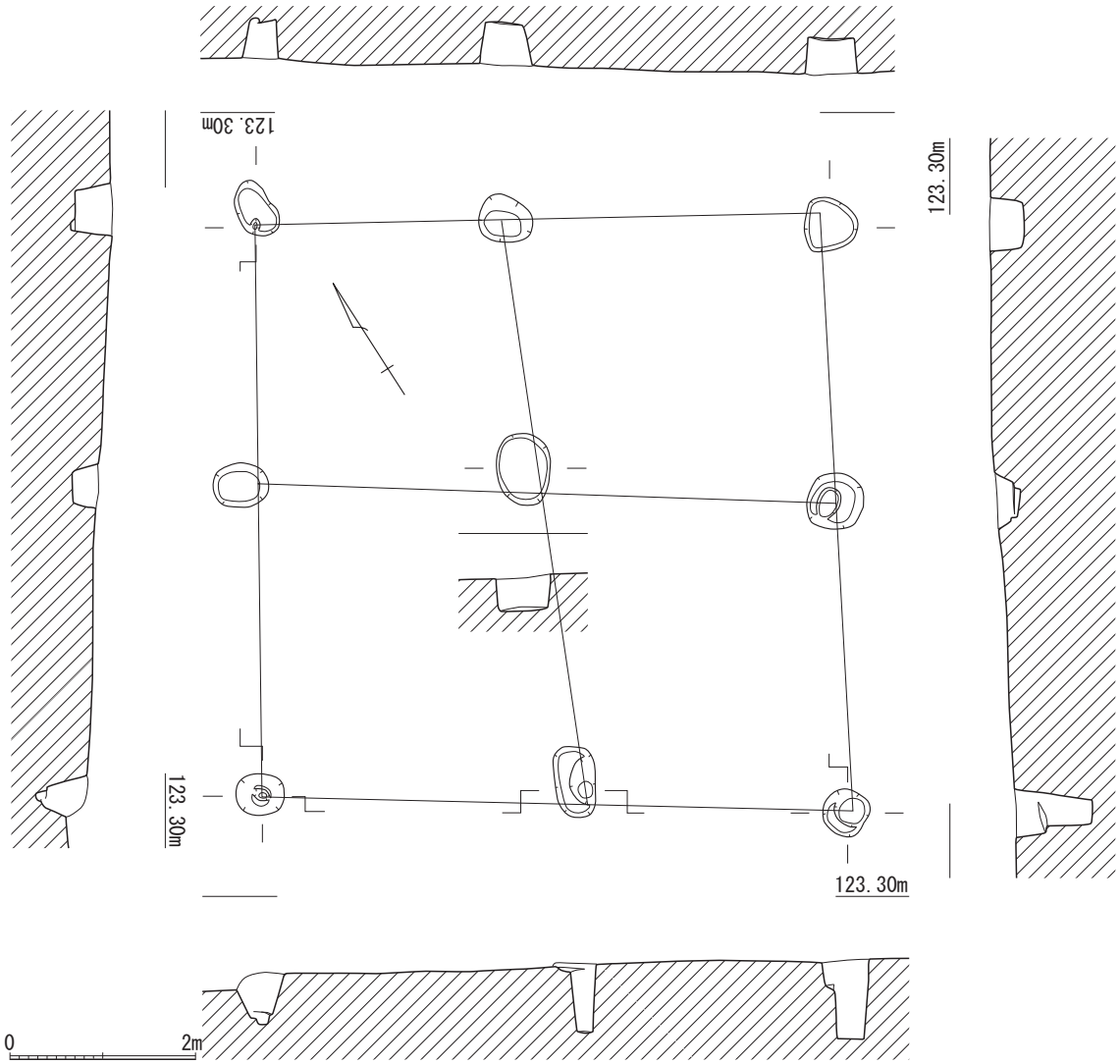
出土遺物（第 30 図　図版 21）

第 30 図 3・5・8・10 は弥生土器甕である。3 は口縁端部を沈線状に窪ませる。8 の頸部の屈曲は緩やかで端部を角張らせる。10 は丸底で内面にはタテ方向のミガキが施される。4 は弥生土器壺である。頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。6・7 は弥生土器高坏の脚部である。ともに脚端部を欠損しているが、6 が直線的で開きが小さいのに対し、7 は中位付近で大きく開く。9 は弥生土器鉢である。

3．掘立柱建物（第 31 図　図版 11）

Ｂ７グリッドで確認され、主軸方向をＮ-31°-Ｅにとる２間×２間の平面方形の総柱建物で、31 号土坑を切る。柱穴の深さは 30 ～ 85 ㎝で、柱穴間の心心距離で約 2.6 ～ 3.5 m、規模は同様に心心距離で東西方向約 6.2 ～ 6.3 m、南北方向約 6.1 ～ 6.3 mである。

遺物は出土しなかった。



第 31 図　掘立柱建物実測図（1/80）

4．土坑

1号土坑（第 32 図　図版 11）

調査区の南側、Ｂ６グリッドで確認された。平面形は南側がやや膨れる隅丸方形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 2.0 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは約 25 ㎝を測る。遺物は土師器甕が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 1 は甕である。口縁端部は肥厚し、沈線状の窪みが見られる。

2号土坑（第 32 図　図版 11）

調査区東側、Ａ８グリッドで確認された。平面形は不定形で、底面はやや傾斜する。北側にはピット状の落ち込みがあるが、土坑に伴うかは不明である。壁は北側が直立するのを除き、斜めに立ち上がる。規模は長軸約 2.0 m、短軸約 1.5 m、検出面からの深さは 1 段目が約 50 ㎝、ピット底面までは約 80 ㎝を測る。埋土は暗褐色を呈し、炭が混じる。遺物は弥生土器甕が出土した。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 2 は弥生土器甕である。口縁端部をやや角張らせて仕上げる。

３号土坑（第 32 図　図版 12）

２号土坑の東側で確認された。平面形は楕円形を呈する。底面は平らで、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸が約 1.4 m、短軸約 0.6 m、遺構面からの深さは約 10 ㎝を測る。埋土は暗黄褐色を呈する。遺物は出土しなかった。

4号土坑（第 32 図）

１号竪穴住居跡の北側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 3.2 m、短軸約 2.7 m、検出面からの深さは約 60 ㎝を測る。遺物は、弥生土器壺・高坏・器台が出土している。

出土遺物（第 35 図　図版 21）

第 35 図３・４は高坏である。３は口縁部で端部はほぼ水平に外に開き、丸く仕上げる。４は脚部で直線的に外に開く。５は甕の頸部で、刻みを施した断面三角形の突帯を貼り付ける。５は器台の脚部である。

5号土坑（第 32 図　図版 12）

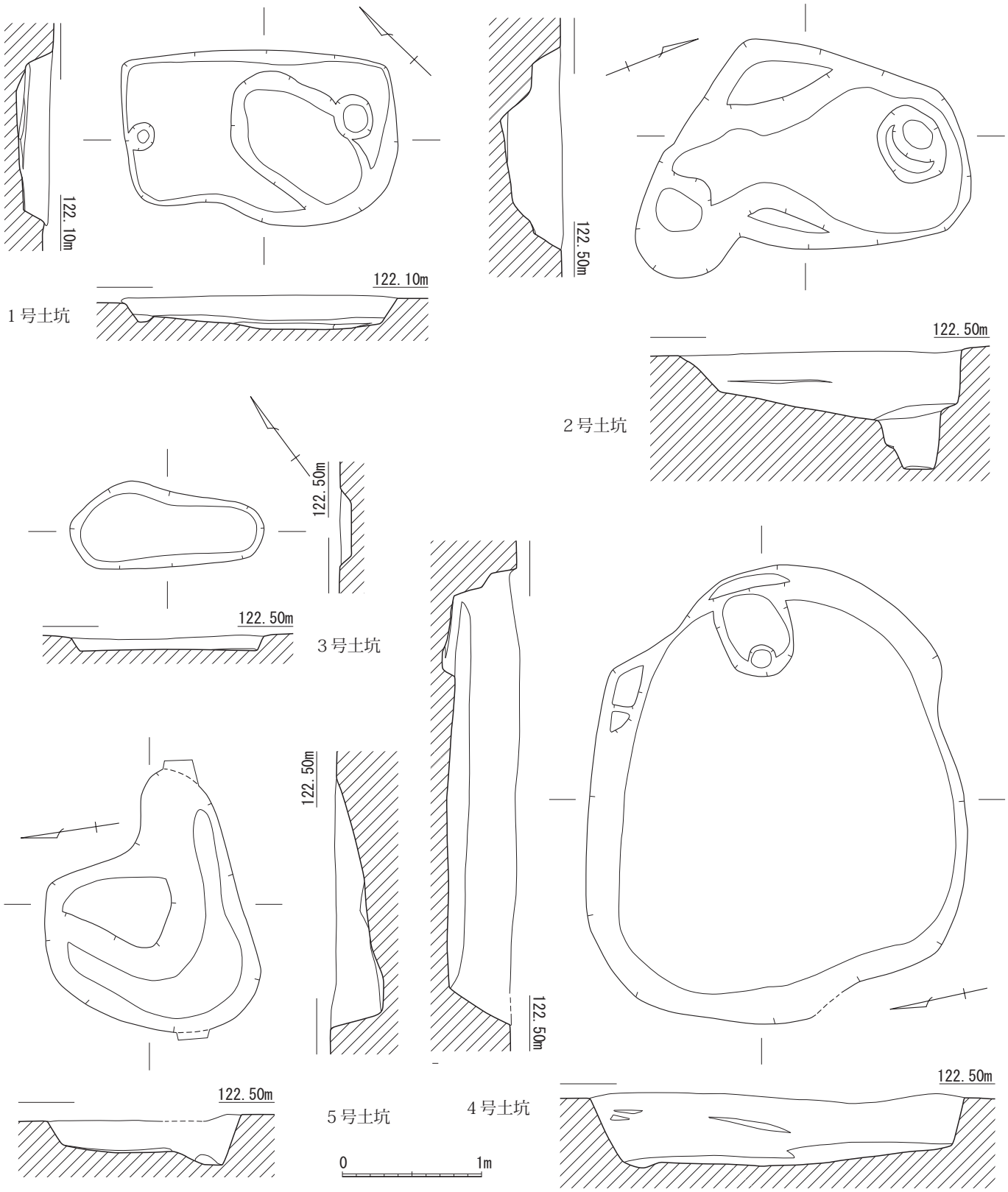
４号土坑の北東側で確認され、６号土坑を切る。平面形は不定形で底面はやや舟底状となり、南側は段落ちがみられる。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸約 1.9 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 40 ㎝を測る。遺物は弥生土器壺・鉢が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 7 は鉢の口縁部である。端部は尖り気味に仕上げる。8 は壺の頸部である。刻みを施した断面三角形の突帯を貼り付ける。9 は甕である。外面には横方向のミガキを施す。

6号土坑（第 33 図）

５号土坑の西側で確認され、これに切られる。平面形は歪な円形を呈する。底面は比較的平坦で、南側に段落



第 32 図　土坑実測図（１）(1/40)

ちが見られる。壁は比較的急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.6 m＋α、短軸約 1.8 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 80 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕・高坏が出土した。

出土遺物（第 35 図　図版 21）

第 35 図 10 は甕である。頸部より下位は直立気味で殆んど張らない。11 は高坏の口縁部である。端部は水平に開く。

7号土坑（第 33 図）

15 号竪穴住居跡の西側で確認され、これを切る。平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.0 m、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 20 ㎝を測る。遺物は弥生土器壺が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 12 は壺の口縁部である。端部は角張らせて仕上げる。

8号土坑（第 33 図　図版 12）

３号竪穴遺構の北側で確認され、これを切る。平面形は不定形である。底面はほぼ平坦で、段落ちがみられる。規模は長軸約 1.3 m、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 50 ㎝を測る。遺物は弥生土器壺・甕が出土している。

出土遺物（第 35 図　図版 21）

第 35 図 13・15 は壺である。頸部の屈曲は緩く、胴部中位で最大径を図るが、この部位は直立気味である。15 は断面台形の突帯を貼り付け、突帯には刻みが施される。14 は甕の口縁部で、端部を肥厚させる。

9号土坑（第 33 図　図版 13）

９号竪穴住居跡の北側で確認され、23 号土坑を切る。平面形はほぼ円形を呈する。床面は緩やな段落ちがみられ、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.5 m、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 30 ㎝を測る。遺物は弥生土器鉢が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 16・17 は鉢である。ともに口縁端部は丸味を帯びる。

10 号土坑（第 33 図　図版 13）

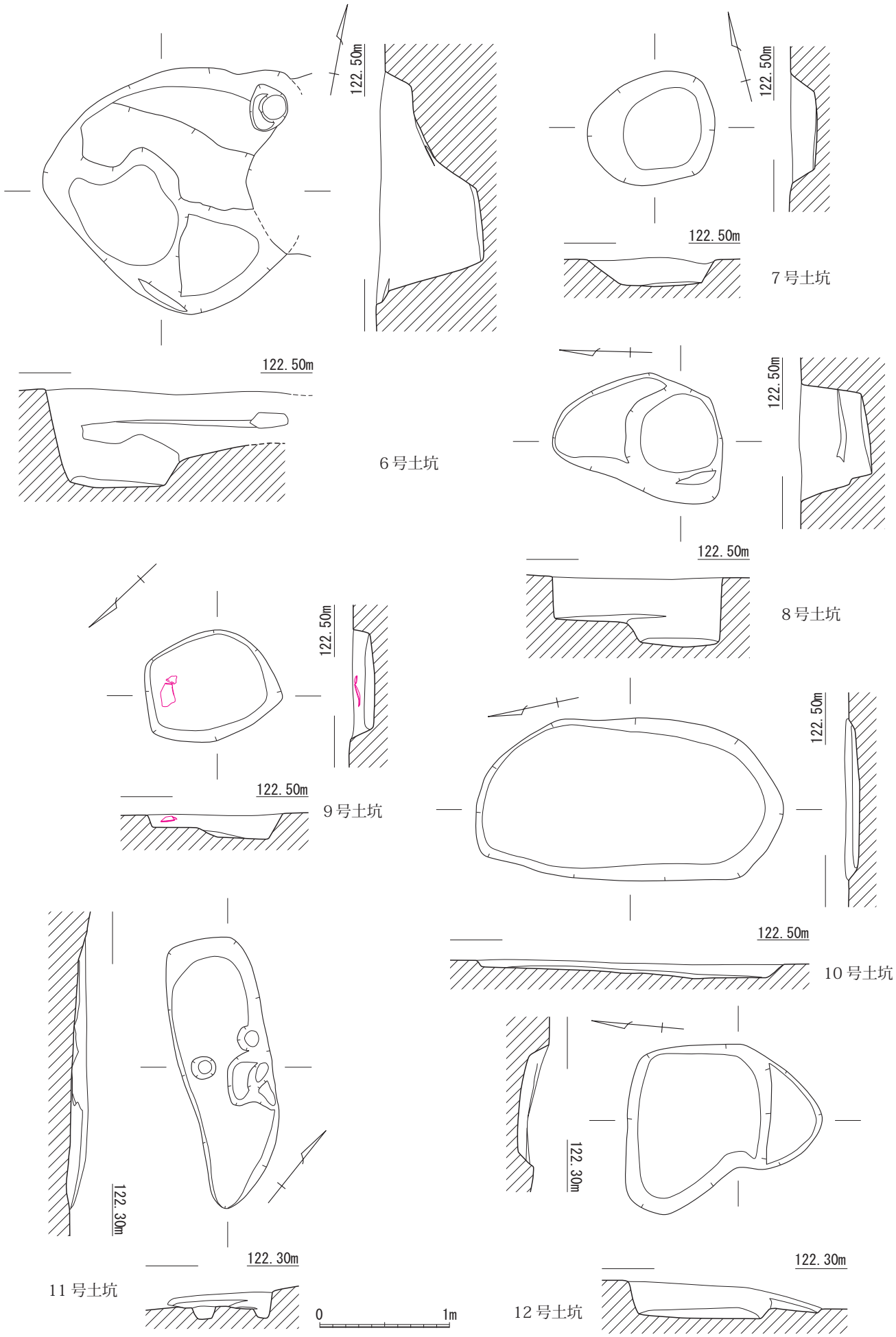
３号竪穴遺構の内側で確認され、これを切る。平面形は楕円形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 2.4 m、短軸約 1.3 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。遺物は弥生土器高坏が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 18 は高坏で、坏部下位と頸部が残る。坏部は端部に向かって直線的に開くとみられる。

11 号土坑（第 33 図）

７号竪穴住居跡の西側で確認され、これを切る。平面形はやや細長い歪な楕円形を呈する。床面には数個のピットがあるが、土坑に伴うかどうかは不明である。底面は緩やかに傾斜し、北西及び南東の壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 2.1 m、短軸約 0.7 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。



第33図　土坑実測図（２）(1/40)

12 号土坑（第 33 図　図版 13 ）

11 号土坑の北西側で確認された。平面形は不定形で、床面には段落ちがみられ、ほぼ平坦である。規模は長軸約 1.5 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 25 ㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

14 号土坑（第 34 図）

12 号土坑の西側で確認された。平面形は楕円形を呈する。床面は西側にピット状の落ち込みがみられ、平坦ではない。規模は長軸約 1.4 m、短軸約 0.5 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 20 ㎝を測る。埋土は上層が暗茶褐色、下層が暗灰褐色を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 19 は甕の口縁部である。中位付近がやや膨らみをもつ。

15 号土坑（第 34 図）

14 号土坑の東側に隣接して確認された。平面形は歪な楕円形を呈し、床面には緩やかな段落ちやピット状の落ち込みが見られる。壁は南東側を除き、緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 2.6 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは中央付近で約 20 ㎝を測る。埋土は灰茶褐色を呈し、炭や焼土を少量含む。遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 20 は甕の口縁部で、端部をやや肥厚させる。

16 号土坑（第 34 図　図版 14）

４号竪穴住居跡の内側で確認され、４号竪穴住居跡を切る。平面形は歪な楕円形を呈し、床面にはピット状の落ち込みが見られる。壁はやや傾斜して立ち上がる。規模は長軸約 1.2 m、短軸約 0.8 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 25 ㎝を測る。埋土は上層が暗茶褐色、下層が暗灰褐色を呈し、砂質である。遺物は弥生土器甕・壺が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 21 は甕で、口縁端部を肥厚させる。22 は壺か。

17 号土坑（第 34 図　図版 14）

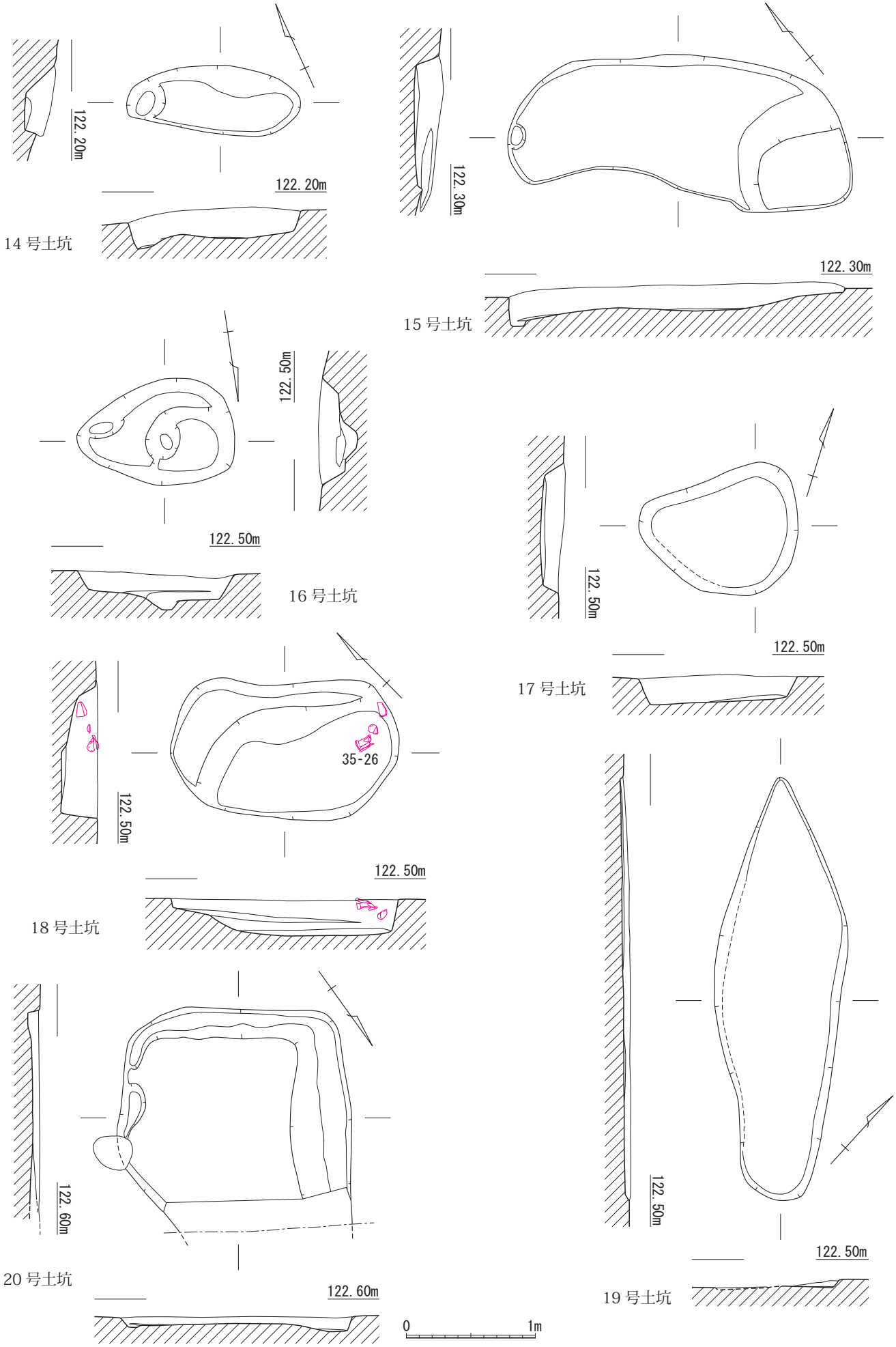
２号竪穴住居跡の内側で確認され、これを切る。平面形は隅丸の三角形に近い形を呈し、床面は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.2 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは約 20 ㎝を測る。埋土は暗茶褐色を呈し、焼土・炭が混じる。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

18 号土坑（第 34 図　図版 14）

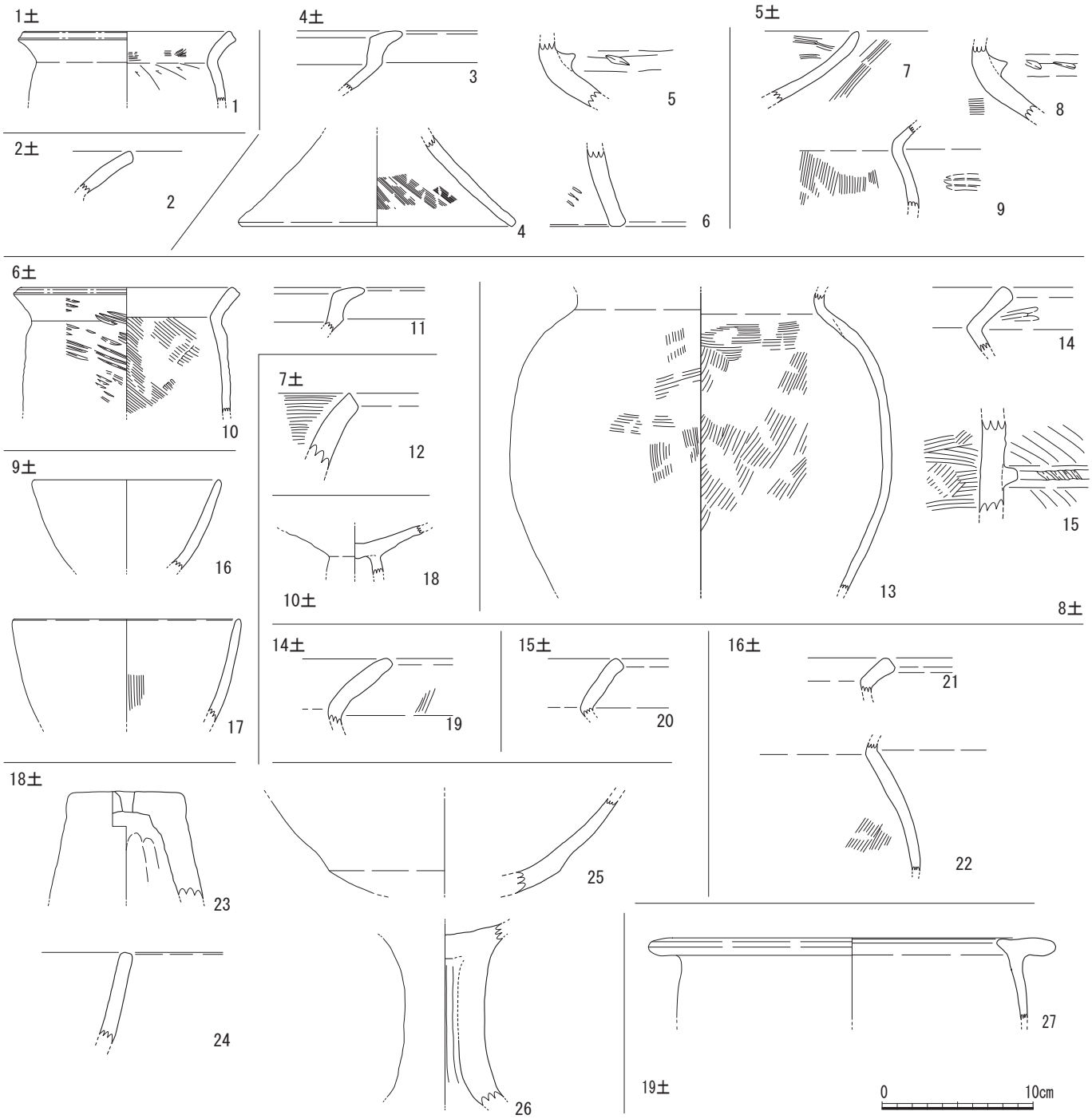
12 号竪穴住居跡の北側で確認され、これを切る。平面形は楕円形を呈し、床面には段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.8 m、短軸約 1.0 m、床面までの深さは約 30 ㎝を測る。遺物は弥生土器鉢・高坏・支脚が東側で床面から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第 35 図　図版 22）

第 35 図 23 は支脚である。24 は鉢か。口縁端部はやや丸味を持たせて仕上げる。25 は高坏坏部、26 は高坏脚で、



第 34 図　土坑実測図（３）(1/40)



第 35 図　土坑出土遺物実測図（１）(1/4)

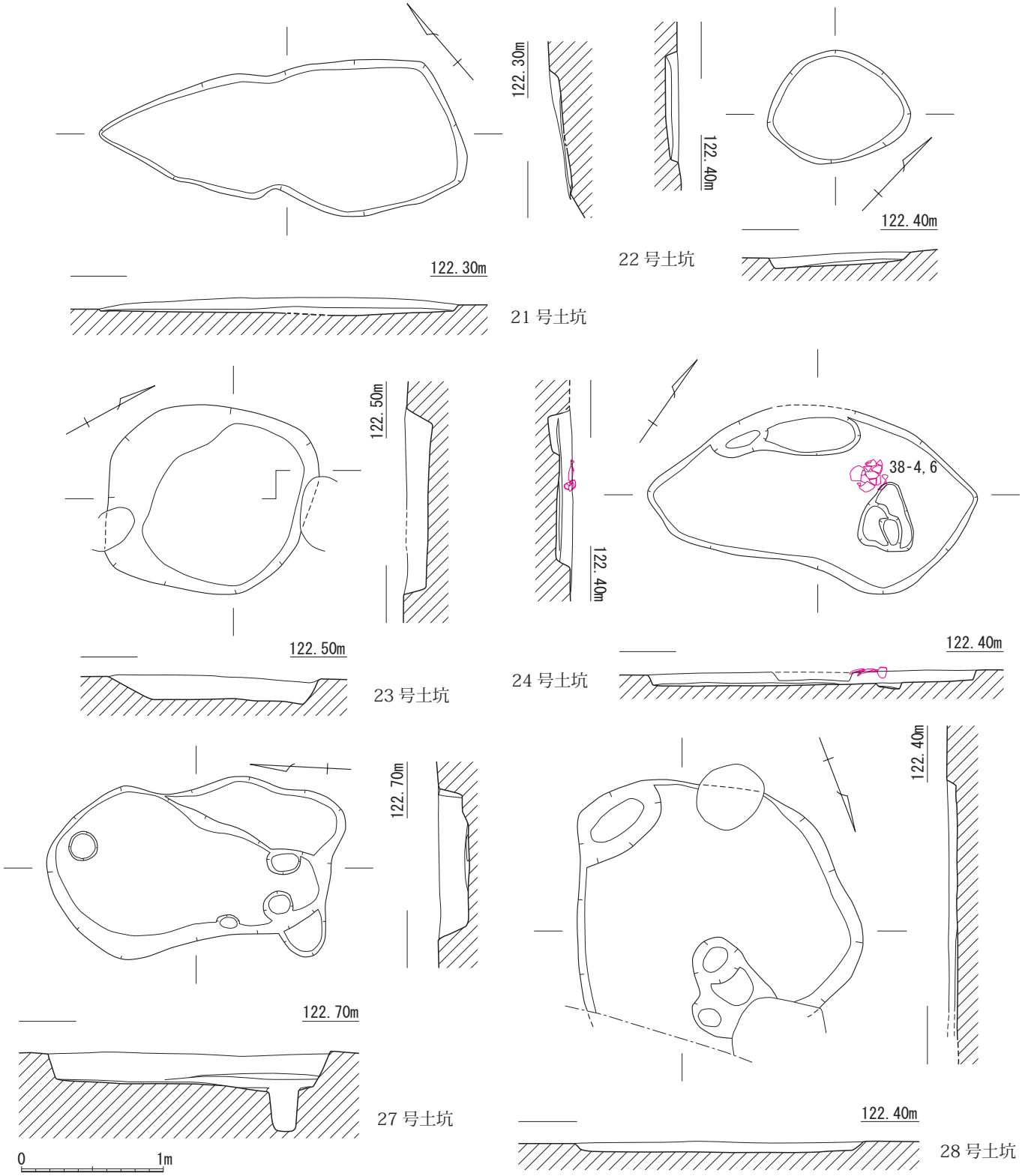
同一個体の可能性がある。

19 号土坑（第 34 図　図版）

１号竪穴住居跡の西側で確認された。平面形は歪な細長い楕円形を呈する。床面は平坦で壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 3.3 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは約 5 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図 27 は甕で逆「L」字形の口縁部である。内面はややつまみ出す。



第 36 図　土坑実測図（４）(1/40)

20 号土坑（第 34 図　図版 15）

調査区北側の北東壁際で確認され、北側は調査区外へ広がる。平面形は方形に近い形を呈する。床面はほぼ平坦だが、壁際に溝状の掘り込みが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.8 m、短軸約 1.5 m＋α、検出面からの深さは中央付近で約 10 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物（第 38 図　図版 22）

第 38 図 1 ～ 3 は甕である。 1 は頸部の屈曲が緩く、口縁部は直線的に開く。これに対し、 2 は頸部内面の屈

曲は明瞭で、外反して開く口縁部を持つ。3は底部でレンズ状を呈する。

21号土坑（第36図）

２号竪穴遺構の南側で確認された。平面形は19号土坑同様、歪な細長い楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約2.6 m、短軸約0.9 m、検出面からの深さは約10 ㎝を測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

22号土坑（第36図　図版15）

２号竪穴住居跡の南東側で確認され、これを切る。平面形はやや歪な円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.0 m、短軸約0.8 m、検出面からの深さは約10 ㎝を測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

23号土坑（第36図）

９号土坑の北側で確認され、これに切られる。平面形は歪な方形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は南西側を除き、急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.4 m、短軸約1.3 m、検出面からの深さは約15 ㎝を測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

24号土坑（第36図　図版15）

13号土坑の北側で確認された。平面形は歪な楕円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。規模は長軸約2.3 m、短軸は北壁が削られているものの、約1.1 mと推定され、検出面からの深さは約10 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕・高坏が出土している。

出土遺物（第38図　図版22）

第38図4は高坏口縁部である。5・6は甕である。5は頸部下位の傾きから、胴部の張りは小さいとみられる。6は胴部中位で最大径を測り、レンズ状の底部を持つ。

27号土坑（第36図　図版14）

１号竪穴住居跡の東側で確認された。平面形は不定形で、床面は平坦であるが、段落ちやピットが見られる。規模は長軸約2.0 m、短軸約1.1 m、検出面からの深さは中央付近で約20 ㎝、最も深いピットで約50 ㎝を測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

28号土坑（第36図）

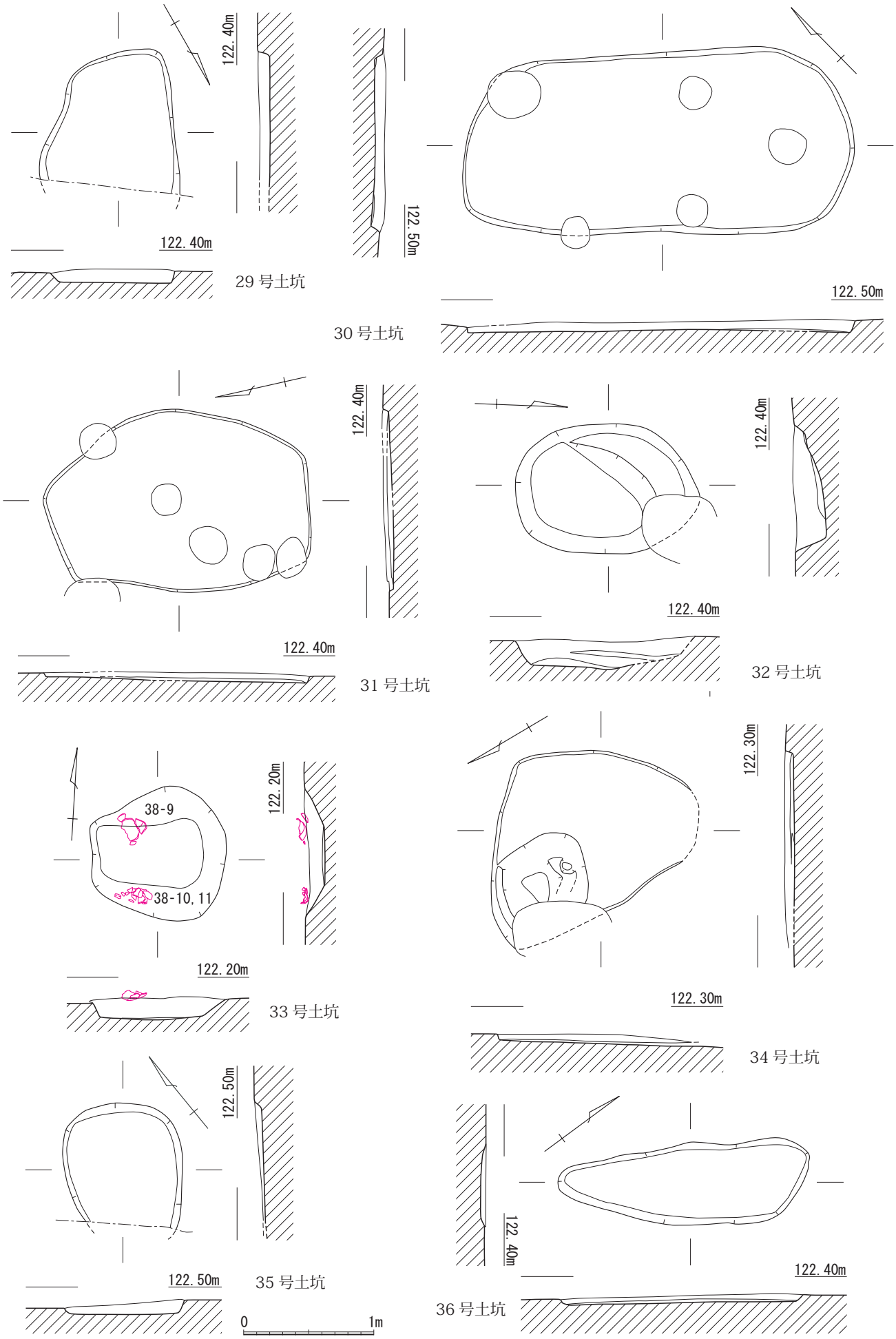
調査区中央の東側、C 11付近で確認された。平面形は不定形で、北側は調査区外へ広がる。床面は平坦であるが、ピットが見られる。規模は調査区外へ広がる長軸が約1.8 m＋α、短軸が約2.0 m、検出面からの深さは約5 ㎝を測る。遺物は弥生土器高坏が出土した。

出土遺物　（第38図　図版22）

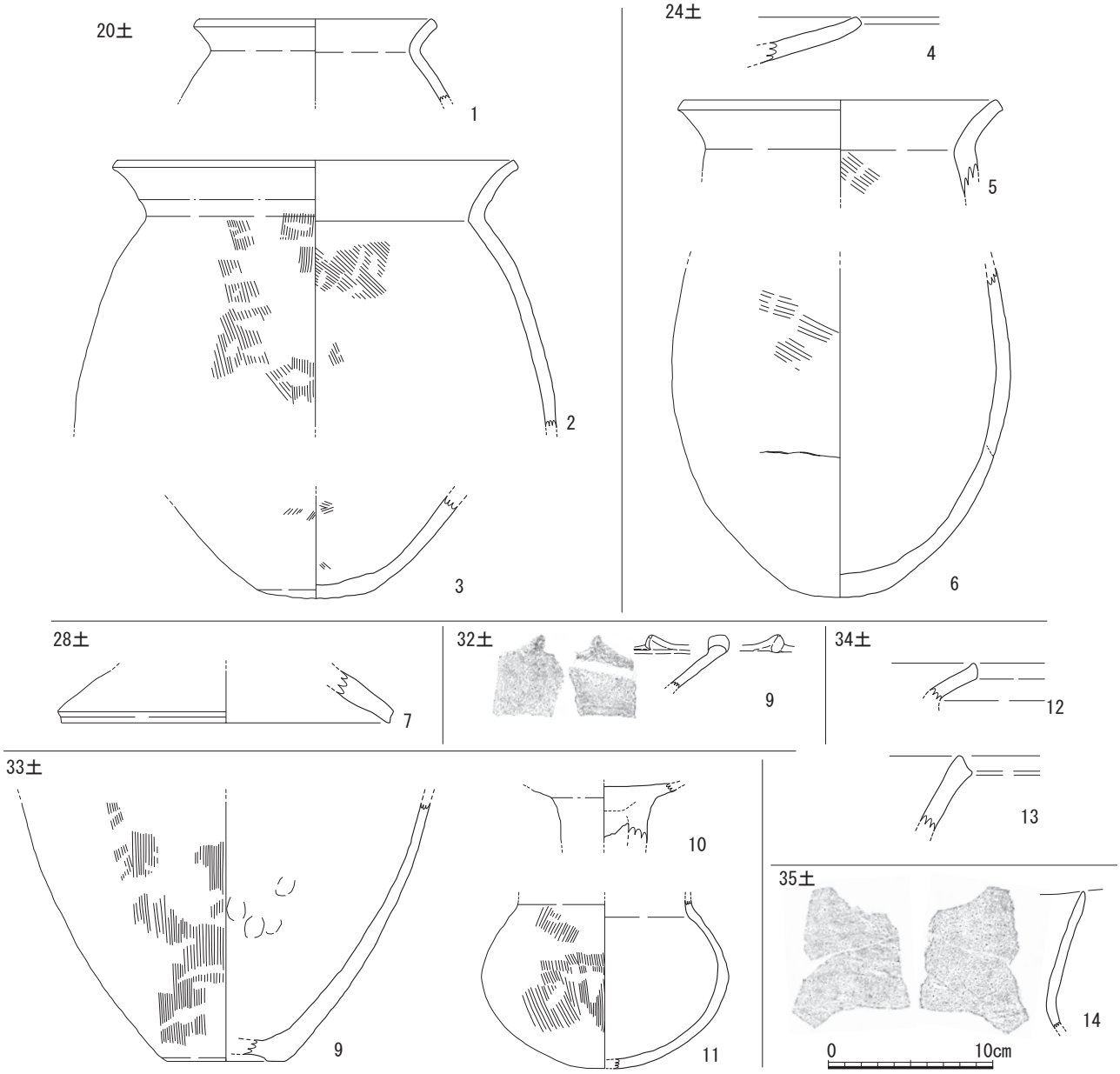
第38図7は高坏脚部である。端部付近のみの残存であるが、その傾きから開きは大きいと思われる。

29号土坑　（第37図）

28号土坑の北西側で確認された。北側は調査区外へ広がり、平面形はやや歪な方形を呈するとみられる。床



第 37 図　土坑実測図（５）(1/40)



第 38 図　土坑出土遺物実測図（２）（1/4）

面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.0 m＋α、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。遺物は出土しなかった。

30 号土坑　（第 37 図）

1 号竪穴住居跡の南側、Ｂ８グリッド内で確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸約 3.0 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。遺物は出土しなかった。

31 号土坑（第 37 図）

30 号土坑の南西側に隣接して確認された。平面形は角張り気味の楕円形に近い形を呈し、床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸約 2.0 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 5 ㎝を測る。遺物は出土しなかった。

32 号土坑（第 37 図）

9 号竪穴住居跡の内側で確認され、この住居を切る。平面形は楕円形を呈し、床面には段落ちが見られる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.4 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは最も深い中央付近で約 20 ㎝を測る。遺物は縄文土器浅鉢が出土している。

出土遺物

（第 38 図　図版 22）

第 38 図 8 は浅鉢の口縁部である。端部にリボン状の突起が見られる。

33 号土坑

（第 37 図　図版 16）

5 号竪穴住居跡の東隅角で確認され、この住居を切る。平面形は不定形で、床面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。規模は長軸・短軸とも約 1.0 m、検出面までの深さは約 15 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕・高坏が出土している。

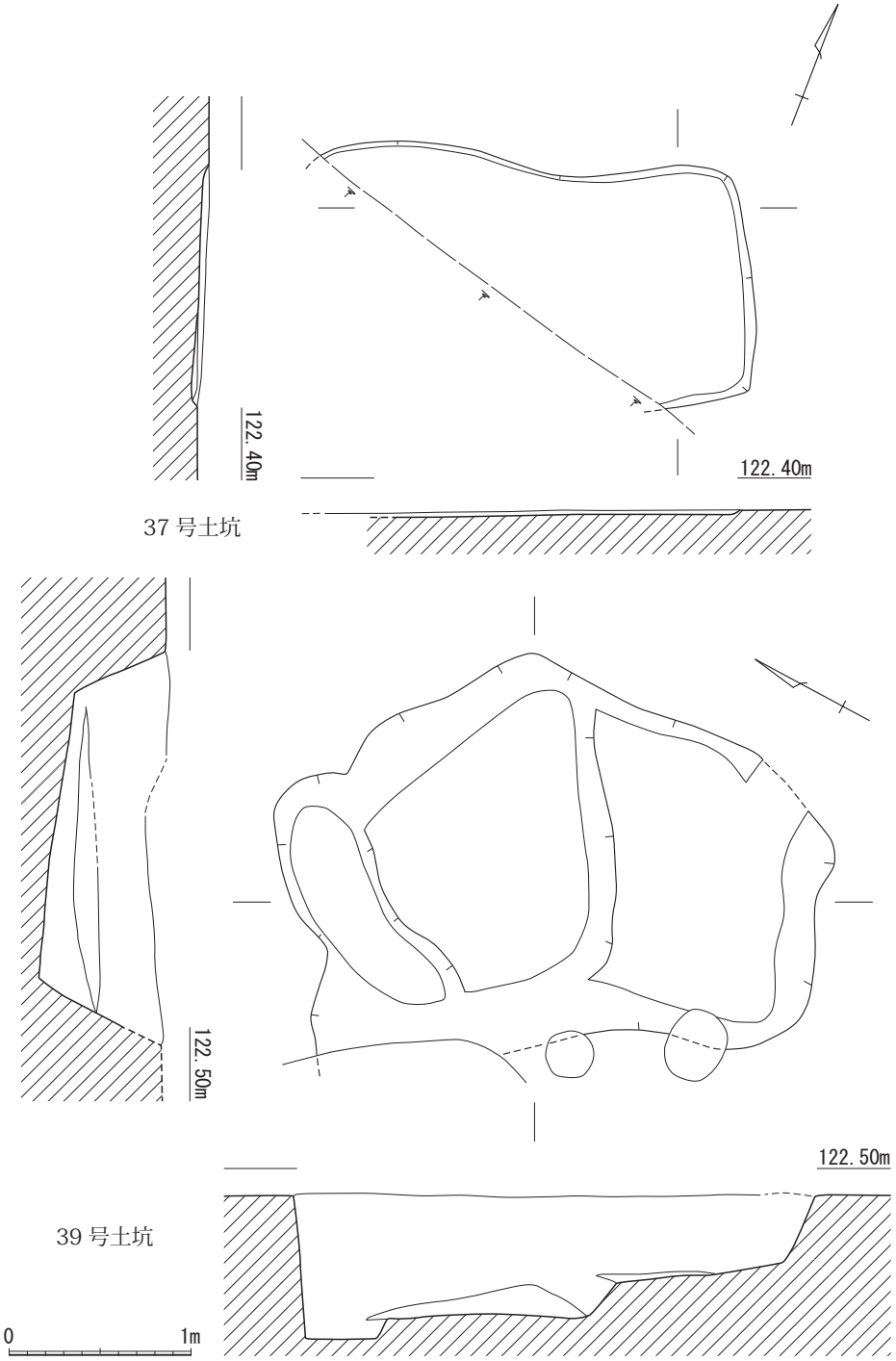
出土遺物

（第 38 図　図版 22）

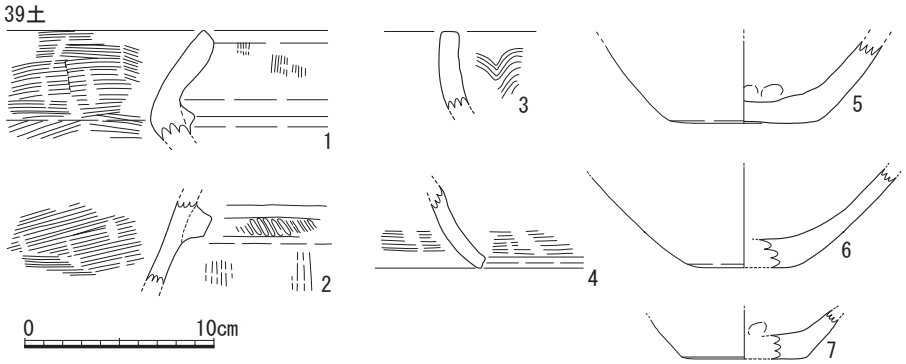
第 38 図 9 は甕である。底部は縁に平坦面を持ち、中心付近は上げ底となる。10 は高坏である。11 は小型の甕と思われる。

34 号土坑（第 37 図）

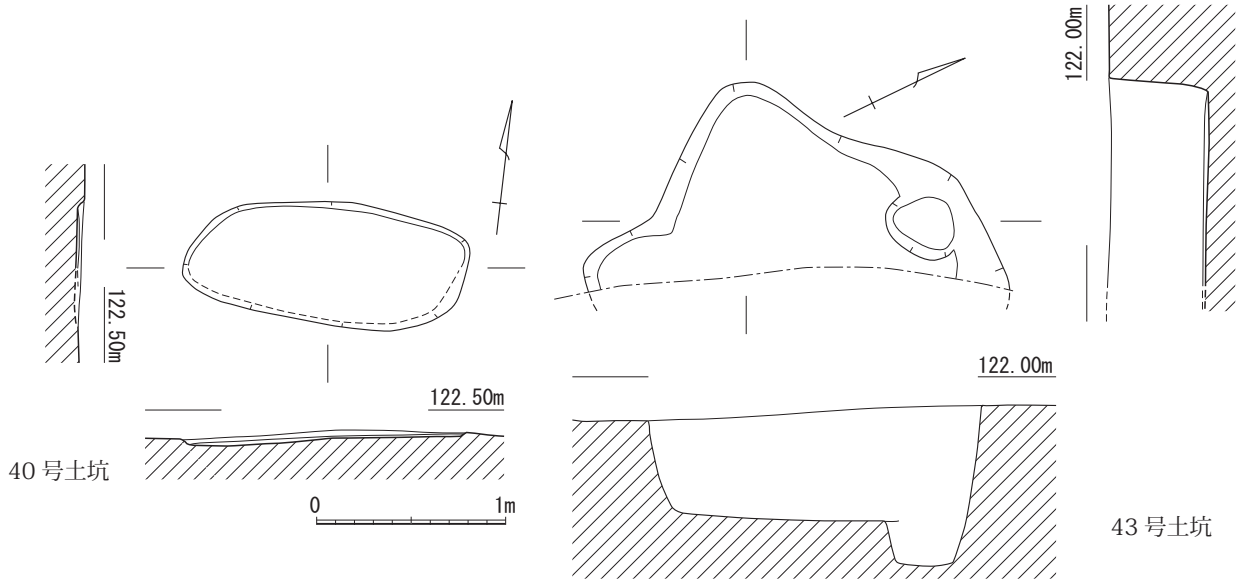
1 号土坑の北側で確認された。平面形は三角形に近い形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。規模



第 39 図　土坑実測図（６）(1/40)



第 40 図　土坑出土遺物実測図（３）(1/4)



第 41 図　土坑実測図（７）(1/40)

は長軸約 1.5 m＋α、短軸約 1.2 m＋α、検出面からの深さは約 5 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕・壺が出土している。

出土遺物

（第 38 図　図版 22）

第 38 図 12 は甕である。口縁端部をやや跳ね上げる。13 は壺である。口縁端部をやや窪ませる。

35 号土坑（第 37 図）

調査区北西側のＦ 13・Ｇ 13 グリッドで確認された。南西側は削平を受けているが、平面形は楕円形に近い形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。規模は長軸約 0.9 m、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を図る。遺物は縄文土器深鉢が出土している。

出土遺物（第 38 図）

第 38 図 14 は深鉢である。口縁端部はやや波状を呈する。

36 号土坑（第 37 図　図版 16）

35 号土坑の北側で確認された。平面形は細長く、歪な楕円形を呈し、床面は短軸がやや舟底状となる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.9 m、短軸約 0.6 m、検出面からの深さは約 5 ㎝を測る。遺物は出土しなかった。

37 号土坑（第 39 図）

36 号土坑の西側で確認された。西側は削平を受けているが、平面形は長方形に近い形を呈するとみられる。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.9 m＋α、短軸約 1.3 m、床面からの深さは 5 ㎝ほどである。遺物は出土しなかった。

39 号土坑（第 39 図）

３号竪穴遺構の東側で確認され、４号土坑に切られる。平面形は不定形で、床面には数段の段落ちが見られる。床面は１段目がやや傾斜しているが、２、３段目は平坦である。壁は北側を除き、緩やかに立ち上がる。規模は

長軸約 2.9 m、短軸約 2.2 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 80 ㎝を測る。遺物は弥生土器甕・壺・高坏が出土している。

出土遺物（第 40 図　図版 22）

第 40 図１～３は壺である。１は短く開く口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける。２は外面に波状文を施す。３は断面台形の突帯を貼り付け、突帯には刻み目を施す。４は高坏の脚部か。５～７は甕の底部である。いずれも平底である。

40 号土坑（第 41 図）

調査区北側のＥ 12 グリッドで確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は中央付近がやや高くなる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.5 m、短軸約 0.65 m、検出面からの深さは約５㎝を測る。

遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

41 号土坑（第 41 図）

調査区東壁際のＢ６グリッドで確認された。平面形は不定形で東側は調査区外へ広がる。北壁側にはピットがあるが、この土坑に伴うかどうかは不明である。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾しながら立ち上がる。規模は長軸約 1.8 m、短軸約 1.0 m＋α、検出面からの深さは中央付近で約 60 ㎝を測る。

遺物は出土しなかった。

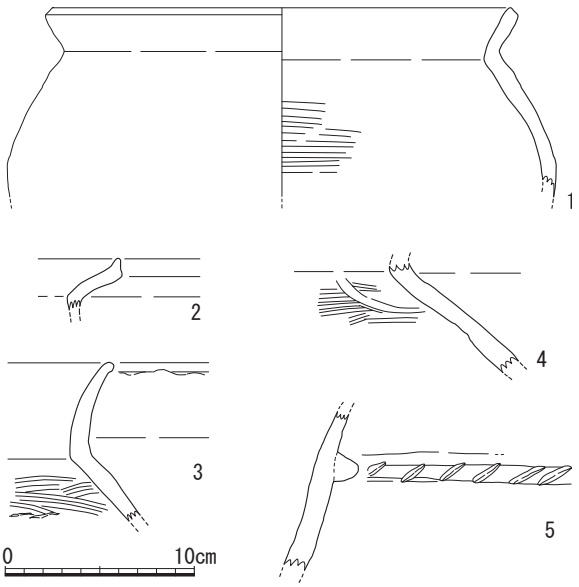
５．その他の遺物（第 42・43 図　図版 22・23）

ここでは遺構に伴わなかった遺物について説明する。出土位置等については、観察表を参照されたい。

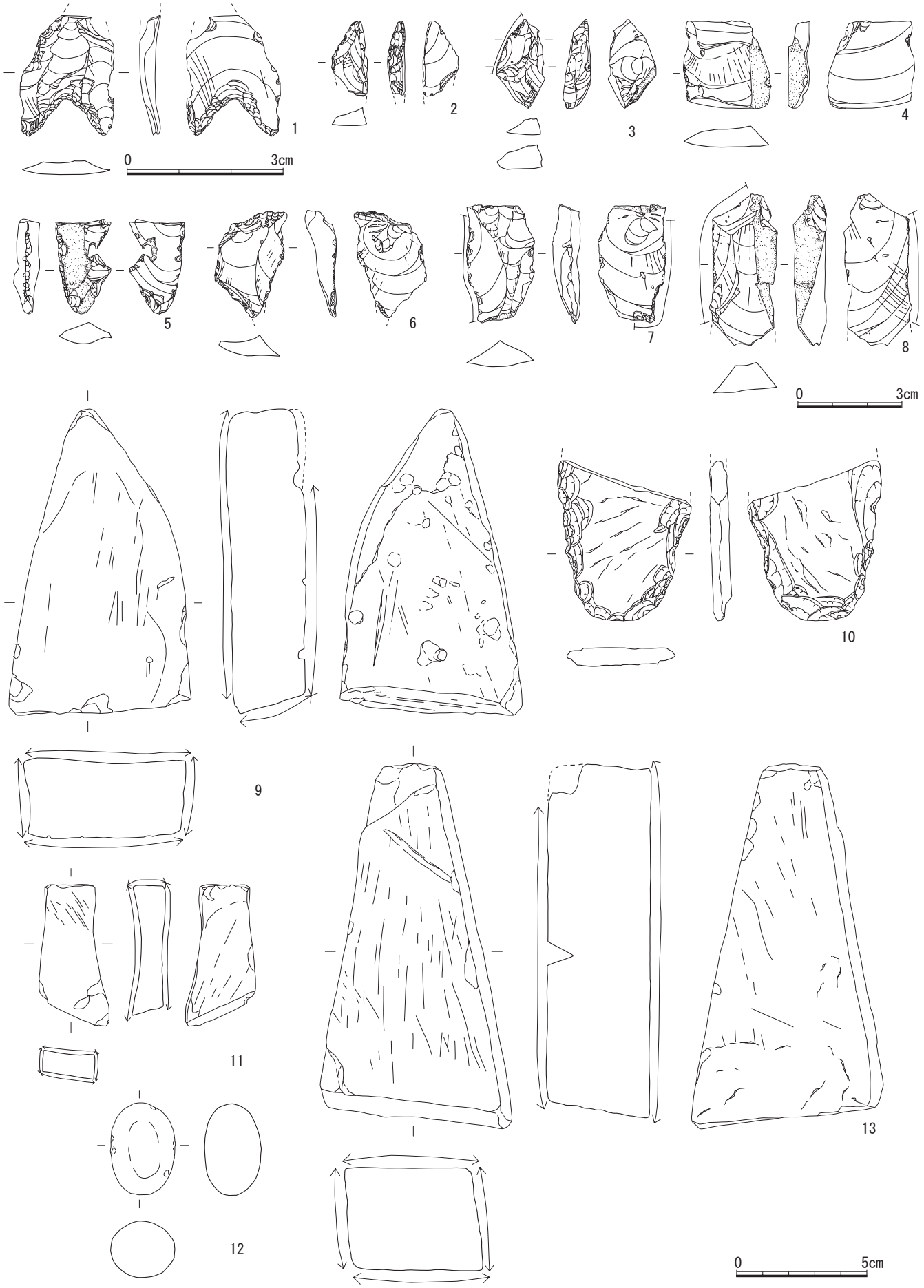
第 42 図１～３は弥生土器甕である。１は端部をやや肥厚させ、角張らせて仕上げる。２は跳ね上げ口縁、３は口縁部の傾きがあまりなく、端部を厚めに丸く仕上げる。４・５は弥生土器壺である。５は断面半楕円形の突帯を貼り付ける。

第 43 図１は腰岳産黒曜石製の剥片鏃である。先端が欠損する。２・３はナイフ形石器である。いずれも黒曜石製で２は針尾産、３は腰岳産と思われる。５はスクレイパーと考えられる。腰岳産黒曜石製である。４、６～８は剥片である。４・８の石材は腰岳産黒曜石である。６・７も黒曜石であるが、６は腰岳産、７は針尾産の可能性が高い。

９・11・13 は砥石である。いずれも一部が欠損するが、ほぼ完形に近い。石材はいずれも砂岩である。10 は片岩系の打製石斧である。刃部側の半分程度が残っているとみられる。12 は凝灰岩製の投弾である。



第 42 図　その他の土器実測図（1/4）



第 43 図　出土石器実測図（1:1/1, 2 ～ 8:2/3, 9 ～ 12:1/2）

Ⅳ まとめ

前章までに報告してきたように、今回の調査では竪穴住居跡・土坑などが確認された。これらの遺構の時期は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までのものとみられるが、その多くは弥生時代後期後半を中心としている[1]。

まず、各遺構の大まかな時期をみていく。最も古い遺構は 19 号土坑で中期後半～末と考えられる。続く後期前半に６・８・13・15・17 号竪穴住居跡がみられる。後期中頃～後半にかけて２・４・９号竪穴住居跡、後期後半～終末にかけて５・７・12 号竪穴住居跡が作られ、最後に１号竪穴住居跡が古墳時代初頭にかかるとみられる。16 号竪穴住居跡については、遺物からも切り合い関係からもその時期比定が困難である。

また、土坑に関しては８・20 号が後期中頃、９・24 号が後期後半、４～６・16・33 号が後期後半～終末、さらに 10・18・28 号が後期終末にあたるとみられる。その他の土坑に関しては、遺物が出土しなかったり、遺物が出土しても時期判断が難しかったりするものもあり、切り合い関係から大体の時期を指摘するのに留まるものもある。

以上述べてきた時期変遷をまとめると第１表のようになる。

この時期比定から、切り合い関係を考慮すると、後期において同時期に存在する住居は３軒前後とみられる。対岸の金田遺跡では５軒前後であったことから、さほど変わらない規模であったと考えられる[2]。

次に住居の規模についてみてみる。後期前半の住居は６号、12 号竪穴住居跡がそれぞれ、一辺約４m、2.9 m・3.4 m、15 号竪穴住居跡が約３mの規模である。これが中頃になると４号竪穴住居跡が 5.9 × 6.1 mと規模が大きくなり、５号、７号竪穴住居跡はともに４mを超える。さらに後半、終末から古墳時代初頭にかけて、長方形を呈する１号、12 号竪穴住居跡は、長辺がそれぞれ７m、５m＋αとさらに大型化してくる。こうした住居の大型化は市内におけるこれまでの調査でも、同じく後期前半から中頃にかけてみられ、今回の調査でも改めて同様の傾向があることが確認できた[3]。

第1表　検出遺構時期変遷表

遺構	弥生					古墳
	中　期	後　期				前　期
	後半～末	前半	中頃	後半	終末	初頭
19土	●					
6,13,15住		●				
8,17住		○				
39土		○	○			
8,20土			●			
2,4住			●	●		
9住			○	○		
3竪,9,24土				●		
4～6土				●	○	
14住		○	○	●	●	
16,33土				○	●	
5,7,12住,10,18,28土					●	
1住						●

●：最も多く出土している遺物の中心となる時期。

○：●以外でみられる遺物の時期、もしくは切り合い関係のみで判断するなど時期決定の根拠に乏しい遺構。

次に今回確認された住居のうち、14 号竪穴住居跡についてみていく。この住居はやや乱れたな平面形ではあるものの、床面の中央に掘り込まれた土坑を中心にして、円形に展開する 8 本の柱穴が確認されており、さらに数箇所の張り出しを持つ円形住居と考えられる。

出土遺物については、今回調査した遺構の中ではその数量が群を抜いて多く、時期は後期後半～終末までを中心に後期前半以降のものがみられ、他の遺構とほぼ同時期である。しかし、一般的に円形住居は後期初頭で作られなくなることから、この住居が後期終末まで継続していたとは考えにくい。そこで、市内における円形住居の時期をみると、既報告分で確認できるのは、11 遺跡で 70 軒ほどある。その中で詳細がわかるものを時期順に遺跡名と確認軒数を括弧内に列挙する[4]。

前期後半～末：小迫辻原 (2)

前期末～中期初頭：小迫辻原 (7)、後迫 (5)、吹上 (1)

中期前半：佐寺原 (4)、吹上 (2)、会所宮 (1)

中期中頃：佐寺原 (1)、金田 (2)、宇土 (1)

中期後半：後迫 (4)、佐寺原 (4)、金田 (2)、宇土 (7)

中期後半～後期初頭：後迫 (3)、金田 (7)、高野 (5)、大肥 (4)、祇園原 (6)、宇土 (2)

市内での円形住居は前期後半からみられるようになり、中期中頃までは、数遺跡で確認される程度だが、中期後半以降になると、それまで確認されていた遺跡に加え、高野遺跡、大肥遺跡等確認される遺跡やその軒数も一気に増加し、市内でもその分布域が広がったことが推測される。しかし、この後期初頭を以って円形住居は作られなくなり、方形住居にとって代わる。

このように市内の事例から円形住居は最も新しい例でも後期初頭とみられ、今回確認された 14 号竪穴住居跡が後期終末まで利用されていた可能性は低いと考えられる。そこで、一つの考え方として、後期初頭頃まで使用されていた住居がその廃絶後、埋没の過程で土器等の廃棄の場となった可能性がある。ただ、床面近くから出土している土器も多くあることから、その廃棄の開始時期や住居廃絶時の検討が必要であったと考えるが、結果的には担当者が発掘現場での遺物の出土状況の詳細な確認などを怠ったため、その検討ができなかったことをお詫びしたい。

続いて、縄文土器についてみてみる。今回の調査で出土した縄文土器は 15 点ほどであるが、このうち、12 号竪穴住居跡から出土した鉢形土器は、その口縁部形態（第 19 図 4 ）や上げ底の底部形態（同図 7 ～ 13）から後期後葉に属するとみられる。また、 6 号竪穴住居跡（第 13 図 3 ・ 4)、32・35 号土坑出土の鉢形土器 (第 38 図 9 ・14) は、晩期前葉のものと考えられる。なお、今回出土したこれらの縄文土器は流れ込みによる可能性が高く、遺構に伴う可能性は低い。ただ、求来里川流域においては、町ノ坪遺跡で縄文時代後期の遺物包含層、金田遺跡では後期の土器の出土が見られ、また名里遺跡においては前期、後期の遺物包含層や早、中、晩期の遺物が確認されている[5]。こうしたことから、縄文時代の全時期を通して、求来里川流域を生活域として利用していたことが判明した。

求来里川流域における集落は、金田遺跡で弥生時代中期中頃に確認されて以降、後期前半には小西遺跡でも比較的まとまった数の住居がみられるようになる。この 2 つの集落は、求来里川を挟んで後期終末まで継続するが、これ以降、金田遺跡では古墳時代後期まで断続的に集落がみられるのに対し、小西遺跡では古墳時代初頭を以って、集落は見られなくなる。これまでの調査で古墳時代以降は求来里川の上流域に集落が拡大していくことが確認されているが[6]、その時期、小西遺跡付近では、どのような土地利用が行われていたのか、興味深い問題である。

註

(1) 弥生土器の編年は坂本氏（1999)、柳田氏（柳田 1987)、吉田氏（吉田 2001)、平尾氏（2001）の編年などを参考にした。

(2) 若杉竜太『求来里の遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 89 集　日田市教育委員会　2009

(3) 若杉竜太『本村遺跡 3 次』日田市埋蔵文化財調査報告書第 51 集　日田市教育委員会　2004
若杉竜太『高野遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 65 集　日田市教育委員会　2006

(4) 数回の建て替えが考えられるものはそれぞれを 1 軒とした。軒数は、調査範囲内での確認軒数なので、直接的には参考にはならないが、目安として挙げた。

(5) 今田秀樹「町ノ坪遺跡D区」『平成 17 年度（2005 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2007
今田秀樹「名里遺跡」『平成 19 年度（2007 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2008
及び註 (2) 文献
また、名里遺跡では市内で 2 例目となるトロトロ石器が出土している。

(6) 渡邉隆行編『求来里の遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 88 集　日田市教育委員会　2009
若杉竜太「求来里平島遺跡」『平成 17 年度（2005 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2007
及び註 (5) 文献

（参考文献）

後藤一重編『香々地の遺跡Ⅱ』香々地町文化財調査報告書第 2 集　大分県香々地町教育委員会　1995
渋谷忠章ほか編『宇土遺跡発掘調査報告書』大分県天瀬町教育委員会　1986
坂本嘉弘「玖珠盆地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年」同編『陣ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第 9 集　玖珠町教育委員会　1999
下村智編『吹上Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 52 集　日田市教育委員会　200
高橋徹・後藤一重編『菅生台地と周辺の遺跡 XI　下菅生Ｂ遺跡　上菅生Ｂ遺跡』竹田市教育委員会　1986
田中裕介編『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 10　大分県教育委員会　1999
土居和幸ほか編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 11 集　日田市教育委員会　1996
友岡信彦・松本康弘編『佐寺原遺跡　尾漕遺跡群　有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（9）大分県教育委員会　1998
友岡信彦『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（18）大分県教育委員会　2001
原田昭一ほか編『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第 31 集　大分県教育庁埋蔵文化財センター　2008
平尾和久「浮羽郡内における弥生時代後期の土器について」吉田東明編『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』下巻　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 14 集　福岡県教育委員会　2001
柳田康雄「２．高三潴式と西新町式土器」佐原眞編『弥生時代の研究』4 弥生土器Ⅱ　雄山閣　1987
行時桂子『祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺構編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第 81 集　日田市教育委員会　2007
行時桂子『祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺物編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第 87 集　日田市教育委員会　2008
行時志郎「徳瀬遺跡Ｂ区」『平成 5 年度　日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995
吉田東明「仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について」同編『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』下巻　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 14 集　福岡県教育委員会　2001
若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 35 集　日田市教育委員会　2002
若杉竜太・比嘉えりか「佐寺原遺跡 2 次、3 次調査」『平成 20 年度（2008 年度）日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　2009
渡邉隆行『大肥遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 66 集　日田市教育委員会　2006

第2表　出土土器観察表（1）

挿図番号	出土遺構	写真図版	種別	器種	法量：（　）は復元径・残存高				調整		胎土							焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		外面	内面	
第5図1	1住		弥生土器	甕	(12.4)			(7.7)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○		○	良	灰褐色	橙色	
第5図2	1住		弥生土器	甕				(9.0)	ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○		良	橙色	灰褐色	
第5図3	1住	17	弥生土器	鉢	(14.7)			12.5	タタキ・ナデ	ナデ	○	○	○			○		○	良	明褐色	橙色	スス付着
第5図4	1住	17	弥生土器	鉢	11.6			8.0	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	○	○	○		○	○	○		良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒斑有
第5図5	1住	17	弥生土器	高杯			(13.6)	(6.2)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ？	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄橙色	黄橙色	
第5図6	1住	17	弥生土器	高杯	17.4		(9.9)	12.1	ナデ	ナデ・ミガキ	○	○	○		○	○	○	○	良	赤褐色	赤褐色	丹残存
第5図7	1住		弥生土器	高杯				(8.2)	ミガキ	ナデ・シボリ	○	○	○		○	○		○	良	灰黄褐色	にぶい黄橙色	
第7図1	2住	17	弥生土器	壺	(15.0)	(23.2)		(24.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	内外面スス付着・黒斑有
第7図2	2住		弥生土器	甕				(5.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○			良	にぶい黄橙色	橙色	
第7図3	2住	17	弥生土器	甕	(19.0)			(9.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○		○	良	褐色	にぶい褐色	内外面スス付着
第7図4	2住		弥生土器	壺	(17.0)			(6.2)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○		○	良	浅黄橙色	明黄褐色	刻目口縁
第7図5	2住		弥生土器	壺				(4.5)	ハケ・ナデ	ナデ？・ハケ	○	○	○		○	○		○	良	浅黄橙色	橙色	刻目突帯
第7図6	2住	17	弥生土器	甕				(9.3)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○			○			良	にぶい黄褐色	明黄褐色	スス付着
第7図7	2住		弥生土器	甕				(5.8)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第7図8	2住		弥生土器	甕				(2.5)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○			良	黄褐色	暗灰黄色	
第7図9	2住		弥生土器	甕				(2.2)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○			良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第9図1	4住	17	弥生土器	壺	(16.8)			(10.0)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	黄橙色	黄橙色	
第9図2	4住	17	弥生土器	甕		(28.4)		(26.8)	タタキ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	明黄褐色	スス付着・刻目突帯
第9図3	4住	17	弥生土器	甕？		(29.6)		(24.2)	ハケ・タタキ	ハケ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	明黄褐色	スス付着
第9図4	4住	17	弥生土器	甕		(32.8)	(7.8)	(23.2)	ハケ・タタキ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○		○	良	明赤褐色	明黄褐色	底部にもハケ有
第9図5	4住		弥生土器	鉢	(14.6)			(5.6)	ナデ	ナデ	○	○	○			○			良	赤茶色	赤茶色	
第9図6	4住	17	弥生土器	鉢				(5.0)	ハケ・ナデ	ハケ	○	○	○		○	○	○		良	明赤褐色	赤褐色	底部にもハケ有
第9図7	4住		弥生土器	高杯				(3.7)	ナデ	ナデ？	○	○	○		○	○		○	良	黄橙色	黄橙色	
第9図8	4住		弥生土器	壺				(6.9)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○		○		○				良	黄褐色	黄灰褐色	
第9図9	4住	17	弥生土器	高杯				(10.9)	ハケ・ナデ	ナデ・シボリ		○	○		○	○		○	良	にぶい黄褐色	暗褐色	穿孔有
第9図10	4住		弥生土器	高杯				(4.1)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○		良	橙色	灰褐色	穿孔有
第9図11	4住		弥生土器	高杯				(6.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	やや不良	灰黄色	灰黄色	
第11図1	5住	17	弥生土器	甕	(21.8)	(26.8)		(24.2)	ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	黒斑有
第11図2	5住	17	弥生土器	甕	(22.6)	(23.2)		(24.4)	ハケ・タタキ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○			○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄色	スス付着
第11図3	5住		弥生土器	甕	(21.4)			(2.7)	ナデ	ナデ	○	○	○		○				良	にぶい黄橙色	灰黄色	内面黒斑有
第11図4	5住	18	弥生土器	甕	(18.0)	21.4		(29.8)	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○		良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	スス付着・黒斑有
第11図5	5住	18	弥生土器	甕				(19.9)	タタキ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○			○	○		良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	スス付着
第11図6	5住	18	弥生土器	壺	(12.6)			(13.4)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○	○	やや不良	灰白色	浅黄橙色	スス付着
第11図7	5住		弥生土器	甕			2.8	(2.5)	タタキ・ナデ	指オサエ	○	○				○			良	暗黄褐色	暗褐色	
第11図8	5住	18	弥生土器	鉢	11.5			5.7	ナデ・指オサエ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第13図1	6住	18	弥生土器	甕	(14.6)	(14.9)		(18.0)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○		○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	外面にスス付着
第13図2	6住	18	弥生土器	壺	(14.7)	(25.5)		(16.1)	ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ	○	○	○		○		○	○	良	明黄褐色	灰黄色	
第13図3	6住	18	縄文土器	浅鉢				(6.2)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	暗灰黄色	
第13図4	6住		縄文土器	浅鉢				(2.5)	ナデ・ミガキ	ナデ	○	○	○		○	○		○	良	黒褐色	にぶい黄褐色	
第13図5	6住		弥生土器	壺				(3.0)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○			良	浅黄橙色	浅黄橙色	黒斑有
第15図1	7住	18	弥生土器	甕		28.8		(32.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	黒斑有
第15図2	7住		弥生土器	甕	(15.4)	(13.8)		(5.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○			○	○		良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第15図3	7住	18	縄文土器	鉢		(23.0)		(10.0)	丁寧なナデ	摩滅により不明		○	○		○	○	○	○	良	にぶい赤褐色	明赤褐色	
第15図4	7住		土師器	甕				(5.5)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○		○	良	明赤褐色	明赤褐色	
第17図1	9住		弥生土器	甕				(7.4)	ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	黒色	
第17図2	9住		弥生土器	壺				(4.0)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	にぶい橙色	
第17図3	9住		弥生土器	甕			(7.1)	(3.6)	ナデ	ナデ		○	○		○	○		○	良	赤褐色	黒褐色	
第19図1	12住	18	弥生土器	壺	(15.5)			(11.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	黄橙色	
第19図2	12住		弥生土器	高杯				(2.6)	ナデ	ナデ		○	○			○		○	良	浅黄色	浅黄色	
第19図3	12住		弥生土器	器台			(14.2)	(7.0)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第19図4	12住	18	縄文土器	鉢				(6.8)	丁寧なナデ	摩滅により不明	○	○	○			○		○	良	灰褐色	明褐色	
第19図5	12住		縄文土器	鉢				(4.2)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	黒褐色	灰黄褐色	

第3表　出土土器観察表（2）

挿図番号	出土遺構	写真図版	種別	器種	法量：（　）は復元径・残存高				調整		胎土							焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		外面	内面	
第19図6	12住		縄文土器	鉢				(4.6)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	黒褐色	灰黄褐色	
第19図7	12住	18	縄文土器	鉢			(6.2)	(1.8)	不明	ナデか？	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	にぶい黄橙色	
第19図8	12住		縄文土器	鉢			(5.8)	(1.9)	摩滅により不明	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	灰褐色	
第19図9	12住	18	縄文土器	鉢			4.0	(1.7)	ナデ	ナデ	○	○	○			○	○	○	良	黄橙色	黒褐色	
第19図10	12住	18	縄文土器	鉢			(9.4)	(1.7)	ナデ	剥落のため不明	○	○	○		○	○	○	○	良	明黄褐色	黒褐色	
第19図11	12住	18	縄文土器	鉢			8.0	(1.7)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○		○	良	明黄褐色	灰黄褐色	
第19図12	12住	18	縄文土器	鉢			(6.0)	(4.1)	ナデか？	ナデか？	○	○	○		○	○		○	良	暗黄褐色	褐灰色	
第19図13	12住		縄文土器	？			(5.6)	(2.6)	ナデ	ナデか？	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	灰黄褐色	
第20図1	13住		弥生土器	甕	(23.6)			(7.1)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第20図2	13住		弥生土器	器台			(10.0)	(7.9)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第22図1	14住	19	弥生土器	甕	(23.0)	(26.4)	(7.7)	36.0	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○		○	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第22図2	14住	19	弥生土器	甕	17.0	16.5	6.0	23.2	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○	○	○	○	○	○	良	明黄褐色	にぶい黄橙色	スス付着
第22図3	14住	19	弥生土器	甕	(12.9)	14.8	4.4	(13.2)	ナデ・ケズリ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第22図4	14住	19	弥生土器	甕	(19.6)	(20.0)		(19.7)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○			良	灰黄褐色	浅黄橙色	スス付着
第22図5	14住		弥生土器	甕	(20.6)	(19.8)		(12.2)	ナデ？	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	
第22図6	14住	19	弥生土器	甕	22.4	26.3		(29.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	明黄褐色	スス付着
第22図7	14住	19	弥生土器	甕	(21.5)	(22.4)		(12.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	スス付着
第22図8	14住		弥生土器	甕				(8.9)	ハケ？・ナデ？	ハケ・ナデ	○		○		○	○			良	浅黄色	浅黄色	
第22図9	14住		弥生土器	甕	(19.2)			(11.1)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○		良	浅黄色	灰黄色	
第22図10	14住		弥生土器	甕	(18.2)			(11.1)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	
第22図11	14住	19	弥生土器	甕	24.6	27.1		(24.4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○	○		○	○	○	良	黄橙色	黄橙色	スス付着・黒斑有
第22図12	14住	19	弥生土器	甕		(31.2)		(24.6)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	スス付着
第23図1	14住	19	弥生土器	甕				(18.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	突帯有
第23図2	14住	19	弥生土器	甕			7.0	(22.1)	ハケ・ナデ？	ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	橙色	摩耗が全体的に激しい
第23図3	14住	19	弥生土器	甕		(21.6)	(10.0)	(18.9)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	にぶい黄褐色	ススス付着
第23図4	14住	19	弥生土器	甕			(6.2)	(13.3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○		良	明赤褐色	明黄褐色	スス付着
第23図5	14住	19	弥生土器	壺			(5.0)	(8.0)	ナデ	ハケ・ナデ？		○	○		○	○		○	良	明黄褐色	灰黄褐色	
第23図6	14住	19	弥生土器	壺			7.4	(8.4)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	灰黄褐色	
第23図7	14住		弥生土器	甕			(6.0)	(12.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ？	○	○	○			○			良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第23図8	14住		弥生土器	甕			(8.0)	(7.5)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○			良	淡橙色	淡橙色	
第23図9	14住		弥生土器	壺			(8.8)	(6.9)	ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ		○	○		○	○		○	良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	
第23図10	14住	19	弥生土器	壺			9.6	(9.9)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	明赤褐色	
第23図11	14住	19	弥生土器	甕			(6.0)	(10.6)	ハケ・ナデ？	ナデ・指オサエ		○	○		○	○		○	良	橙色	にぶい黄褐色	スス付着
第23図12	14住		弥生土器	甕			(7.4)	(11.4)	摩滅により不明	ナデ・指オサエ	○	○	○			○			良	淡赤褐色	黄茶色	
第23図13	14住		弥生土器	甕			5.7	(13.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○		良	暗茶褐色	赤褐色	
第24図1	14住	19	弥生土器	壺	14.8	25.1	7.6	37.8	ハケ・タタキ・ナデ	ナデ・指オサエ・工具痕		○	○		○		○	○	良	浅黄橙色	灰黄褐色	ヘラ描き有・突帯有
第24図2	14住	19	弥生土器	甕	(10.0)	(12.7)	(4.6)	15.2	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○			○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面に黒斑
第24図3	14住	20	弥生土器	壺	(10.3)	19.0	6.2	20.3	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○		良	淡黄色	黄灰色	黒斑有
第24図4	14住	20	弥生土器	壺	17.4	(26.8)	6.8	34.3	ナデ・ケズリ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	黒斑有・刻目突帯有
第24図5	14住		弥生土器	甕	(16.0)	(28.6)		(19.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○			○			良	淡黄色	灰黒色	スス付着
第24図6	14住	20	弥生土器	甕	(22.2)			(15.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第24図7	14住		弥生土器	壺	(15.6)			(5.0)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	外面スス付着
第24図8	14住		弥生土器	壺	(15.4)			(8.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	浅黄色	浅黄色	
第24図9	14住	20	弥生土器	壺				(10.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	浅黄橙色	
第24図10	14住	20	弥生土器	壺				(8.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	灰黄色	にぶい黄橙色	刻目突帯有
第24図11	14住		弥生土器	壺		(13.0)		(7.9)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	浅黄色	暗灰黄色	
第25図1	14住	20	弥生土器	高杯	21.6		15.4	23.1	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ？・ハケ ミガキ・シボリ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい橙色	橙色	黒斑有
第25図2	14住	20	弥生土器	高杯	(19.6)			(4.7)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	黒斑有
第25図3	14住	20	弥生土器	高杯	28.9			(7.5)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		○		良	浅黄橙色	浅黄橙色	口縁部に丹一部残存
第25図4	14住	20	弥生土器	高杯	27.8			(9.8)	ナデ	ナデ・ミガキ		○	○		○		○		良	黄橙色	黄橙色	外面に黒斑有・全体に丹がわずかに残存
第25図5	14住	20	弥生土器	高杯	(22.6)			(6.4)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	
第25図6	14住	20	弥生土器	高杯				(14.3)	ナデ	ハケ・指オサエ シボリ	○	○	○		○	○	○		良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	一部丹残存
第25図7	14住	20	弥生土器	高杯			(16.8)	(15.0)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ？ 指オサエ・シボリ	○	○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	

第4表　出土土器観察表（3）

挿図番号	出土遺構	写真図版	種別	器種	法量：（　）は復元径・残存高				調整		胎土							焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		外面	内面	
第25図8	14住	20	弥生土器	高杯			(17.4)	(7.4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい橙色	浅黄橙色	一部丹塗残有
第25図9	14住		弥生土器	高杯				(8.8)	ナデ	ナデ・シボリ		○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第25図10	14住	20	弥生土器	高杯				(12.0)	ハケ・ナデ	ナデ・シボリ	○	○	○		○	○	○	○	良	黄橙色	黄橙色	一部丹塗残存、穿孔有
第25図11	14住	20	弥生土器	高杯				(10.6)	ナデ	ナデ・シボリ	○	○	○		○	○	○	○	良	赤褐色	明赤褐色	
第25図12	14住	21	弥生土器	高杯				(9.0)	ナデ	ナデ・シボリ		○	○		○		○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	突帯有
第25図13	14住	21	弥生土器	高杯				(7.8)	ハケ・ナデ？	ナデ・シボリ		○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	橙色	
第26図1	14住	21	弥生土器	鉢	(10.2)			10.5	ハケ・ナデ？・指オサエ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	明黄褐色	にぶい黄橙色	スス付着・赤変か？
第26図2	14住	21	弥生土器	鉢	15.3		3.1	7.3	ナデ？・ミガキ	ミガキ	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
第26図3	14住	21	弥生土器	鉢	16.3		5.0	10.4	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	黒斑有
第26図4	14住	21	弥生土器	鉢	(12.8)		(4.8)	12.0	ナデ	ナデ	○	○	○		○			○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面に黒斑
第26図5	14住	21	弥生土器	ミニチュア	(5.4)		2.5	4.3	ナデ	ナデ		○	○		○				良	にぶい黄褐色	浅黄橙色	外面スス付着・黒斑有
第26図6	14住	21	弥生土器	鉢	10.2		4.6	6.3	ナデ	ナデ	○	○	○		○			○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面に黒斑有
第26図7	14住	21	弥生土器	鉢			4.9	(8.5)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○		○	良	明黄褐色	明黄褐色	黒斑有
第26図8	14住	21	弥生土器	器台	(12.6)		(11.2)	17.9	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第26図9	14住	21	弥生土器	器台				(14.3)	ハケ・ナデ	ナデ・シボリ		○	○		○		○	○	良	淡黄色	暗灰黄色	一部丹塗残存有
第26図10	14住		弥生土器	器台			(11.0)	(9.3)	ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第26図11	14住		弥生土器	器台	(9.6)			(8.2)	ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第26図12	14住		弥生土器	器台				(9.9)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	
第26図13	14住		弥生土器	器台	(5.0)			(7.2)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	黄橙色	にぶい黄橙色	
第27図1	15住		弥生土器	甕	(23.6)			(4.8)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○	○	○				良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	
第27図2	16住		弥生土器	甕				(2.7)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第30図1	1竪		弥生土器	甕				(3.9)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	
第30図2	1竪		弥生土器	甕				(3.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	
第30図3	3竪		弥生土器	甕				(4.5)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			良	明黄褐色	にぶい黄橙色	
第30図4	3竪		弥生土器	壺				(6.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○			良	淡黄色	淡黄色	
第30図5	3竪		弥生土器	甕	(16.6)			(6.9)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○				○		○	良	赤茶色	赤茶色	
第30図6	3竪	21	弥生土器	高杯				(12.3)	ハケ・ナデ	ハケ・シボリ		○	○		○	○	○	○	良	橙色	明赤褐色	
第30図7	3竪	21	弥生土器	高杯				(10.4)	ハケ・ナデ	ナデ・シボリ		○	○		○		○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面スス付着
第30図8	3竪		土師器	甕	(13.2)			(6.2)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○			○	○	○	良	にぶい橙色	橙色	スス付着
第30図9	3竪	21	弥生土器	鉢	12.0			5.9	ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○		良	浅黄橙色	にぶい黄橙色	外面スス付着
第30図10	3竪		弥生土器	甕		(26.8)	(6.0)	(12.1)	ハケ・ナデ・ミガキ	ハケ・ナデ・ミガキ	○	○	○			○	○	○	良	褐色	灰黄褐色	スス付着・黒斑有
第35図1	1土		土師器	甕	(13.5)			(4.7)	ナデ	ナデ・ケズリ		○	○		○	○		○	良	暗赤褐色	明赤褐色	
第35図2	2土		弥生土器	甕				(2.1)	不明瞭	不明瞭	○	○			○	○		○	良	浅黄色	浅黄色	
第35図3	4土		弥生土器	高杯				(3.9)	ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第35図4	4土	21	弥生土器	高杯			(17.9)	(6.0)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○		良	明黄褐色	明黄褐色	内外面スス付着
第35図5	4土		弥生土器	壺				(4.3)	ナデ	ナデ		○	○		○	○	○	○	良	にぶい橙色	橙色	
第35図6	4土		弥生土器	器台				(5.1)	ナデ	ナデ		○	○		○	○	○		良	にぶい黄褐色	褐灰色	
第35図7	5土		弥生土器	鉢				(3.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○			やや不良	黄白色	黄白色	
第35図8	5土		弥生土器	壺				(4.9)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい橙色	
第35図9	5土		弥生土器	壺？				(5.5)	タタキ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○			良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第35図10	6土	21	弥生土器	甕	(14.0)			(8.3)	タタキ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	灰黄色	浅黄橙色	
第35図11	6土		弥生土器	高杯				(3.0)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○		良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第35図12	7土		弥生土器	壺				(3.8)	ナデ	ハケ	○	○	○		○				良	淡茶色	淡茶色	
第35図13	8土	21	弥生土器	壺		(25.2)		(19.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄橙色	明黄褐色	黒斑有
第35図14	8土		弥生土器	甕				(3.2)	ミガキ・ナデ	ナデ	○	○	○						良	にぶい赤褐色	黄褐色	
第35図15	8土		弥生土器	壺				(4.8)	ハケ	ハケ	○	○	○			○			良	淡黄色	暗茶色	
第35図16	9土		弥生土器	壺	(12.3)			(5.9)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい橙色	にぶい黄褐色	
第35図17	9土		弥生土器	鉢	14.9			(6.8)	ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○		良	にぶい橙色	橙色	
第35図18	10土		弥生土器	高杯				(3.2)	ナデ？	ナデ？		○	○		○	○		○	良	黄褐色	赤褐色	
第35図19	14土		弥生土器	甕				(3.5)	ハケ・ナデ	ナデ		○	○		○	○			良	淡橙色	灰褐色	
第35図20	15土		弥生土器	甕				(3.9)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	明黄褐色	
第35図21	16土		弥生土器	甕				(1.7)	ナデ	ナデ		○	○		○	○			良	淡赤色	淡茶色	
第35図22	16土		弥生土器	壺				(8.5)	ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	
第35図23	18土	22	弥生土器	支脚				(7.0)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	浅黄橙色	

第5表　出土土器観察表（4）

挿図番号	出土遺構	写真図版	種別	器種	法量：（　）は復元径・残存高				調整		胎土							焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		外面	内面	
第35図24	18土		弥生土器	鉢				(6.0)	ナデ	ナデ		○	○		○	○	○		良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第35図25	18土	22	弥生土器	高杯				(6.3)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○		○	良	浅黄橙色	明黄褐色	
第35図26	18土	22	弥生土器	高杯				(12.0)	ナデ	シボリ	○	○	○		○	○		○	良	浅黄橙色	明黄褐色	
第35図27	19土		弥生土器	甕	(23.8)			(4.6)	ナデ	ナデ	○			○	○	○		○	良	黄橙色	灰黄色	
第38図1	20土	22	弥生土器	甕	(14.8)			(5.0)	ナデ	ナデ		○	○		○	○		○	良	褐色	褐色	
第38図2	20土	22	弥生土器	甕	(24.0)			(16.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○		○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	外面スス付着
第38図3	20土	22	弥生土器	甕			(7.2)	(6.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○	○	良	明赤褐色	黒褐色	
第38図4	24土		弥生土器	高杯				(2.8)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○		良	橙色	明赤褐色	
第38図5	24土		弥生土器	甕	(14.2)			(4.5)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○			○	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第38図6	24土	22	弥生土器	甕		20.5		(20.0)	ハケ・ナデ？	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	灰黄褐色	
第38図7	28土		弥生土器	高坏			(15.0)	(2.4)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			良	暗黄茶色	暗黄茶色	
第38図8	32土	22	縄文土器	浅鉢				(3.3)	不明瞭	不明瞭	○	○	○			○		○	良	黒褐色	暗黄褐色	リボン状突起
第38図9	33土	22	弥生土器	甕			(7.8)	(15.7)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○		○	○			良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	
第38図10	33土		弥生土器	高杯				(3.6)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	
第38図11	33土	22	弥生土器	甕		15.0		(10.2)	ハケ・ナデ	ナデ		○			○		○	○	良	暗赤褐色	暗赤褐色	黒斑有
第38図12	34土		弥生土器	甕				(1.8)	ナデ	ナデ	○	○	○			○			良	暗茶色	暗赤茶色	
第38図13	34土		弥生土器	壺				(3.5)	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○			良	明黄色	暗黒茶色	
第38図14	35土	22	縄文土器	浅鉢				(8.3)	不明瞭	不明瞭	○	○	○		○	○		○	良	黒褐色	暗褐色	
第40図1	39土		弥生土器	壺				(5.8)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○		○	○			良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第40図2	39土		弥生土器	壺				(4.3)	ハケ・ナデ？	ハケ・ナデ		○	○		○	○	○		良	黄褐色	黒褐色	
第40図3	39土		弥生土器	壺				(3.1)	ナデ	ナデ	○	○	○		○				良	黄赤褐色	黄赤褐色	
第40図4	39土		弥生土器	高杯				(4.3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○		○		良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第40図5	39土		弥生土器	甕			(7.8)	(4.3)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ		○	○		○	○	○		良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	
第40図6	39土		弥生土器	壺			(6.0)	(5.3)	ナデ	ナデ		○	○		○	○		○	良	明赤褐色	浅黄橙色	
第40図7	39土		弥生土器	甕			(6.6)	(2.6)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○	○				○	○	良	明赤褐色	灰黄褐色	
第42図1	一括	22	弥生土器	甕	(24.2)	(29.0)		(10.0)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○		○	○	○	○		にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	
第42図2	E10		弥生土器	甕				(2.1)	ナデ	ナデ		○	○		○			○	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第42図3	一括		弥生土器	甕				(6.3)	ナデ	ハケ・ナデ	○		○		○	○			良	暗茶色	淡赤色	
第42図4	D10		弥生土器	壺				(4.4)	ナデ	ハケ・ナデ	○		○		○	○			良	淡黄色	淡黄色	外面一部に丹残存
第42図5	一括	22	弥生土器	壺				(8.4)	ナデ	ナデ？	○	○	○		○	○	○	○	良	橙色	橙色	刻目突帯有

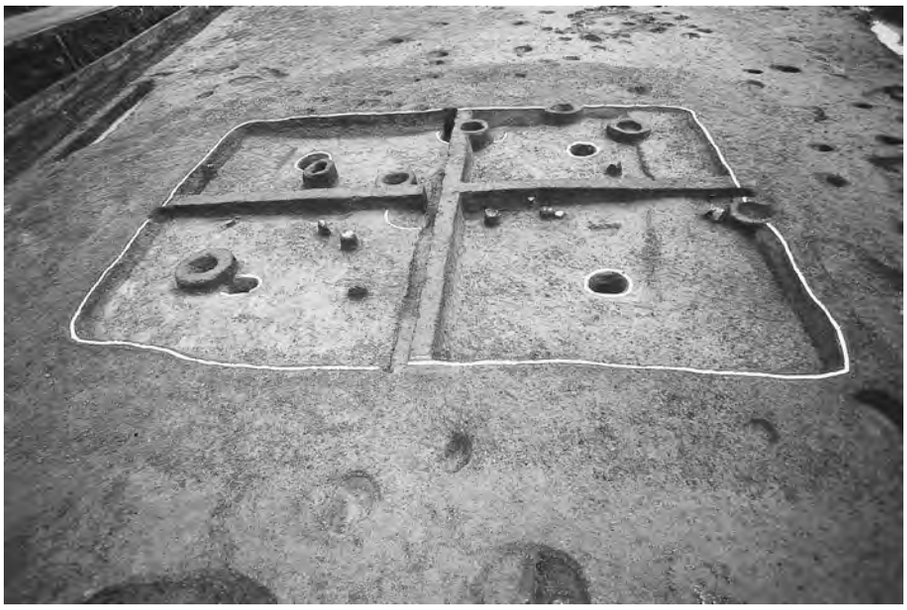
第6表　出土石器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置等	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重さ（g）	備考
第43図1	23	C11	剥片鏃	黒曜石	(2.30)	1.80	0.40	1.03	腰岳産
第43図2	23	12住	ナイフ形石器	黒曜石	2.20	1.00	0.50	0.87	針尾産？
第43図3	23	13住	ナイフ形石器	黒曜石	2.55	1.40	0.80	2.13	腰岳産？小国産？
第43図4	23	14住	剥片	黒曜石	2.50	2.50	0.60	4.22	腰岳産
第43図5	23	B7	スクレイパー	黒曜石	2.70	1.60	0.65	2.12	腰岳産
第43図6	23	4住	剥片	黒曜石	3.00	2.00	0.90	2.67	腰岳産？
第43図7	23	一括	剥片	黒曜石	3.40	1.90	8.00	4.38	針尾産？
第43図8	23	1住	剥片	黒曜石	4.35	1.95	9.50	5.75	腰岳産
第43図9	23	7住	砥石	砂岩	11.70	7.00	3.10	231.60	
第43図10	23	14住	打製石斧	片岩系	6.20	5.10	0.90	26.04	
第43図11	23	39土坑	砥石	砂岩	5.45	2.70	1.30	22.89	
第43図12	23	14住	投弾	凝灰岩	3.50	2.50	2.20	25.85	
第43図13	23	7土坑	砥石	砂岩	14.00	7.40	4.00	370.50	

調査区遠景（西から）

調査区全景（南から）

写真図版2



1号竪穴住居跡発掘状況（南から）

1号竪穴住居跡遺物出土状況

1号竪穴住居跡遺物出土状況

２号竪穴住居跡発掘状況（北東から）

４号竪穴住居跡発掘状況（北西から）

４号竪穴住居跡遺物出土状況

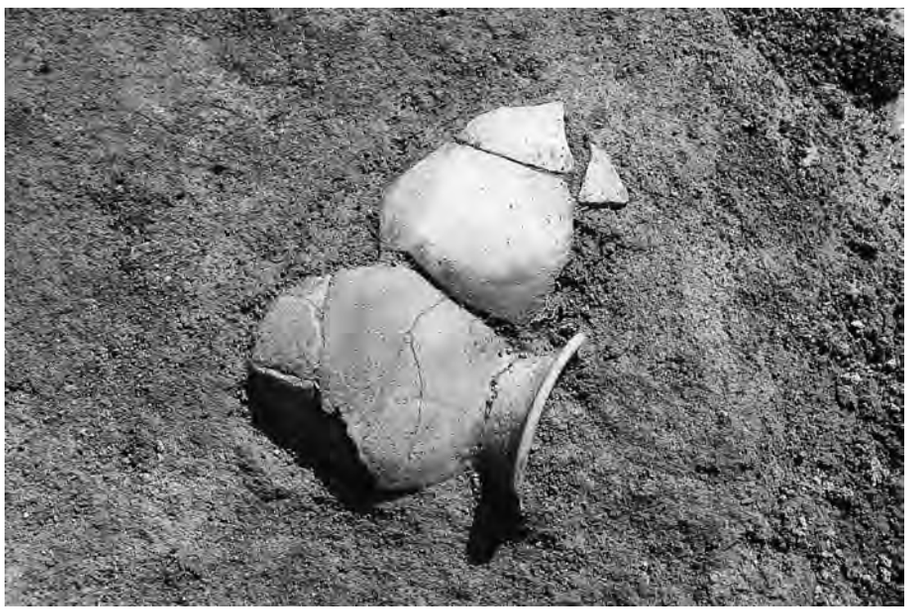
写真図版4

５号竪穴住居跡発掘状況（南西から）

５号竪穴住居跡遺物出土状況

５号竪穴住居遺物出土状況

６号竪穴住居跡発掘状況（南西から）



６号竪穴住居跡遺物出土状況

６号竪穴住居跡遺物出土状況

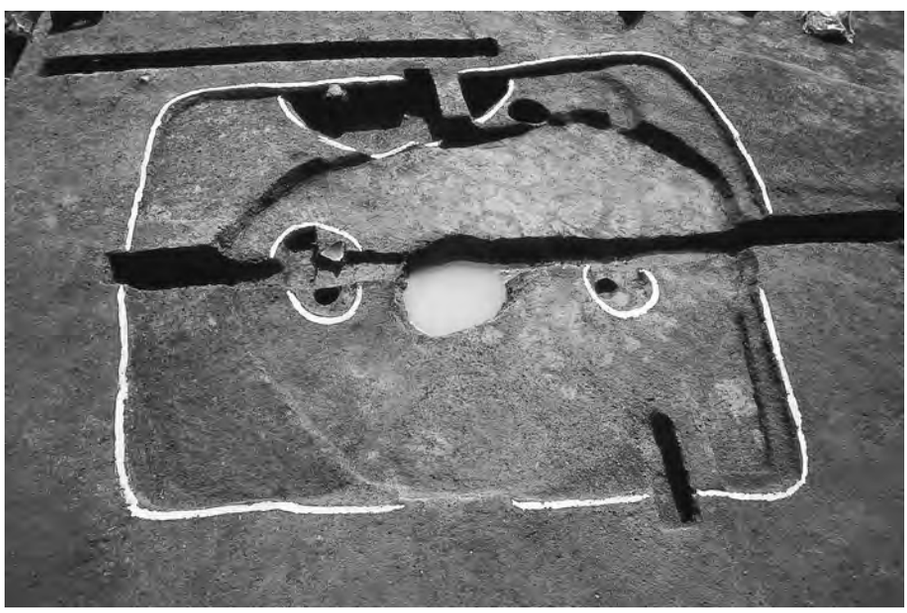
写真図版6

7号竪穴住居跡発掘状況（北西から）

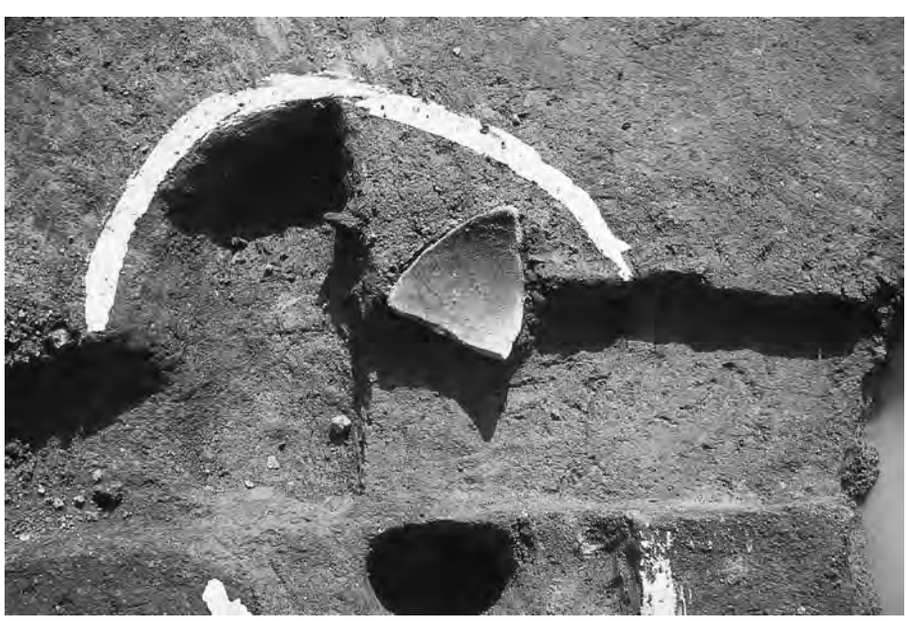
7号竪穴住居跡屋内土坑遺物出土状況

12号竪穴住居跡発掘状況（西から）

12 号竪穴住居跡遺物出土状況



13 号竪穴住居跡発掘状況（北西から）



13 号竪穴住居跡遺物出土状況

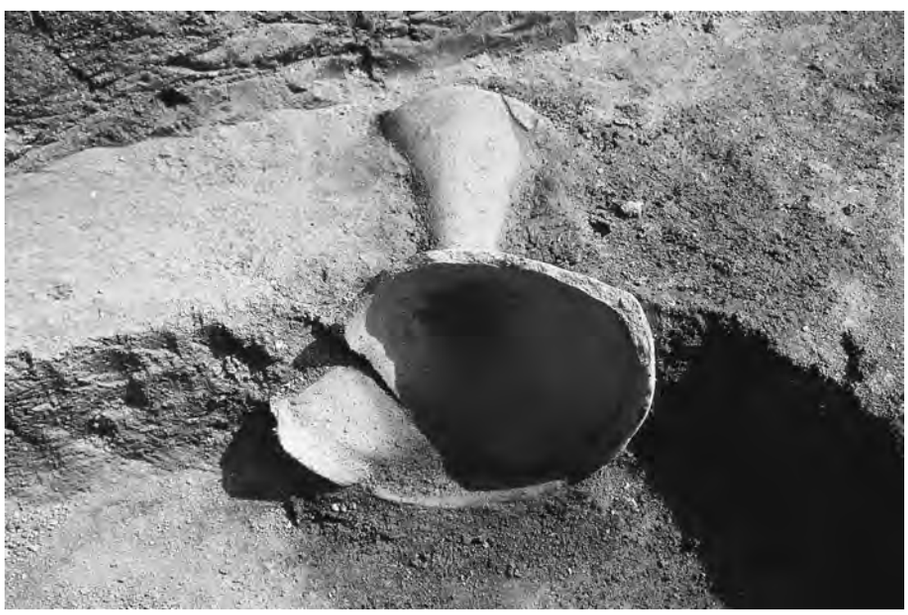
写真図版8

14 号竪穴住居跡発掘状況（北東から）

14 号竪穴住居跡遺物出土状況

14 号竪穴住居跡遺物出土状況

14 号竪穴住居跡遺物出土状況



14 号竪穴住居跡遺物出土状況

15 号竪穴住居跡発掘状況（南西から）

写真図版 10

16 号竪穴住居跡発掘状況（西から）

17 号竪穴住居跡発掘状況（西から）

1 号竪穴遺構発掘状況（南東から）

掘立柱建物発掘状況（南東から）

１号土坑発掘状況（北東から）

２号土坑発掘状況（東から）

３号土坑発掘状況（北東から）

５号土坑発掘状況（南から）

８号土坑発掘状況（東から）

９号土坑発掘状況（北西から）

10 号土坑発掘状況（西から）

12 号土坑発掘状況（西から）

16 号土坑発掘状況（南から）

17 号土坑発掘状況（北西から）

18 号土坑発掘状況（北東から）

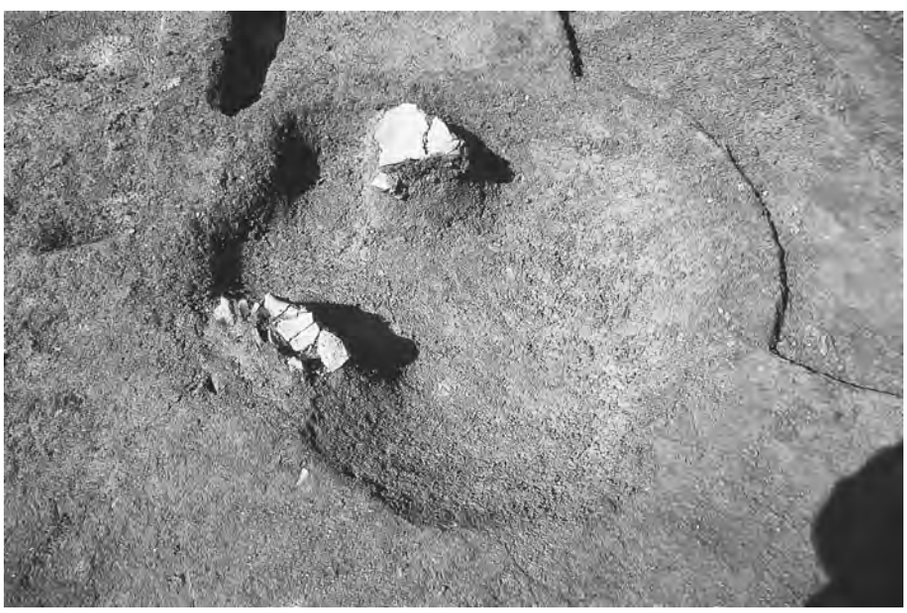
20 号土坑発掘状況（南から）

22 号土坑発掘状況（北西から）

24 号土坑発掘状況（北西から）

写真図版 16

27 号土坑発掘状況（東から）



33 号土坑発掘状況（南から）

36 号土坑発掘状況（北西から）

5-3

5-4

5-5

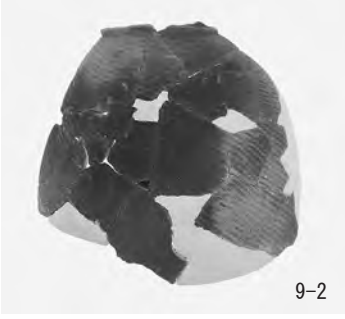
5-6

7-3

7-1

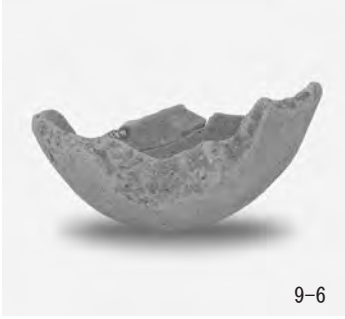
7-6

9-1


9-2

9-3

9-4

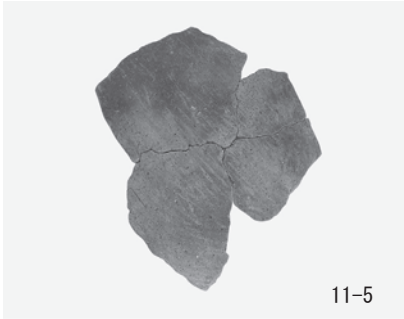

9-6

9-9

11-1

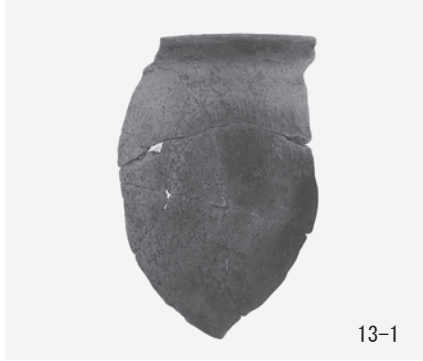
11-2

11-4

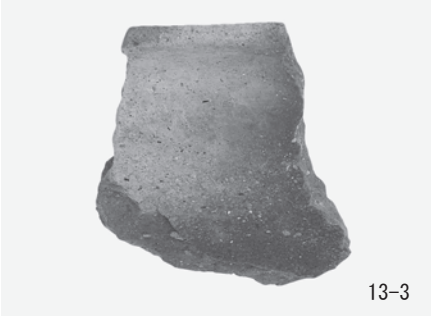

11-5

11-6

11-8

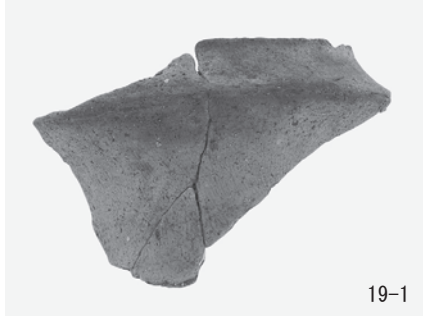

13-1

13-2


13-3

15-1

15-3


19-1

19-4

19-7

19-9

19-10

19-11

19-12

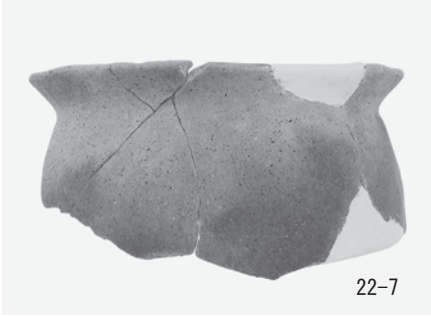
22-1

22-2

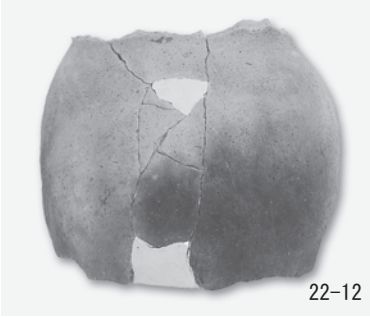
22-3

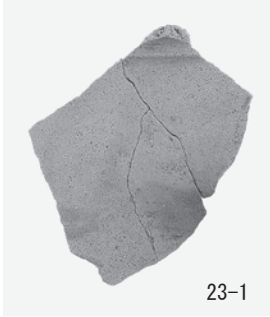
22-4

22-6


22-7

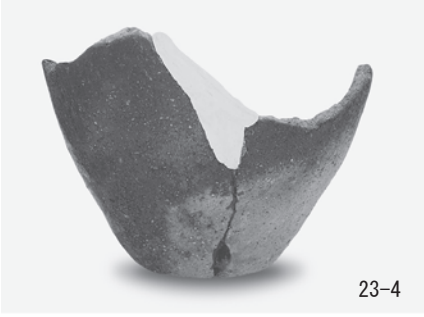
22-11


22-12


23-1

23-2

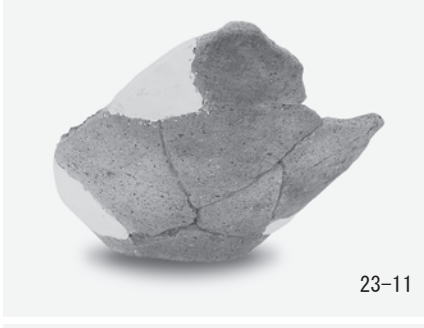
23-3


23-4

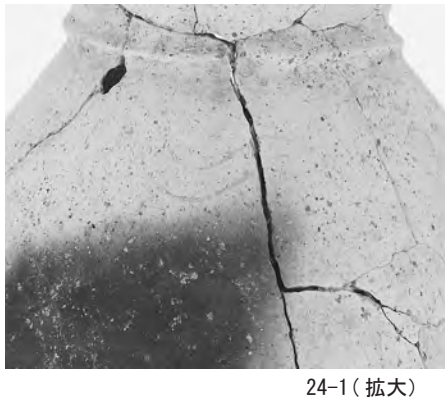
23-5

23-10

23-6


23-11

24-1


24-1（拡大）

24-2

24-3

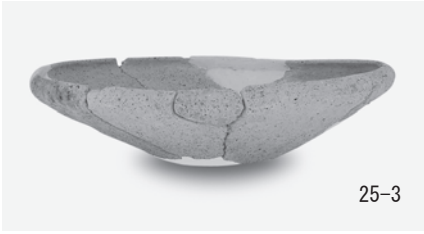
24-4

24-6

24-9

24-10

25-1


25-3

25-4

25-2

25-5

25-6

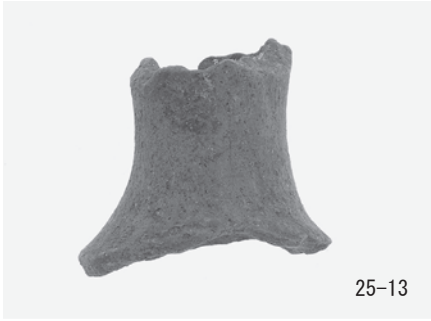
25-7

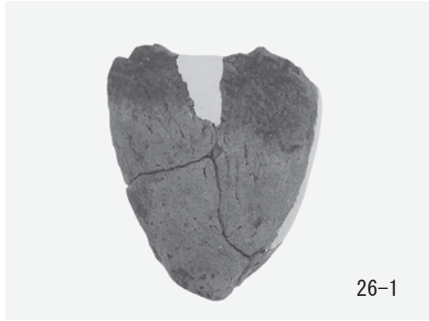
25-8

25-10

25-11

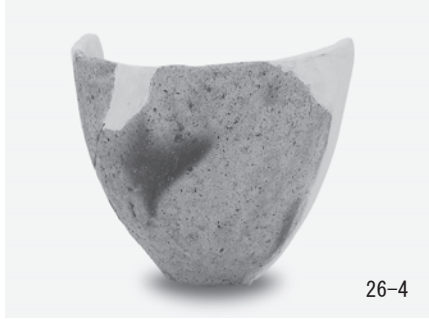
25-12


25-13


26-1

26-2

26-3


26-4

26-5

26-6

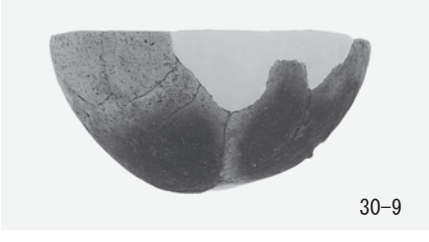
26-7

26-8

26-9

30-6

30-7


30-9

35-4

35-10

35-13

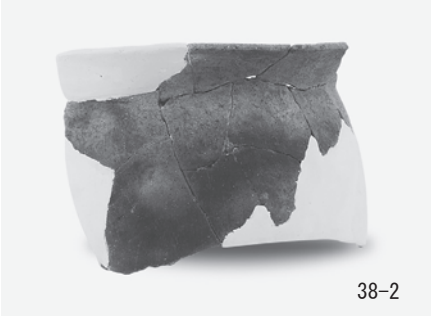
35-23

35-25

35-26

38-1

38-6


38-2

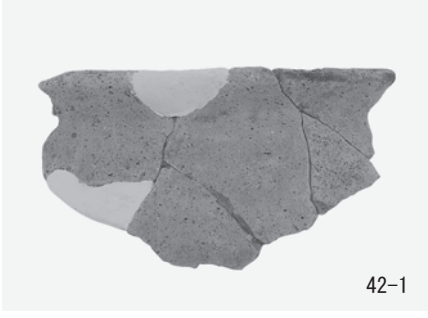
38-8

38-3

38-14

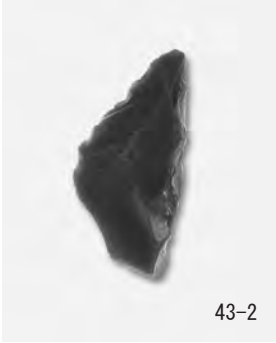
38-9

38-11


42-1

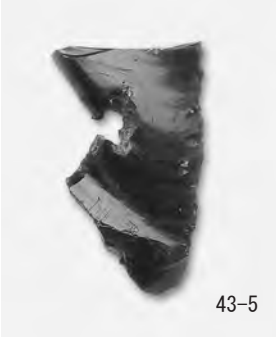
42-5

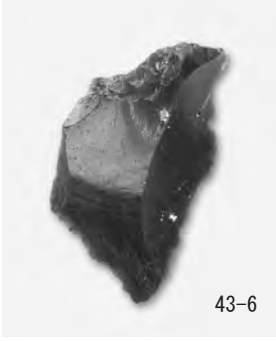
43-1


43-2

43-3

43-4


43-5


43-6

43-7

43-8

43-9

43-13

43-11

43-10

43-12

報　告　書　抄　録

ふりがな	くくりのいせき　3　おにしいせきのちょうさ
書　　名	求来里の遺跡Ⅲ　　小西遺跡の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	（3）
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	９１
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2010年2月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小西遺跡（おにしいせき）	大分県日田市（おおいたけんひたし） 大字求来里（おおあざくくり） 字小西1406-1ほか（あざおにし）	44204-6	204250	33°19′01″	130°57′55″	20041130 ～ 20050325	1,740㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小西遺跡	集落	弥生 古墳	竪穴住居跡　14軒 竪穴遺構　3基 掘立柱建物　1棟 土坑　37基	縄文土器・弥生土器 ナイフ形石器 剥片鏃 スクレーパー 打製石斧 砥石・投弾 剥片	

要　約	小西遺跡は求来里川右岸の沖積地に所在する遺跡で,今回の調査において旧石器時代から古墳時代の複合遺跡であることが判明した。調査では弥生時代後期を中心として、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡や土坑などが確認された。また、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代後・晩期の遺物が出土したものの、明確な遺構は検出されなかった。 求来里川流域では、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて集落の存在が確認されているが、時代が下るにつれ、上流へ向かって広がっていく様子が窺える。一方、本遺跡では古墳時代初頭を最後に集落が作られなくなる可能性が高く、その後調査地付近において、どのような土地利用がされていたのか、興味深い問題である。

求来里の遺跡 Ⅲ

ー県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（３）ー

小西遺跡の調査

2010年2月26日

編　集　　日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発　行　　日田市教育委員会
〒877-0023　大分県日田市田島2-6-1
印　刷　　(有)中央印刷
〒877-0012　大分県日田市淡窓2-3-1